

姫

カ

美

全

384.6

7

1

中村惕齋著

姫小美

致
也
美

中林軒齋書

比賣鑑目次

卷之一.....

述言第一

卷之二.....

述言第二

卷之三.....

述言第三

卷之四.....



述言第四

卷之五……………六一

述言第五

卷之六……………一九三

述言第六

卷之七……………三三

述言第七

比賣鑑目次終

比賣鑑第一編

卷之一

述言第一

此卷には、子ををしへて人となす道を述べたり。すなはち、小學の立教のおもむきなり。

人の親の子を思ふよりまさりて、ふかき心なかるべし。これをおもふには、その身に福德をなはりなことをねがふ。福とは何をかいふ、富貴にあらずや。徳とは何をかいふ、義理にあらずや。富貴は天にあれば、

いつくしむべきのみにしもあらず。又敬してうやまふべき道あり。故は、おやおほちのあと繼がしめて榮く末をはかるべき物なれば、愛に敬をそへて、わたくしの愛をいましめ、をしふる道をおろそかにすべからず。若教化をつゝしますして、或はそのあまえのまゝにいとほしみすぎ、或は遊藝ならはせて、もてあそび物となし、或ははふり捨て、なりゆきまかせなる父母は、子の身體をあなどり、天性をそこなひて、先祖の後をないがしろにするものなり。其罪のかるゝ所なくて、神明の御とがめかろきには、あらじ。恐れみ、惶れむ、心忘ることなかるべし。子ををしふるには、胎教を先とす。子の胎内にあるときより、すでにをしふる道あることをいへるなり。その法、太戴禮列女傳などいふ書に記

たゞねがひたるばかりにて得がたし。義理はわが本性にそなはれり。まなびてをさむれば、すなはち、あらはれて行はる富貴はもと天より徳ある人にさいはひする所なれば、徳につきたる富貴は、末ながく傳はる。たとひ徳をさめて、富貴を得ざる事あれども、徳にはさまたぐる所なし。義にそむけるは利なり。理にそむけるは欲なり。もし利を謀り、欲をかまへて、幸に富貴を得ることありといへども、かならず久しからずして、これを失ひ、おほくはかへりて禍の種となる。されば子のためには、ひたすら義理禮恭ををしへて、その徳を養ふべし。かりにも利欲傲慢にならば、し染しめて、わざはひの基をなすべからず。孔子のたまはく、子は親の後なり、あへて敬せざらんやと。それ子は愛して

せり。いにしへの婦人、子をはらめる時は、臥すときは側ち臥さず。立つ
 ときにかたしだちせず。居るときはかたぶきて居ず。席の直ならぬに
 も居らず。食にはことやうの味ひをくはず。きりめのゆがめるをだに
 くはず。身にひがごとをおこなはず。目にあしき色を見ず。耳にたはし
 き聲をきかず。いふまじき言葉を口にいださず。とるまじき物を手
 にだにふれず。夜に入るときは、まことしき書よませ。正しきふること
 をかたらせ。是を聞て心をきよむるなり。王后夫人などには、太師太宰
 やうの官人おのゝ其事を司り、非禮の樂を奏せず。不正の味ひをす
 すめず。萬のいましめをなせり。すべて起臥たちる見きゝいふ事、口に
 あちはひ、心におもふ事、みなたゞしく直にて、いさゝかもみだりなる

事なければ、其生まるゝ子、容儀もめでたく、才徳もすぐるゝなり。木草
 のたねをよくつちがひて生しぬれば、枝葉しげりて、花も實もうらは
 しきが如し。おほよそ、子の胎内にあるとき、母の心に感ずる所、善惡あ
 るによりて、子の本性したがひて異なり。人のおもて聲形の、鳥けだ物
 に似たる事あるも、懷胎のとき、母その物に感ずる故なりとかや。世の
 中に、花を愛する者おほし。ひとゝせがうち、庭の離につやゝ心を
 くす事しばしの花ざかりに、目を悦ばしむるためなり。しかれども、わ
 りなくかはゆしと思ふ子のためには、胎教をつゝしむ事なし。今は其
 すべしれるもの稀にて、かゝる事ありとだにいひしらざる淺ましき。
 それ人の子は、胎教をさへする事なれば、すでに生るゝ後は、いよく

藝目射る作法あり。此心なるにや、女にはさる心ざしなれば、此の禮をもちひず。こゝにはむすめうみても、藝目射ることあやまれるにや。そのうち三月を経て、母子をいだき、産屋出て父にまみゆ。此時父の詞に、謹みて従ふ事あらしめよといひて、子の右の手をとりて名をなづく。詞の心をしへをつゝしみて、よき道にしたがはしめよとなり。右の手をとる心は事をさづけてせさしめなんがためなり。母その答に、しるして成す事あらしめんといふは父の詞を忘れずして、教へて徳をなさしむべしとなり。是みなをしふる事に、生るゝ初よりはやくそのおもむきを定む。

子を生みて後は、乳母をえらぶ事を先とす。その心ばへ、ひろくゆたけ

ゆるびなくをしへよ。唐土のいにしへの人、男子を生む時は、床にふせ、裳をきせて、璋をもてあそばしむ位、たかく衣うるはしくして、其徳璋の如くなれといはへるなり。女をうむときは、地にふせ、むつきを着せて、紡錘をもてあそばしむ。くらゐひきゝに堪へ、衣裳もあるに従ひ、人につかへて業を勤めよといふ心なり。また産屋の口に男には弓をおき、女にはたなごひをおく。弓はをのこ帯びて、外ををさむる物也。たなごひは、女の身にかけて人に仕ふる物なり。おのゝ其用ふる所につきて、男女の辨別をはじめて人にしめすなり。生れて三日のうぶやしなひする時に、男子には桑の弓、蓬の矢をもて、天地四方を射る。をのこの心ざす所、遠く大いなれとの義なり。わが國のならひにも、うぶやの

り、人のよぶ時いらへをする事に、男子は早く、女は緩くせさしむいにしへの童部をのこは草を帯し、女は糸の帶す草は其の心兒の心その剛にならへとなり。糸は、ちごの心、その柔かなるに習へとなり。六つの年より、物かぞふる事を教へ、方角をさし示す。又手習をはじむ。七つより男女の別して、ひとつむしろに居す、同じ器物にて食せず。はじめて文をよみならふ。是までは男女の教へかはる所なし。八つの年より、男子は小學に入て、これより禮義音楽をならひ、弓射馬に乗り、字義を知り、算法をまなぶ。門の出入、座につき、物くふ事、必ずおとなしき者より後にして、人をうやまふ道ををしふ。九つよりは、日を數へて干支を知り、讀み習へる文の道理を聞て、その道に尋ね入るべし。十の年より、外

くあはれみ、したがひておだやかにやすらかに、うや／＼しく、おそれありてつゝしみふかく、ことばすくなき者を求めよ。唐土の王公の御子には、かやうの婦人を取りて母師となし、其徳をみちびくなり。次には慈母ありて、其心にしたがひ、また次に保母ありて、その身を養へり。是を三母と云ふ。大夫の子には、食母あり。又乳母ともなづく。養ひをしふる事をかねたり。士庶人は、その妻手づから子を育つる物なれば、母のをしへにあづかる所いとおもし。おほよそ、子の形心ざま、父母につぎては、乳母にも似る物なり。又子をやしなひたてし乳母は、其功にほこりて、家法をみだる事多ければ、はじめに選ぶ事深くつゝしむべし。兒はじめて物を食ふ時は、右の手をつかはしむべし。物いひそむるよ

に出て、夜書師の下に居り、三綱五常の道をもとゝして、勉め學ぶこと怠らず。その肌衣には布を用ふ。すべて幼稚より絹綿にてあたゝめ過ぎぬれば、身のおひたちかたからず。又はおごりの本となる故なり。十五を成童といふ。これより大學に入て、理を究め、心を正くし、身を修め、人に及ぼして、家を齊へ、國を治め、天下を平かにする道をまなぶ。二十にてかうぶりすれば、成人の事をふみ行ふ。是より絹着ることをゆるす。三十にて妻をむかへて、後に家業をうけて、公役を勤むるなり。女は七つより男にへだつゝりゐて、八つより閨の戸を出でず。母乳母、つねづねそのかたはらにすゑて怠りなくをしへよ。女の師を、いにしへは姉となづく。婦人の年老い子なくて、女徳をそなへ、女禮にあきらか

なるものをまねき入れて、女子にしへをうけしむる也。大やう女子は愛敬をむねとして、言葉かたちを柔かに人につかへて、物ごとよくうけ従ひ、よろづ心任せならざる様にと、おほし立つべし。又七つより四徳をかねてをしふ。その事くはしく下にしるせり。文は小學大學論語、孝經、列女傳、女誡などよみならはせ、九つ十の頃より、その道理をいひきこゆべし。又十よりは裁縫、績み、紡ぐ、わざをしへて、客人のあるじまうけ、祭禮のそなへ物など見ならはせ、手ならはすべし。をとこは三十にてめとり、女は二十にてよめいるとは、そのきはまりをいふなり。男は十六、女は十四にてより、嫁娶のむすびあるべし。むすめを人にいひなづくるを許嫁といひ、よめいる事をゆるす也。古へ唐土の女

かひもあしく、かた事がちに、読み書きも、裁ち縫ひも、みな人より劣りぬれば、うしろ指さゝれて笑はれぬ幸ひにして人にあかれず、子などもちたりといへど、我知らぬわざなれば、何をしへん事もかなはで、むすめは又その母にことならず。そのむすめ成人して、又人のよめ子となり、むすめをうみそだてゝも、また〱母におなじかるべければ、おやの一たびのおこたり、子孫の名をながす源となる。をさなき子持たるもの、深く願むべき事ならずや。

女に四徳あり。また四行とも名づく。周禮に見えたり。一に婦徳、徳は心にそなふる善なり。二に婦言、言は口にいふ言葉なり。三に婦容、容は身にあらはすかたちなり。四に婦功、功は手にとる業也。婦徳とは、かなら

子許嫁すれば、纓といふ物を衣にかく。身すでに人にかゝれることをしめすとぞ。許嫁する時は、笄す。はじめて髪あけて、かうがいをさす也。をのこの元服の義におなじく、女賓ありてあざなをつく。年二十なれば、いまだ許嫁せざれども、この禮をおこなふと也。これより成人の事をとりて、内ををさめ子ををしふる道をまなびしる。おほよそ人のむすめの七つ八つより、人に嫁する頃ほひまで、その月日いくほどもなし。男は父の手につきて、心長くも教ふべし。むすめは母、そのをしへいる。月日のすくなきをうち忘れ、いつの間にかは、えんづき近くなるにおどろきて、あはたしく何くれとしをしへなんとすれども、はかばかしくもえせで、むすめはやがて人の中にすみて、物いふことばづ

す。才智の世にすぐれたるをしもいはす。たゞ貞順愛敬の心をもねとす。よく身をまもり、人にさかはす、憐みひろく、つゞしみふかきをいふなり。婦言とは、必ず辯舌のあざやかなるをしもいはす。ただ聲ひきく言葉にこやかにて、数すくなく、うや／＼しきをいふ也。婦容とは、必ず容儀のなよびかに、衣裳のはなやかなるをしもいはす。たゞ身もちきぬきのそこきよく、ゐたちふるまひのいうにてしづかなるをいふなり。婦功とは、かならず藝能人にすぐれたるをしもいはす。女の事とする所、衣食の外なければ、績みつむぎ、裁ち縫ふわざなどは、かならず手づからしならひ、祭禮賓客のもてなしより、上下旦夕のことまでをもみな其のすべしりて、つねにも用意すべきなり。また、わが夫君おや

かたなどにまゐらす食物は、かならず、みづから心をつけて、みそなはしすゝむるを道とす。いとけなき子ををしふる事、人のよろこびいかれる顔色みしる頃より、ゆるびなくをしへいるれば、おとなしくなるにしたがひて、人のいましめをばよく聞きうくるものなり。大やう、子のあしくなり立つこと、父母、侍女、乳母などのをさなき内に、その本性をそこなふによりてなり。或はしばしその泣くこゑを止めんとて、これ得さすべし。かれあたへんとすかして、あとなき事なれば、聞きなれて後いつはりを常とす。これ表裏のものとゐなり。或はいふ事きかざるとて、おそろしき事どもして、たび／＼おとし入る、これ臆病のものとゐなり。或は氣にさか

ひたる物を、理をまげてそらうちなどして見するは、これ傲慢のもと
 ゐなり。或はまた、子をもてあそびて、心をなぐさめんために、いろ／＼
 の物とり出で、よしなき事どもいひてぞびやかしくつくるしめつ、忿り
 あらそはせつなどして、ひがみ曲れる癖つけ、貪りねたき心ひきいだ
 し、さるのみにあらず、何事もそのほしきまゝにして、いましむべき事
 をかへりてすゝめ、とがむべき事をかへりてわらひ、飽くかぎりわろ
 きさまに染めつけつくりなして、知恵づきたるのちに、いましむれど
 もきかず、うちはたりてもなほらざるを、本性あしく生れつきたると
 のみ思ふ事いとおろかにまどへるなり。桑の枝は小なるよりおさへ
 よ、長大なればおさへてもかゝまらずといふことわざは、このためし

ならずや。
 人の兄弟中あしき事も、おほくは親の片おもひによりてなり。稚子に
 なにかは褒貶するほどのことあらんや。たゞへだてなくおもふべき
 内に、物ごとと兄をさいだて、おとうとを後にして、その心ざまうちみゆ
 る頃より、敏き者はよきほどにほめて、過ぎたる所をおさへ、おとれる
 ものは憐みて、およばざる所をすゝめよ。しからば、いづれの子もひと
 しくなりたちて、おと／＼の間も末長くやはらくべし。若しさなくて、
 おとなしきより、いとけなきを愛し、兄とあらそひに勝てば、よくした
 りといひすぐる事、假初ながら度かさなれば、いつしかおと／＼の禮
 義をみだりまして、賢恩をいはず、心にあふと、あはぬとによりて、ひと

りを愛し、ひとりをにくめば、愛せらるゝ子、日々におごりをまし、にくまるゝ子、日々に怨をそへ、兄をしのぎ、弟をあなどりて、形をわけ、氣をつらねたる身も、つひに仇敵の如くにて、牆に鬨ぐの聞え、世にひるまり、家のはづかしめとなるぞ、淺ましき。

陽の性はくつよし、陰の性よわくやはらかなり。をのこは陽の類にて、陽の徳をそなへ、女は陰の類にて、陰の徳をそなふ。されど此の徳あれば、又さがあり。故に男女ををしへ入るに、おのゝその徳をやしなひて、その性をいましむべし。をのこの如くつよきによりて、よく物に堪へ、健かにして事をつとむるはよし。或はたけきに過ぎて人をしへたげ、争ひを好むはその性なり。あらかじめ、おさへてとどむべし、その

外ことながければ、さしおきて、女の上におよぶ、女子のよわくやはらかなるは、順の本なり。陰氣をさまり、靜なる故に、貞をそのまもりとす。されどもよわく柔なる物の性、たわみかゝまりて、物によりまどふ。よりにて、女の心おほくは、ひがみまがり、くゝりうたがひ、しうねくくやみがちに物ぐさし、又氣のをさまりしづまるは、年くれて冬の氣しきなれば、物を痛め、枯す事あり。故に、女の心多くは、人のまされるを、忌み妬み、いぶりに情うすく、意地悪し。また日くれて、夜のけしきなれば、ぐらくひそましきゆるに、うしろめたく物隠して、人のまへ、僞りおほし。此の類推して、たづね見ば、猶いかほども有るべし。みな心をつけてふせぎ、いましめずば、あしき方には、ながれやすからん。泥むや、父母寵愛に目

孔子の、のたまはく、これを愛してはよく勞する事なからんやと。人少
きうちにいたくからきめ見ざる者は、大やうよき人となりたゝず。さ
れば子をよく愛する者は、かならずをりく。苦勞をふませて、其心を
鍛ひなごむる事を忘れず。是を眞實の愛といふ。昔魯の公父文伯の母
敬姜が、文伯を誡めの詞に、民くるしむ時は物思ふ。おもふ時は、善心生
ず。身やすきときは溺る。おぼるゝ時は善をわする。善を忘るゝ時は惡
心生ずといへるも、此心なり。又むかし量光の中納言といふ人の母の
詞に、子の親に不孝なるも、あまりに大恩なるゆゑに、恩を忘れてなり
といへるも、げにさることぞかし。それ子を愛して教ふることなきを、
禽犢の愛といふ。鳥の子に餌をはこび、牛の子うしをねぶりまはすに

くれ、その子の衣食おきふし、人づかひよろづ心まゝにして、何にてもほしきねがひをかなへ、才智はたらきたる事あれば、ひたすらほめそやしてうちすぎ、驕慢、横虐、懶惰、放逸の根を植ゑおきて、成人ののち強ひてなほさんとすれど、更に益なし。男子は陽氣のさがぞともいへ、女子にも此癖付たるなきにあらず。偏に冬空の雷電なり。いとあやしくおそろし。さりとて年長くるまで、籠めおくべきにあらねば、縁にまかせて、人にかかけおくといへども、多くはそのをとこ、舅姑にあかれて、また父母のあつかひぐさとなる。おやのみづからとる所なれば、子のみを責むべからず。まして子を愛する道しらすして、かへりて害する事しつる咎は、天地にのがるゝ所あらんや。

孔子の、のたまはく、これを愛してはよく、勞する事なからんやと。人少きうちにいたくからきめ見ざる者は、大やうよき人となりたゝず。されば子をよく愛する者は、かならずをりゝ苦勞をふませて、其心を鍛ひなごむる事を忘れず。是を眞實の愛といふ。昔魯の公父文伯の母、敬姜が、文伯を誠めの詞に、民くるしむ時は物思ふ。おもふ時は、善心生ず。身やすきときは溺る。おぼるゝ時は善をわする。善を忘るゝ時は悪心生ず。といへるも、此心なり。又むかし量光の中納言といふ人の母の詞に、子の親に不孝なるも、あまりに大恩なるゆゑに、恩を忘れてなり。といへるも、げにさることぞかし。それ子を愛して教ふことなきを、禽犢の愛といふ。鳥の子に餌をはこび、牛の子うしをねぶりまはすに

に和睦五つに儉質六つに寛惠七つに講學ひそかに文字の義によりて思ひ見るに、正静とは、正しく静かなるをいふ。即ち貞の義なり。女子親の手にある内は、奥深く籠りゐて容易く人に見えず。男にかゝりて後は、他人にまじはる事あれども、二心なき守りは、一生かはる事なし。これその夫につかふる道。婦徳第一の重き事也。卑弱とは、いやしくよわきなり。則ち順の義なり。天高く、地ひきく、陽つよく、陰よわきは、道理のわかれて明かにうつしかへられぬ所なり。よりて女は地にかたどり、陰にしたがひ、その年頃にも、種姓にもよらず、たゞ我身をいやしめて、人をうやまひ、おやの家にては父母、人の家にては夫舅姑に身を委ね、心をかたぶけて、かりにも我身まかせなる心あるべからず。およそ

たとへたり。又教ふる道を知れども、子の勞りをおもひて、かすくうちすぐるを、姑息の愛といふ。しばらくやすからしむと云義なり。かくてその子の漸あしくなりもてゆくことを覺えざるもの世に多し。これを古語にも、人その子の悪しきをしる事なしとはいへり。よき人はしからず。愛しても、その子の悪しきを知るところ、禮のをしへには見えられ。朱子世の女人をみちびかためたに、一部の書を小學のやうにつくらんとあらましありけるが、事果てずしてやみぬ。只その七編にわかつて題目ばかり残り。大賢君子の跡なれば、是をしも教の一ふしにあらめて、婦徳の法に取るべし。一つに正静、二つに卑弱、三つに孝愛、四つ

又のち／＼までも自ら心がけて、學びならへとの義なるべし、それ教へまなぶ道、數多にわかるゝといへども、きはめて見る時は、誠一つにこもれば、誠といふは他にあらず、人の世に生れて、いまだ私欲にそまざるさきの、ひたすらにすなはなる心なり。子を育つるもの、此の一心をよくやしなひたて、わろきならはしにて、そこなひ破る事なきを、簡要のいたれる事とするべし。此誠だにうしなはざれば、四徳百行の根となりて、いづれの道もすゑ通らずといふ事なし。誠なくして、身をまねぶばかりは、四徳も百行もみないつはりとなる。いにしへ孟子幼かりし時、隣に豕の庖丁するを見て、その母に、あれ何のためぞと問はれしを、母戯れて、汝にあたへんためぞといへる。そのあやまりて、偽りを

敬して、慎む心は、みな貞より出で、愛して、慈む心は、みな順よりいづ。故に貞順は愛敬のもとなり。孝愛とは父母舅姑を孝養し、子孫を慈愛する也。和睦とは、やはらぎむつるゝなり。兄弟相嫁、其外親類と中よく念比にする道也。儉質とは、つまやかに、すなほなるなり。無用の事に物をつひやさず。よろづに綺羅かざりを好まざるをいふ。これ家を治むる道なり。寛惠とは、心ゆたかにて、恵みある事をいふ。これ下を憐み、衆をめぐむの道、すべて人のためよきやうにと思ふ心だてをいふ。此の四つ儉質は、みづから慎む道なれば、貞の守りにしたがふ。そのほかは、みな人を慈しむ道にて、順のほどこしなり。講學とは、學問をならはすなり。上六つのをしへを父母にうけ、女師にさづかりて、身にならはし、

しへつる事を悔いて、ひそかに豕の肉を買ひもとめて、孟子にあたへられけり。これ誠をやしなふ道を大事にとれる故なればなるべし。孔子のたまはく、性相近し、習ひて相遠しと。人の本性うくる所の天命によりいへば、聖人凡人のかはりなく、みな善にして惡なし。されど生るゝ時に、うけ来る氣の清濁によりて、敏く賢きもあり、暗く劣れるもあり。これを氣質といふ。然れども、生まれしまゝの氣質の性は、いづれもあひ近くして、そこばくのかはりなし。既に生れてのち、私欲風俗に慣れ染みてより、人々のよしあし日々にとほく、月々にへだたりぬ。古歌に若草を題にて、

おそくとく己がさまふ咲く花もひとつ二葉の春のわか草

とよみけるぞ、此心にちかゝらん。されば子はをさなきよりそのならはしを慎み、やゝ人となるより、そのつとむる業と交はる友とを選ぶべし。古への孟母は、子のならはしのあしきを見て、家居を三たびうつせり。朱にまじはれば赤く、墨にまじはれば黒し。蓬麻の中におふれば、たすけずして自らなほしといふも、みなその習ひを選ぶいましめなり。是をある口すさびに、

よき人にむつびてあしき事あらじ麻の中なる蓬見るにも
とよめり。ふるき言葉に曰く、おやに孝あれば、子も亦孝有り。又曰く、父母ただしき時は、子孫孝慈なりと。凡そ子を教へんとならば、父母まづよく身を修め、家を齊へて、其の手本となるべし。これを教の本しる人

と云也父母の身直ならずして、子をのみ責むる事、ゆがめる物を定木に用ふるが如くにて、教化おこなはるべからず。宋の呂榮公の父申公、德行しづかに、おもくしく、言葉すくなにて、よろづ心のかゝづらひなし。母の魯夫人、心ざまおそろべくして、禮法あり。榮公をかぎりなく愛せられしかども、幼きより事ごとに禮儀をふみならはしむ。十の年より、冬寒く、夏暑きにも、終日父母長者の傍に侍り、衣冠ぬぐ事をゆるされず。外に出でありく時、店屋のうちなどへは、かりにも立寄らず。市の巷にいひ觸るゝ言葉、うかれたる物の音などは、一度も耳にふれず。不正の書、非禮の色は、一たびも目にふれず。しかのみにあらず、焦先生というて、かどくしくおそろしき師徳のありけるを、その家にま

ねきいれ、榮公兄弟を學生として、その教訓をうけしむ。諸生いさゝかあやまちあれば、先生呼びつけおきて、物いはず。諸生おそれふし、いたく懲りたるを見て、やをら氣色をゆるべけり。これによりて、榮公の才徳なりたちて、後はるかに世の人に越えたり。内に賢き父兄なく、外におそろゝ師友なくては、よく成立つ者、少なかるべしと、榮公後までもいへりし也。子ををしふる道、誰もかくあらまほしきわざなるべし。孔子のたまはく、禮をまなびざれば、以て立つ事なしと。凡そ禮儀は、身ををさむるかたちなれば、常々たもちまもりて、しばらくも放らし捨つべからざるものなり。ゆゑに、禮儀をまなびざるものは、此身をおしたてゝ、事を行はん便なし。をとこ女をわかず、をさなきより、常に手

威儀名目まで、一々くからず習ひえて、そのとき身になへる程を、よくとりなして用ふべし。しかれども、たゞ聞き習ひ書き傳はれるばかりにて、うち／＼手なる事なくば事にのぞみて惑ひ易く、そのさまもあしかるべし。此ほか公家の装束衣紋輿車などのかざり、武家の馬物の具軍陣などの法は、その家につきてくはしく習ひつたはるべし。女子は女禮にむねとする事を、とりわきてよく習ふべきなり。女の藝能は衣食を調じ、禮式を知るより外大様知らでもよし。されど、歌書草子など讀むに、その事には取る所なくとも、言葉の心讀みくせなどは、假名にてしるしおく事もあるべければ、あらまし讀み習ひ聞きおくべし。假名ことば讀み馴れざる者は、つねにいふことよこなまり、片

習すべき事也。これを習はずには、さるべき師をもとむべし。されどそのおやなども、よく心得たる方にあらざるべし。くはしく教へ入る事難かるべし。古の經禮三百、曲禮三千は、みな聖の御教にて、三禮の文にしろし傳れり。今の世の公家武家の有職がたも、古禮に出でたりといへど、世かはり國異なれば、しひて一つにはおこなはるべからず。此の國に生れたるものは、古くより傳れる諸家の禮式起居、振舞身のよそほひ、化粧方、食ひ方、積かたなどの品々、通ひの作法、文の書やう、帳臺座敷のかざり、元服嫁取、産屋の儀式など、いづれもしきたれる習ひあり。葬禮祭禮は佛家のする事も、おほくは古禮をとりたる物なれば、古今をくみはかりて、おこなふ人も世に有りと見えたり。かやうの事ども、その

おほし。管絃たち合の外ひとりかきならしても、つれづれなぐさみ心をすかす益あり。かの今様の謠ひ物つけたる筑紫箏、三味線、胡弓などいふ物は、つちめくら遊女、乞丐の手ずさびなり。その聲うらみおぼれて、人の心をとらかしやぶるくせ物、非禮の淫聲、これに過ぎたるはなし。いたくいましめて、耳にもふるべからず。碁、双六、象戯などは、人にあひむかふばかり知りたるもよし、好みてするはあし。貝おほひ十種香なども、女のもてあそびなれば、そのすべならひおきて、一座の興に人とともにするもあしき事にはあらざるべし。父のみちびき、母のをしふる心は、かはる事なけれども、人のをさなきほどは、男の子にても、母にちかづきてあれば、教化のよる所、淺からず。まして女の子は更

言おほく聞きにくし。琴、碁、書畫のたぐひには、第一手書く事、其用おほし。書は心畫といひて、文字のすがたに心ざまあらはるゝ物なれば、心たゞしき時は、文字のかたちもおのづからうつくし。眞名をとこ、文字といふ。眞草行の品あり。假名を女文字といふ。ひら假名あり、かた假名あり。いづれも古の能書のあとによりて、その心をならひとるべし。今の世の女、ひたすら平假名の消息をみだりに書きちらすばかりを、手習ふ業とする事、心をすてゝ色かたちのみ、つくろひかざるなり。是しも手書くとはいふべからず。すべて物書く事、墨濃く磨り、筆を染めあかせて、靜かに書くをよしとす。次に畫かく事、衣裳に用ふる事あれば、少し心得てよし。樂は琴、琵琶、女のとる所なり。むかしより女に上手

くして、ひたすら子にうちまかせたる母は、物くるゝ子あれば、孝行と
 のみ思ひて、その物何によりて得たることをしらす。子の身の榮え
 を見て、ともにおごりを極め、その身のほどを忘るゝゆゑに、禍をまね
 き家をほろぼすもの世に多し。むかし田稷が母、黄金の送物を返しけ
 るは、子の科を恥しめてなり。文伯が母、芋をうみて止ざりけるは、子の
 怠りをいましてなり。又漢の陳嬰といふ者、ゆゝしき武士なりけれ
 ば、秦のみだれに二萬の武者集りて、陳嬰を王にたてゝ軍をおこさん
 と云ひけるとき、その母陳嬰を諫めて、そこは門賤しき家に生れ出で
 たり。今俄に貴き名をえん事、つねならぬ不祥なり。たゞその兵をゐて、
 さるべき大將に従へるならば、諸侯の位を得べし。事ならずして遁げ

なり。古語に曰く、その子を知らまくおもはゞ、その母を見よと。又曰く、
 父の子ををしふることは、母に一倍して、子の母に似る事は父に十倍
 すと。また趙の佛盼といふものゝ母、云ひける子のをさなくしておこ
 たれるは、母の科なり。人となりて後、つかはれざるは、父の科なりと。宋
 の二程子の母も、子のあしくなり立つことは、大様母その科をかくす
 ゆゑに、父しらすしてたゞす事なければなりと云へり。みなゆゝしき
 いましめの言葉なり。人の母たらんもの、心にこめて忘れずば、子をを
 しふる道おそれふかく、おこたりなかるべし。
 女は男におくれて後、子にしたがふ物なりといへども、父失せて子の
 わかきほどは、をしへいましむる道、偏に母の力による事なり。此心な

ら財寶をかぞへて、人をも頼み、家をもたのむ事おほくば後に禍とな
る。文中子のいへらく、嫁娶に財をはかる事、えびすの道なれば、君子は
その里にだにも入らず。古は男女の族、おのゝ徳をえらぶ財を以て
禮をなさずとも、しその聲賢くばいま貧賤なりとても、後には富貴に
も成るべし。若しおとれる者ならば、いま富みさかえりとも、後に衰へ
なんもしられず。いはんや家の盛衰は嫁の性行にもよる物なり。もし
たゞ一時の富貴を目にかけて、すなはち之れをめとりなば、その嫁か
ならず、男をかるしめ、舅始をあなどりて、奢のもと妬みの種となり、後
のわづらひ限りなかるべし。たとひ女のいきほひをかりて、貴人にな
るべくとも、をのこの志あるもの心に恥づる事なからめや、次に財を

隠るとも、世に名を指るゝの迄の事あるまじきぞと云ひければ、陳嬰
母の心に従ひ、項羽が叔父の項梁につきて、上國柱の位をえたり。項氏
亡びて後、漢の高祖に従ひければ、棠邑侯に封せられけり。天を畏れ、身
を省みて、子と共に、おごらざりければ、難なくて、その末榮えけるなり。
嫁娶の事、娶いるを嫁といふ。嫁とるを娶といふ。また婚禮ともいへり。
それ婚禮は、二姓のよしみをあはせ、上は祖宗をうけ、下は子孫をつぐ。
その事いとおもければ、ふかくはじめに慎むべし。されば周語には、婚
姻を禍福の階なりといへり。男女の親家の風儀、子の性行を見合せ、彼
をも選び己をもかへり見て、たがひに似つかはしくとりむすぶべし。
かくの如くなれば、かならず末榮るゆゑに福のもととなり。若しひたす

たのみて女を嫁する事いよく愚なり。欲は止む事なく財は限りあり。むこの家女によりて財をもとめんに、求めてたらざる時は必ずその嫁を苦しむ。よりて終にはひき別れて仇となる事おほし。されば嫁娶に財をいふものあらば其に語らはざるがよきなり。

胡安定先生のおもへらく、むすめを嫁するには必ずその家われよりまさりたる方なるべし。嫁をとるには必ずその家我に如かざるものをとるべし。さればむすめのよめづかへよく、いましめ慎むものなり。たがひにかく心得なば嫁娶も時をうしなはず。親類もながく和ぐべし。されば白樂天が詩にも、富家のむすめは嫁しやすく、嫁する事早けれども、そのをとこをかるしむ。貧家のむすめは嫁しがたし。嫁す

る事おそれれども舅姑に孝ありと作れり。をとこをかるしむること、すべて女にふさはしからぬためしなり。むすめをあなどらせじがために、我よりおとりたる家に入る事を愛するに似て、愛する道にあらず。かへりて疎るべきもとゐをまねく也。よめの力をたのまんだめに、我よりまされる家にもとむるは、ひとへに利にまどへる志なれば、さらにまた云ふにも足らず。女はたかきもいやしきも、たゞをここに從ひ、舅姑に仕ふるものなりといふ一筋の道にふみまどひて、利欲におもひつき、富貴をたのむかたらひの行末はかくしからざる事むべならずや。

漢の王吉が言に、夫婦は人倫の大綱。天壽のきざしなり。世俗の嫁娶甚

てその禮をなす。よりて此くやみなかりしとなり。
 いにしへ唐土の嫁取には、をとこ先づ行きて女をむかへとる。これを
 親迎といふ。むかへに出づる時父杯をさして、子に命ずる詞あり。その
 所にゆきて、汝がたすけをむかへて、わが宗廟の祭をうけ、つとめひき
 ゐて母が世繼とせよ。汝が愼むこと、始め終り常あれといふ。又女をお
 くるるとき、父の命ずることばには、いましめよ、つとめよ、夙におき、夜
 に臥して、舅姑の命にそむく事なかれ。母はむすめのひばを懸けたな
 ぐひを結びてつとめよ、つとめよ、つとに起き、よはに臥して、閨のま
 もりにたがふことなかれ。そのほかの門の内までおくり出て、大帯を
 かけ、父母のいましめをば再び云ひきかせて、愼みうやまひて、父母の

だ早しい。まだ人の父母たる道をしらすして子あり。是を以て教化
 あきらかならずして、民おほく天すと。男女十五六にもたらすして、子
 あれば、いまだ人のおやたる道知らざるゆゑに、子の教化明らかなら
 すして、人の命もおほくは短きなり。天はわかじに、壽はいのちながき
 をいふ。また男女をさなきより、夫婦をさだめおく事も、大様末とほら
 ざる物なり。初はあるべあしきやうにおもへど、時うつり事かはる。後
 に或は男女の性行をとり、或はやまひづき、或は家おとろへ、所を去り
 などする事ありて、くやみ出で來て、契をかへんとするときは、人した
 がはすして、訟におよぶ事あり。司馬溫公の家には、先祖よりの法にて、
 男女ひとなる後に、縁をかたらひ、すでに定りぬれば、數月を経ずし

きよむる事はよめづかへのつとめなれば、是れをあたへ、なんぢの實
とす。ねがはくは、朝夕色おだやかに心うや／＼しくて、人ゆるべよと
いふとも、みづからゆるぶ事なかれとぞいひ聞えける。
むすめを人につかはして後、猶よく心すべき事おほかるべし。むす
めの里歸りして、父母に逢ふを、歸寧といふ。歸寧は絶え／＼なるぞよ
き。その父母にとほざかる時は、をこの父母にしたしむ頻にまうで
來て、住みうきことのみをつげかたらば、父母もいつしか腹あしくな
りぬべし。つきしたがへる女どもの、ゆき／＼のしげ／＼しきも、大やう
彼方の事あしざまにのみいふ物なれば、是れもうと／＼しきをよし
とす。一たび人にまかせぬる上は、世にことならぬほどの事さらに聞

詞を聞きあがめ、つとに起きよはに臥して、そのをしへをあやまつ事
なかれ。つねに此帶紐を見て、思ひ出よとなん。これ古の聖人さだめお
き給ふ禮儀なり。ことばによりて、子にしめす大要心得べし。すべて、こ
れ敬の一字にもるゝ心なし。
婦の字をよめともよみ、をんなともよむ女をへんにて、帚といふ文字
をつくれり。女は人につかへて、家の内掃除などする物なればなり。む
かし晋の庾袞といふもの、此心を得たりけるが、其兄身まかりて、むす
めの有りけるを、或者にゆるしておくりやるとて、草にて塵取帚を作
り、一族のあつまりたる中へもていで、むすめにとらせて、いましめ
ける詞に、汝今日よりはしうとしうとめにつかうまつるべし、家掃き



ことがむる道なしむかし唐の代宗の時郭子儀といふ大名あり忠節
 勳功世にならびなかりしかば帝昇平公主と申す皇女をその子郭曖
 に給はりけりされど夫婦の中あしかりければ或時物あらそひにつ
 きて爾は父の天子なることを頼みてかや我父は天子の位を何ぞと
 しも思はでならざるなりと云ひければ公主いと腹立ちて車を馳せ
 内に参りて此事はやく奏し給へり郭子儀はゆゝしき大事いで來れ
 りと思ひて郭曖をいましめおき自ら朝参してその罪を待ちゐたり
 帝は公主の訟をも聞きいれもし給はで郭子儀を召され心にぶらず
 耳つぶれねば家の親とはなられずといふ事あれば女童の聞の内な
 る言葉のする聞き入るゝ事なかるべしとかへりて慰めさせ給へで

事なしにぞ通させ給ひける人の嫁の親たるものゝ心は誰れも誰れ
 もかくこそあらまほしくねがはしきわざなれ夫婦一體なれば女は
 身もとによらぬことわりを公主はじめより知らせ給はばなど二人
 の中あしき事もありなんや母師のをしへも明かなるべきを聞きう
 けたまはざりしぞおろかなりける
 いにしへ揚朱といひける人は道の巷に立ちて泣き墨翟といひける
 人は白き糸を見て悲めり人のおこなふ道一たび踐みまどひぬれば
 するのわかれて遠きことを知らずいくそばくならむ心の物にうつ
 る事そのいろつひに如何なるべき一たび染みぬる後は改むる事か
 たし三子のなげきの深かりつるは此の故にこそありけんかしされ

とし不孝を五刑の極りとする也。それ天地は物を生々する事のみをその心とす。人此生々の心に依りて生る。故に人の心も天地にかはらずして、生を好み死をにくますと云ふものなし。これ則ち仁道のもとなり。天地はよろづの物をうむ大父母なり。父母は天地に代りて、わが身をうみ出せる人なるによりて、仁愛のあらはれ行はる。こと親子の孝慈よりも切なるはなし。次に人民をいつくしみて、萬物をあはれむにおよぶ義禮智信の道も、又みな仁心によりて行はる。孝を百行の源といへるは、これによりての故なるべし。

そも、天地の物を生ずる事、たゞうみ捨たるのみならんや。すでにうみ出せる後は、人に仰せて養ひ成さしむるなり。中にも人の身は、其

幼きほどこれを生みたるものには、ぐくませ、すでにおとなしくなる時には、うみてはぐくみたる人を生まれはぐくまれたるものに、老の後までつかへ養はしむ。故に天下の人数限りなければ、親の慈愛と子の孝敬とは、他人にゆだねおきてのがれさりがたなるべし。まして子の身としては、父母は天地のかはりなれば、誰れかよく天地の外にのがれて出るもの有るべき。凡そ人の身の百體は、みな天地よりいで、父母よりわきて、うけ來れる物なれば、此身の外の衣食家財は云ふにも及ばざる事なり。貴賤貧富のをり所は、天地より授けらるるもあり、父母より傳へしむるもあり。すべて皆天地の命せらるる所也。これ富貴におく事は、其人の善を行ふに心やすく、たよりあらしむる也。是れ

はち兩親は内外の神明なればなり。内明かならず、外のみ行ふべからず。又宣はく貴き賤しきとなく、家毎に兩宮おはしますなり。此兩宮によく事へて、常に欽びの鈴の聲高く、出入人のあしのはに恨むる心なく、あがめてまうでぬるならば、天よりは實の雨を降らし、地よりは一切の財涌出し、天神も地神も夜晝に影向のひまなく、願ふ所一として叶すと云ふ事あるべからずと。それ内外の兩宮とは、内宮の御體は日、外宮の御體は天なるべし、天は地をかね、日は月をかね、日月はすなはち天地陰陽の精靈にて、日は父の神也、月は母の神なり、父母の恩、天地日月にひとしければ、是れに仕ふまつる道、ひとへにあがむべく敬ふべく、恐るべく、慎むべきのいたれる所也と知るべし。毛詩の蓼莪の篇

を貧賤におく事は、その人の心を鍛ひ身を堅めて、才徳をなさしむる也。是れも皆天地の恵みなり。天地の我れに親しき所より云ふ時は、則ち父は子の天なり、母は子の地なり。天地の恩の厚き事、その限りなし。人これを報せんとならば、たゞ父母を尊び親みて、身を盡し心を極めてつかへ奉らん外に、更に餘の道なし。もし父母の心に叶はざる事あらば、すなはち天地の神明にそむくなり。その罪の大きいなる事、天地の間に容るゝ所なし。おもふべし。生育の恩、孝敬の道、かりにもあだおろそかに心得べからざる事を。昔ある神の謠宣に宣はく、なべての貴き賤しき人、天を祈り地をまつりて、もろゝの神をいのらんより、汝める父母によくつかへよ。すな

ばしむれども、外に出る時は必ず懐にいだく。外より歸り入る時は、又
 まづ子をいだきて愛する也。是は猶暇なきほどの養ひをいへり。わづ
 かに智恵つきたる頃ほひより、つや／＼心にこめて教へ立てられし
 劬勞はまた更なり。よりて孝行の功德を以てこれを報せんとすれど
 も、その恩廣大なる事、天の限りなきが如くなれば、報じても報じつく
 されざるは、父母の恩なるべし。明の郝敬がいはいく、君の恩厚けれども、
 身を捨てれば報するにたれり。是身はわが物なればなり。親のために
 は、此身も親のものなれば、身をすてゝも報するに足らず。泥んや身の
 外の物をや。身の外の物すら、孝養に盡さざれば、後の悲み云ふにも
 たゆべけむやと。しかれば父母の世にいまさんほど、思ふ限りに孝養

は、親のなきあとに、その養育の恩報せざりつる事をかなしみて作れ
 る詩なり。其詞に哀しく哀しきは、父母我れをうみて劬勞せし事と、劬
 勞は勤苦のしきりなりつる事をいへり。又その劬勞のありさまを述
 べて曰く、父我を生めり。母我を鞠へり。我を撫で我を畜み、我を長なし、
 我を育ひ、我を顧み、我を復し、出入に我を腹にせり。報ゆる徳をせまく
 欲すれど、昊天極りなしと。拊るとは、なでふせぐ、おちおどろく事なか
 らしむるを云ふ。畜むとは、乳ぶさをはからひて養ふなり。長すとは、氣
 血をととのへておとなしくなすを云ふ。育とは、おほひこめて風寒を
 防ぐ也。顧みるとは、常に目をかくる也。復すとは、くり返しかりみて止
 まざるを云ふ。出入に腹にすとは、父母内に有る時は、子をはなして遊

盡すべき事になん。
 孝經に孝の大むね五つをあげ給ふ。一つには事なくて有る時もきはめて父母恭しく思ふべし。慈愛になれて無禮に有るべからず。二つには事ありて父母につかふる時は極めてよろこばしげにもてなし。少しも心にさはる事なかるべし。三つには父母の疾み給ふ時に憂ふる心ふかく、勞はり勤むる事におこたりなかるべし。四つには父母のうせ給ふ時に悲しむ心深く、のちのわざ營む事おろそかにすべからず。五つには父母のなき靈まつる時に、ひとへに深くつゝしみて、世に在す時に異ならす思ふべし。此五つの事兼ね備はりて、身終るまでにおこたりなきものを、よくその親につかふと云ふなり。もし一つも心を

つくさいる所あれば孝子といふに足らず。禮記にいはく、およそ人の子たるの禮冬は暖かにして、夏は涼しく、夕には安んじて旦には察し、出づる時は必ずまをし、歸る時は必ずまみえ、あそぶところ必ず方あり、習はす所必ず業あり、常のことはに老を稱せずと。父母にたてまつる衣食起臥の事までも、冬は物ごと暖かにして、夏は物ごと涼しくす。これ一年のつとめなり。夕にはやすくいね給ふを見てかへり朝にはとく行きて其氣色をうかひふ。これ一日のつとめ也。出入ごとに必ず告すは、親の傍を離るゝ時の禮也。婦人はすべてひとり出づることなけれども、内にいます親かたには必ず出入に見ゆべし。その遊ぶ所は、親のゆるし給へるより外、餘の所へ行かず。しならふことも親の仰せ

より外なる事をせず。我れ既に年老いぬとも、親々の前にては、常の言葉にも、わが老いたる事をいみて云はず。親の心にその身のいたく老いぬるを思ひて、悲み給ふべければなり。

人の子となり、嫁となるものは、日毎に鶏の鳴きそむるより起きて、身を清め、髪ゆひ、装束して、父母舅姑の許に、参り、氣をさげ、聲を和けて、着たまふ衣の厚き薄きをとひ、身の痒み痛みをとうて、心にあひ奉るやうにいたすべし。老い給へる人の起居には、後前よりいだしきかかへて、心のむき給ふやうにしたがふべし。さて、手水をまゐらせて、後に、何をかきこし、召し給はん、と問ひ、好みたまへる物を調じてまゐらせ、これを試みたまへる後に、まかりて、我々の食にむかふべし。座をとりまゐ

らする時は、むき給はん方をとひ、床を取りまゐらする時は、あとさし給はん方を問ひて、衾をしき、枕をたてまつる也。おやのゆるされなきほどは、その傍をたち去ることなかるべし。

親の傍に侍りては、言葉の應答、ゐたち、振舞常に恭くして有るべし。いきざし騒がしく、物云ひかしがましく、物によりそひ、そばめづかひし、嘔、嚏、伸、欠、する事なし。寒けれども心の儘に襲せず。暑けれども袒がず。もすそかゝげず。なれぎぬの裏を見せず。みな無禮の事ともなる故に、これをいましむ。

親の衣裳、蓐、衾の類、脇息、枕、杖などは、その所をうつしかへず、なれ汚す事なかるべし。その外、供御の器物なども、外に用ふる事勿れ。衣裳綻び

父母^{ふぼ}そのいたはりを思^{おも}ひて、異人^{いじん}にかはらせ給^{たま}はゞしばらく其^その心^{こころ}をうけて、かはれる人^{ひと}にせさすべし。あしくばそのすべを教^しへよ。されどもつひに得^えせずは自ら取^{とり}てすべきなり。衣食^{いしょく}を賜^{たま}はる時は心^{こころ}に好まぬ物^{もの}にても、たい嬉^{うれ}しげにもてなして、是^{これ}をたうべ。是^{これ}を着^きるべし。凡^{およ}そ子^こたらん者^{もの}は、事^{こと}大小^{だいせう}をわかず、皆^{みな}父母^{ふぼ}にとひうけて行^{おこな}へ。もし其^{その}仰^{おほ}する事^{こと}に筋^{すぢ}なくて、しがたき事^{こと}あらば聲^{こゑ}をやはらげ色^{いろ}をよろこばしめて、善^よ惡^{わる}のことわり、行^ゆく末^{すゑ}のためなど、こま／＼と説^ときいさめ、ゆるされて後^{のち}、是^{これ}を改^{あらた}むべし。さまでの煩^{わづらひ}なき事^{こと}は、たゞうち從^{したが}ひてよし。よからぬ事^{こと}なりとても、己^{おのれ}が心^{こころ}のま／＼にひきなさば、たとひ理^{ことわり}にはかなふとも、なほ不孝^{ふかう}の罪^{つみ}に落^おちなん。況^{まじ}てわが思^{おも}ふ所^{ところ}必^{かならず}ずしもよき方^{かた}

破^{やぶ}るゝことあらば、請^こひとりて縫^ぬふべし。垢^{あか}づく時は、是^{これ}を洗^{あら}ふべし。すべて親^{おや}の身^みになれ汚^{けが}らひたる物^{もの}は、必^{かならず}ず人^{ひと}に見^みせずして、嫁^{よめ}子供^{こども}も手^てづからとり清^{きよ}むべきなり。親^{おや}につかふまつる者^{もの}は、何^{なに}事^{こと}も力^{ちから}のおよぶ限^{かぎ}りは、自^{みづか}らすべきなり。召^め使^{つかひ}の人^{ひと}多^{おほ}しとても、みだりにせさすべからず。中^{なか}にも供^ぐ御^ごと藥^{くすり}とをば必^{かならず}ず自^{みづか}ら試^{こころ}みて後^{のち}に奉^{たてまつ}るべし。親^{おや}の召^めす事^{こと}あらば應^{うけ}答^{こたへ}までもなく、たいおといひて立^たつべし。手^てにとる物^{もの}は、打^{うち}捨^すて物^{もの}くふ時は、喰^くひさしてまゐりて仰^{おほ}こゝとあらば書^かきしるして、身^みにそへ持^もちておこたりなくつとめよ。事^{こと}終^はりなば返^{かへ}事^{こと}申^{まを}すべし。しがたき事^{こと}も苦^{くる}しき様^{さま}せざれ。疲^{つか}れたりとも倦^うみたる色^{いろ}なかれ。

いさせる事^{こと}にても、皆親々^{みなおや}の善^{ぜん}となす。若^もし惡^{あく}しき事^{こと}ある時は、さうなく、皆わが身^みにひきうくる也^{なり}。身^みすら心に任せずば、さて身^みの外^{ほか}に何物^{なにもの}か有^あるべきよりて聊^{いさ}かの物^{もの}をも、私^{わたくし}に持たず。又何^{また}にても人に貸^かし與^{あた}へうけ入^いるゝ事^{こと}、親々^{おや}に申^{まを}さずして、一つも私^{わたくし}にせず。若^もしゆるされて贈^{おく}り物^{もの}する時^{とき}も、必^{かなら}ず親^{おや}の仰^{あや}せと云^いひ添^そへてやるなり。又嫁^{よめ}の方^{かた}へとて人^{ひと}のくるゝものあらば、何^{なん}によらずみな舅姑^{しゅうしうとめ}に奉^{たてまつ}るべし。それをうけ給^{たま}は、うちよろこびてやむべし。もし我^われにかへして給^{たま}は、さら

に物給^{ものたま}はりたるやうによろこびて納^{なま}め置^おき舅姑^{しゅうしうとめ}のその物^{もの}なき時^{とき}をうかひて、またこれを奉^{たてまつ}るべし。もし又我^{またわ}が親^{おや}はらからなどへ贈^{おく}りたくおもふ事^{こと}あらば、必^{かなら}ず舅姑^{しゅうしうとめ}に乞^こひうけ、ゆるされて後^{のち}におくるべ

にあらざらんをや。とりわき女^{おんな}などの身^みにては、まのまへの障^{さは}りなきほどの事^{こと}は、もどく事^{こと}なくばうち靡^{なび}きたがふをよしとす。曾^そ子のいはく、父母^{ふぼ}これも愛^{あい}せば喜^{よろこ}びて忘^{わす}れず。父母^{ふぼ}これを惡^{にく}まばおそれ、うらみざれど。それ父母^{ふぼ}に愛^{あい}せらるゝ時^{とき}は、よろこびを忘^{わす}るゝ事^{こと}なかれ。もしにくまるゝ時^{とき}は、おそれてそのあやまりを改^{あらた}めんとのみおもふべし。にくみによりて怨^{うら}むる事^{こと}なかるべし。親^{おや}の慈愛^{じあい}をまことによりこぶものは、自^{おのづか}ら忘^{わす}れず。親^{おや}のにくみを誠^{まこと}に恐^{おそ}るゝものは、自^{おのづか}らうらみず。

人^{ひと}の子^ことなり嫁^{よめ}となるものは、その身^みを私物^{わたくしもの}とせず。故^{ゆゑ}に身^みを親^{おや}のた

めに盡^{つく}して、つゆも我^わがためにかへりみず。凡^{およ}そよき事^{こと}あれば、わがし

し。是皆おのれを私にせざる心なるべし。

父母病み給ふ時は憂へおそるゝ心深くして、色も形も打ち萎れ、髪化粧も取繕はず、たちふるまひも粧しからず、物いふ事もをかしげなく、糸竹の音もしらべあへず、酒食にも好なく、笑へども口を開かず、人を叱れど、のゝしらず。父母やまひいへ給ひて後に、常あるさまに歸るなり。それ孝は深愛を本とす。親の身を深くいとほしみおもふ心なり。此心まことある者は、その氣も穩かに、その色もよろこばしく、その形もやはらかなり。かくてつかうまつりてこそ、親の心のたのしみは有るべけれ。ある人父母に、つかふる道を曾子に問ひければ、愛して敬すことたへられけり。愛はいつくしむなり。敬はうやまふなり。孝行はたい

愛敬二つにてつくせり。されど愛する心深ければ、敬する事おのづからやまず。こゝに一つの重寶あらんに、秘藏してたふとみ、大事にかけ、てつゝしむは敬なり。これそのたからの用をなすことをふかく愛するがゆゑならずや。

衣食をあつくして、親の身を養ふ事は安し。よく敬ひ尊む事はかたし。親の心をやすくたのしむる事は更に得がたし。始め終りおこたりなく、孝養をとげなす事は、猶さらに難し。

孝養の心深くいたれるものは、聲なきにきき、形なきにみて、意にさきだち、志をうくと、禮の教に見えたり。親の心に萌せる事は、未だ聲にも形あらはれぬさきに、これを見聞くやうにさとりえて、その意に先だ

此歌は康資王の母のよめるなり。

たちねの親の闇路をしるものは子を思ふ時の泪なりけり

人の親の心は闇にあらねども子をおもふ道に惑ひぬる哉

思ひやれ子を思ふ鶴のひとつがひ同じ音になく夜の心を

たちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきな止めそ

此歌は小野の千古といふ人みちの國へ行きける時其母のよめる也

孔子のたまはく父母の年をば知らずばあるべからず一つには以

てよろこび一つには以ておそるとまことに父母の齡の數はつねに

心にこめて忘れずかつはその命長くておはします事をよろこびか

つはその末近からんことをおそれて世にます時に孝養おこたりな

かるべし樹静ならんと欲しても風しづまらず子養はんと欲しても
親いまさずといふは曾子の歎なりえて久しうすべからざる者は親
につかふるを云ふ也孝子は日を惜むと云ふは楊子が戒めなりわが
限りある命の内にをさなきほど病みぬる時とは親につかふる事
もなし老いぬる後は親すでにいまさずしかれば親の身にそひ奉る
こといくほどもなき間なれば日を惜みて孝養すべき事なりおこた
りがちに打ちすぎて後八千たび悔ゆるとも更に其甲斐なかるべし
古歌どもの中に

おのづからおくれ先きだつ友あれど老いてとゞまる數ぞ少き
散らねどもかねてぞ惜しき紅葉は今盛りの色とみつれば

たらちねのありしその世にあはれなど思ふばかりはつかへざり
けん

教へおくその言の葉をみるたびに又とふ人のなきぞ悲しき

禮記にいはく、よめの舅姑につかふる事、父母につかふるがごとしと
女は一たび人の嫁たるより、をこの父母はしたしき親となりて、も
との父母をば私の親と云ふよりて服する事も父母のためには三年
なるを殺ぎて舅姑と同じく一年なり。近世には舅姑の服をかへりて
三年に定められたり。されば舅姑につかふまづる事、父母を思ふより
も露おろそかにあるべからず。
古の婚禮に嫁來りて夫婦の禮をなしつる翌の日、つとに起きて舅姑

に始めて見え、菓子かなと奉りて、孝養の禮をつとむるなり。舅に
は棗栗姑には服脩、その品々にみな心あり。棗栗は早慄の義にとる。夙
に起きて慎みおそるゝと云ふ心なり。服脩は斷脩の義にとる。斷々に
心をひとへにして身を修むると云ふ意なり。かくて舅姑の朝餉ひに
侍りて、其すべりを嫁に据うる事、したしく愛する心也。後の世の禮に
は嫁家に入りて後、三日にはじめて舅姑にまみえて膳をとる作法あ
り。親王の妃にてもみづから天子皇后にたてまつり給ふとぞ女はた
かきいやしきとなく、衣食を調じて舅姑につかふまづるみちあれば
なり。唐の王建が新嫁の婦を詠する詩に、三日厨裏に入て手をあらひ
て、養湯つくる、いまだ姑の食性を暗せず、まづ小姑をして試みさしむ

と作れり。厨裏とはくりやのうちを云ふ。羹はあつもの。湯はせんじ物なり。嫁はじめてくりに入てめし物をとゝのふる時、いまだ姑の口ごゝろをし、らざるゆゑに、まづ小姑に與へて試みさしむと也。あはれにもやさしくもいひかなへたる言葉なり。かゝる事どもをみて、今その禮は行はれずとも、その心をとるべき也。古き歌に、
 數多にはぬひかさねゝど唐衣おもふ心は千重にぞありける
 これは父母舅姑などの衣を手づから縫ふ時の心にとりておもひみるべし。家富み榮えざれば、いましたてゝまゐらす衣は、ひとへなれども、いかにして親々のめされんために、深くおもひ入りて、縫ふほどに心は千重なるぞといへり。千重は千かさねなり。

およそ嫁たる者、舅姑のもとに侍りては、ゆるされなきにたちさりて、聞にゆくことなし。我身の上の事をも大事小事となく、舅姑に問ひうけて行ふべし。假にも我がほしきまゝにすべからず、舅うせ給ふ後に、姑その家を嫁の手に渡せるとも、祭祀賓客などの重き事どもは必ず姑にとふべしとなり。もし人の嫁となり、へやすみにあきて、わが世にならんを待ちわぶる心あらば、不孝の罪冥加なかるべし。
 春秋左傳に、嫁の姑につかふる道を聽にして、婉なるべしといへり。聽とは打ち任せてしたがふ心。婉もまた和ぎて従ふ義、不義なり。何事もたい姑の心に打ち任せ従ひて、少しもさはる所なきを云ふ。又女誠に、曲従をばよめづかへの道とせり。曲従とはつぶさにしたがふ也。其

心を述べていはく、姑然らずと云ふ事は、よしとせざれ。然りと云ふ事は、悪しくともせよ。善惡を以てすがひもちり、曲れる直きを以て争ひわく事なかれ。これ所謂曲從なり。此ゆゑに、女憲にいはく、婦の影ひいきのごとくなるは、いづくんぞ賞すべからざらんと。まことに嫁たるものの心ばへ、影の形にしたがひ響の聲につくごとくならば、世にあしき姑はなかるべし。古歌に、

風牙ゆるとしまが磯のむら千鳥たちゐるは波の心なりけり

とよめるにて心得べし。ちどりの起居に心なし。たゞ波のたちゐるにしたがふと也。されど惡虐淫亂の事などはさら也。此かぎりにあらず。人の子としては、その妻心に入りたりとも、父母の氣にかなはずば、お

くるべし。たとひ心にいらすとも、父母よくわれにつかふといはば、なかく夫婦の禮をたてゝ、あらたむる事なかれと云は、古の禮法也。又妻をいだす道七つあり。第一に父母にしたがはざれば、捨つとあり。それ孝子は父母の心を以て心とする故に、いかほど思ひつきたる妻なりとも、父母にしたがはざれば不孝也。しかるをそのまゝにつるれば、我も不孝の罪をのがれず。故に義を以て愛を斷ちて、わが孝を全くす。これ理の正しくあたる所也。世上の女此の法をしらず。此の理をわきまへず。又姑の嫁をにくむといふも、なべてあながちににくむとはなけれども、嫁の心のひがめるより姑とだに名づくれれば、嫁には孝不孝となくたい。つらく情なきものとのみ思ひふたがりてあるから、をと

事無かるべし。なほ至りていはば、唯我からと身をおもひ捨てたるの
 みにしもあらず。若し父母舅姑のにくみを受くる時、いとけなき子の
 道かひに捨てられたるが、親を慕ひて悲めるやうに心のまこと至ら
 ざる所なくば、いかでかつひにあはれみを受けざる事のあるべき。古
 へ帝舜たいう人にておはしまし、時父頑に、繼母嚮かしく、異腹の弟
 さへおごりたる物にて、父とともに舜を殺さんとせしことたびく
 なり。されども舜はつゆ恨めしき御心なく、たい父母となびきあひ給
 はざる事のみ明暮なげかしくおぼして、深くつゝしみおそれさせ給
 ふ。誠いたれるしるしありて、つひに父母のよろこびを得たまへり。此
 事を後の世の儒者とわりていはく、たい天下に不是底の父母なきが

この氣にだに入りぬれば、やがてほこらしくなり出て、うはべは姑に
 従ふと見ゆれど、心にまとなき事なれば、いつしかおもゝちあしく、す
 げなきさまの漏れ出づるによりて、つひにはまことに憎まれて疎ま
 るゝものぞかし。たとひいかほどあしきまにねぢけたる姑をも、我よ
 くしたがはんと一筋におもひこめて、まめやかにつかへなば、など
 がざる事のあるべき。もしさもなきは、猶わが孝養のいたらぬ故也と
 みづから身をとがむべし。典侍直子が歌に、
 海士のかる藻にすむ虫の我からと音をこそなかめ世をば恨まじ
 われからといふ虫の名に寄せてよめるとぞ。なべて親はらから妹背
 の中などに憂き事あらんを、皆かく思ひとりなば、大やう解けやらぬ

ためなりと。不^ふ是^し底^{てい}とは、よからぬと云^い義^ぎなり。舜^{しゆん}の父^ふ母^はほどなさけなき親^{おや}も、子^この孝^{かう}行^{かう}だにいたりぬれば、つひにあひ和^わぎけるより見る時^{とき}は、天^{てん}下^かに孝^{かう}の行^{かう}はれざるあしき父^ふ母^はなきに定^{さだ}まれり。親^{おや}のあしきと云^いふは、皆^{みな}子^この孝^{かう}の至^{いた}らぬゆゑなりとぞ。あるくちずさびにわが善^よきに人^{ひと}の悪^あしきがあらばこそ人^{ひと}のわるきは我^わがわるき也^{なり}。世^よのつねの人^{ひと}すら猶^{なほ}かくおもふべきを、まして親^{おや}姑^{しうとめ}などの親^{した}しみ淺^{あさ}からぬ中^{なか}をや。人^{ひと}をさなきほどは父^ふ母^はを慕^{した}はざる者^{もの}なけれど、おとなびて後^{のち}に色^{いろ}をおもひ利^りに耽^{ふけ}る心^{こころ}出^いで來^きたるより、いつしか親^{した}しむ心^{こころ}薄^{うす}くなり易^{やす}し。舜^{しゆん}は五十^ごの御^{おん}年^{ねん}まで、なほ父^ふ母^はをしたはせ給^{たま}へるとかや。人^{ひと}の嫁^{よめ}たるものも初^{はじ}めのほどは、舅^{しうと}姑^{しうとめ}をおそれ敬^{うやま}ふ心^{こころ}あれども、を

とこにあいだれ子^こに惑^{まど}ふより、つひにいとほしくなりもて行^いくぞ淺^{あさ}

まし。

女^{をんな}は嫁^かしてより父^ふ母^はに遠^{とほ}ざかる物^{もの}なりといへども、猶^{なほ}孝^{かう}行^{かう}の品^{しな}あり。其^{その}事^{こと}他^たにあらす。わが身^みにそひてまもらせ給^{たま}ふ兩^{ふた}親^{おや}の御^み心^{こころ}ざしをあがめたもちて忘^{わす}るゝ事^{こと}なきを云^いふすなはち親^{おや}の手^てをはなれまゐらす時^{とき}のいましめのごとく夫^{つま}によく従^{したが}ひ舅^{きう}姑^こによくつかへて身^みをけがさず。子^こを育^{そだ}て、一^し生^{やう}めでたくをはる事^{こと}、これ嫁^かしてより後^{のち}の孝^{かう}なり。父^ふ母^はの亡^なきあとまでも、此^{この}まもりにはかはる事^{こと}なかるべし。凡^{およ}そよき事^{こと}せんとては親^{おや}の面^{めん}目^めなりと思^{おも}ひ、必^{かならず}これを遂^とぐべし。あしきことに向^{むか}ひては親^{おや}の名^なけがさん事^{こと}をおそれ、必^{かならず}これをいましむべし。これ

もまた禮のをしへなり。古歌にも此心あり。
 水上の澄めるをうけて逝く水の末に濁れる名をば流さじ
 是は孝子の親の教へを守らんと志なり。
 人の子の心の底の濁れるは親のながれにすまぬをしれ
 これは孝子の親の教にもれたる所ありやと顧りみて改めんとおも
 ふ意なり。
 親の世に教へおき給ひつるなども重きいましめは更なり。たとひさ
 までなき事なりとも心に籠め、身にしめて、ながく忘るゝ事なかるべ
 し。歌にも此心をよめるあり。

たらちねのありていさめし言の葉は亡き跡にこそ思ひ知らるれ

傳へおく言の葉ごとに残りけり親のいさめの道しばの露

昔晋の張宣子とて富貴なる家ありけり。その國に劉高と云ふ只人あ
 りけるを、宣子その人がらを見て、女をあはせんと云ひければ、母いと
 心憂く思ひて、此女いま年十四なり。心も人にすぐれたれば、いかなる
 公卿の妻となる事も、など易からざらん。いかでか何條事なき者に容
 易くゆるさるゝ事有るべきと云ひければ、をことのしる事にあらず
 とて、つひにめあはせけり。女のゆく時におよびて父のいましめに劉
 高は孝いたりて深く、才も世に超えたれば、末頼もしきぬしなり。汝よ
 くつゝしみてつかへよと云ひきこえければ、女彼の家に入りてより、
 いと愛敬深く、その姑によくつかへて、孝行の聞えあり。後に劉高は上

より召し出されて、いかめしき武將となりぬ。又宋の孫明復は秦山にかくれて道を楽しみてゐるが、いと貧しかりければ、ひげ髪白くやせがれて、五十に及ぶまで妻もなうて有りけるを、時の丞相李迪と云ふ人あひみて、いとめで、いみじく思へりしかば、我れ娘あり。先生にまゐらせんなど云へり。明復いとかたはらいたく、有るべき事ともおもはざりければ、うけひかずして有りけるを、李迪わが女まゐらせざれば、世のつねの冠者の妻となるばかりなり。先生の徳天下に高ければ、わが身にちなみ給はん事。家門の榮え是れに過ぎたること侍らずと強ひられて、むかへとりぬ。その女貧家のあはしくしきに、よく堪へて、夫妻の禮をつくしけり。かくて明復は世に出でて、儒官にのほり其

名時にかくれなし。此二人の女、皆よく親のいさめをうけまほり、富貴をわすれ、貧賤にすみて、夫婦の禮を重んじ、よめつかへをつゝしみる。やごとなき孝女ならずや。曾子のいはく、身は父母の遺體なり。父母の遺體をおこなふ事あへてつゝしまざらんやと。子の身は本父母と一體なるが、わかれてあまりのこれる物なれば、遺體とは云ふなり。すなはち、父母の身なれば、此身をうけたもちて、おこなひ用ふる事、つゆ輕々しく思ふべからず。又いはく、父母全うして、これを生めり。子全うして、これをかへす。孝と謂ひつへし。その體をかゝず、その身をはづかしめず。全しと云ひつべしと。かへすとは、生れて來る身を死してからしむと云ふ義也。それ人の

身は骨肉皮毛の體より仁義禮智の徳までを全くそなへて、父母うみ授け給へり。子たる者、此身をうけおこなひて、もとのごとくに全うしてかへすをば、孝行と云ふべき也。されど此體をそこなはぬばかりにて、徳にはそむく事あれば、その身をはちしむるなり。身を辱しむるは、すなはち、父母をはちしむる也。故にその體をもかゝず、其身をもはちしめざるを全しとは云ふ也。一たび足をあぐるにも、あへて父母を忘れず。一たび事をいだすにも、あへて父母を忘れずと云へるも、遺體をうけてつゝしむ心の深き事なり。此こといと容易からず。曾子は聖人に近きほどの賢者なりけるが、つね、此いましめを深く守りて、老の後のいまはの際にいたれるとき、門人をよび、衾を開かせ、手足のまた

きをみせて、我れつねに戦々とおそれ、兢々と慎みて、深き淵に臨むがごとく、薄き氷を踏むがごとくにして、今になりてぞ、此一大事をのがれ得たりと云ふ事しりぬるぞと云へり。深くおもふべし、深く思ふべし。ある歌に、身は父母の遺體といふ事をよめる。
我れながらわれぞ懷し亡き人のわきて残せる形身と思へば

卷第二終

卷之三

述言第三

此卷には、婦人の夫にしたがふ道をのぶすなはち小學明倫の夫婦の別のおもむきなり。

あめつちあひやはらぎて萬の物おひいで男女あひまじはりて國民しげくひろごれり。わが神代のむかし天神七代はみな化生にたまします。そのをはりにあたり給ふ伊弉諾伊弉冊尊あまの御柱をめぐりあひみとのまくばひし給ひしより日月五行の神々をうみ出ださせ

はひをうくべきなり禮記にいはいはく、それ婚禮は萬世のはじめなりと。
夫婦交りておや子はらから出で、親族これによりてつゞき廣まる。
これ婚禮はよろづ世のはじめなり。又夫婦の道を綱記の始と云事は、
君臣父子夫婦を三綱と云。夫婦正しき時はその子孝ありてよく父に
つかふ孝あれば、すなはち忠にうつりて又よく臣として君につかふ
るが故なり。又婚禮は男女二性のよしみをあはせ、上は以て宗廟につ
かへ、下は以て後の世を繼がんとす。かるが故に君子此禮を重んずと
いへり。その禮おもき故に是をつゝしむ事ふかし。まづ妻をめとるに
同姓をめとらずとは、氏の同じき人は、その先祖ひとつにておなじ血
すぢをうけ來れる故に、子孫のするゝまでも夫婦の交をなさず。又

給ひ、地神の代にうつりてそのする人となりにき。これ陰陽はもと一
つなれども動きて陽となり、靜にして陰となる、よりて二氣にわかれ
り。陽の動くは外にうかび、天となりて常にめぐる事やます。陰のしづ
かなるは内に凝り、地となりてとこしなへにしづまれり。天の氣地に
まじはりて物を生ずれば、地これをうけてその形をなし、種々の物出
で來る。をとこは陽にして天にかなひ、女は陰にして地にたぐへり。男
女の人生ずる道、天地ことなる所なし。されど天地は其の道誠なる
ゆゑに、天ながく地久しく、萬物なりて極りなし。人も天地にかたどり
て男女の禮をたがへずは、福おほくして末ながくつたはるべし。もし
その道にしたがはず、天地神明にそむくつみによりて、かならずわざ

男女行媒あるにあらざれば名を相しらす。幣をうくるにあらざればまじはらず、したしますとは、同姓にあらざる疎々しき間にて、その縁をむすぶ故に、まづ媒の男女の家にゆき、してその心をかよはす。此事あるにあらざれば男女互に名をだにもあひしらす。さて男の方よりしるしをいれ女のかたにこれをうけて、その縁をさだむ。これよりさきは男女の家いまだまじはりしたしむ事をせず。幣は送物を行ふしるし也。

又唐土には妻をよびいるゝに六禮あり、一に納采とは、妻をえらびとる事をいひ入る也。二に問名とは、よめの名をとひて吉凶をうらなふ也。三に納吉とは、うらかたよき事を告げいるゝなり。四に納徴とは、そ

の縁むすびたるしるしをい入るゝなり。五に靖期とは、よめいるゝ月日をこひとうて定むるなり。六に親迎とは、むこ自らゆきて妻をむかへとる也。六禮みな夕暮に行ふ事。陽ゆきて陰來たるの義にとる。この故に昏禮といふ。昏は夕べなり。又たびゝにおくり物有り、いふ言葉あり。そのおくりもの必ずまことにて、或は用にたゝす。或は外をかざりなどしたるみだりがはしき物をやらす。言葉は必ずすなほにして、かろくなれゝ。敷事などをいはず。これみな正直信實にして人につかふる道をよめとれる者に示さんとなり。又そのたび毎に男女のおやおのゝ先祖の廟に申して後に使にいひおほせ、是をうけことふ。既に月日をさだむる時は媒氏名をしるして、その國の君に申す。むこの

家には酒食をそなへ置き、親類傍輩友人里人までを呼びつとへて此の事をひろむ。さて親迎に及びて、男女の親おのゝその子にいましむることばかり。上の巻に見えたり。むこのさゝげ物に雁一つがひとりて、はじめてよめとあひみる。此鳥春は北にゆき、秋は南にかへる。陰陽のまじはりやはらげる義あるによりて、これを用ふるなり。輿の車さきだち、よめの車あとにつく男いざなひ女したがふ。夫婦の禮義これよりして始まる。婚禮を重んずることゝ大やうかくのごとし。禮記にいはく、聘するをすなはち妻とし、おしるをばすなはち妾とす。聘もまた禮物をおくる事也。六禮をそなへて迎へするを妻といふ。妻はめなり。此禮もなく、たゞよふにまかせて、かけはしり來れるを

妾と云ふ。妾はおもと人なり。妻は齊の字の義にて、をとこの身にひとしく、一體なる心なり。妾は接の字の義なれば、主人を君にあがめて、ただ交はりまみゆる物と云ふ心なり。妻妾の名、一たびさだまりてより、貴賤の品二たびあらためられず。故に婚禮のはじめをおもんず。齊の桓公は天下の諸侯をあつめ、ちかひをたて政を掟てける個條にも、妾を以て妻とする事なかれといへり。名をたゞしく禮をあきらかにして、身を修め家をととのふる道なり。禮記にいはく、禮は夫婦をつゝしむに始ると、それ物事の禮儀古の聖人世の人の人として鳥けだ物にもならざらん事をおそれ、たておかせ給ふ事なれば、夫婦男女の中をつゝしみて、なれあはざるを禮儀のはじめとはするならし。男女の

わかちある時は、家よくをさまりて、なめげにまさなき事出で來たらざる故に、おやの中のしたしみ、ひたすらにして、忌み疑ふ所なし。父子の恩したしき時は、その外の人にも親しきうとき、貴き賤しき品おち／＼にわかれて、是にまじはる道おの／＼よろしき所の義有り。禮はたい此義にしたがひて、その事をあやなすばかりなり。これ禮の男女の別によりて、おこり行るゝ所なり。もし情欲のまじはりのみにして、夫婦男女のへだてなく、親子の愛ばかりにて、親疎貴賤の儀なきは、禮の行はるゝ所なし。これ鳥けた物の道にして、人の道にあらず。人と鳥獸とははるかに隔る物なれど、分るゝはしは男女のあひだにあり。よりて聖人の教に是を慎む事、いたりて深きなり。

妻に同姓をめとらざる事、男女の別を明かにする道を推究ての義なり。わが國の法はさだかならねど、服あるかぎりなどは殊更にいむ事なるべし。まづいとこのたぐひには、從姉妹、再從姉妹、三從姉妹、又父かたの姑のたぐひに、從姑は父のいとこなり。再從姑は父のいやいとこなり。又姪女のたぐひに、從姪女はいとこのむすめなり。再從姪女はいやいとこのむすめなり。此外は服なし。外屬は小功以上めとる事を得ずといへり。外屬は母姑婿などのゆかりを云。小功は服の名也。外戚は他姓なれども、母のあねいもうとを姉と云。わがあねいもうとのむすめを甥女と云ふ。みな小功の服なればめとらず。その外父方の姑、母かたの姉などのむすめは、みないとこのたぐひなれども、いづれも、總麻

の服にて、小功よりかろければ、ゆるしてめとるとも見えり。又わがお
 やと子との位にあたる者は、服はづれても、つらみだるゝ故に、是を
 めとらずとかや。毛詩にいはく、妻をめとる事いかに、必父母に申す新
 をさく事いかに、斧にあらざれば、あたはず。妻をめとる事いかに、媒に
 あらざれば、えずと。父母にもゆるされず、媒もなくして、男女のなれあ
 ひたるは、鳥けだ物のわざなれば、人にはなき事也。

神代のすなほなる古は、男女のわいためもさだかならざるやうに聞
 ゆれど、地神三代にあたらせ給ふ天津彦火瓊々杵尊はじめ、此國に
 あまくたり給ふ時、海のほとりに出でおはしまして、吾田鹿草津姫の
 かほよきを見玉ひて、妻にし給はんと、給ひければ、草津姫やつこが

父に大山祇神と申す侍り。これに問はせ給ひてゆるされ侍らば、仰せ
 をうけまゐらすべしと申されければ、尊げにもとおぼしめして、父の
 神に告げ給ひて、後に姫をばめし給ひけるとかや。此姫一の名は木花

開耶姫と申す。大山祇神は三島明神なりとぞ申し傳へける。

毛詩にいはく、招々たる舟子、人わたれども我しらず、人わたれども我
 しらざるは、われわがともをまつと。此詩は女子のさるべき縁をまち
 て、さうなく人にしたがはざる心ばへなり。わたし船のふなことも人
 をまねきまねびて、わたさんといへば、人、われさきにと舟にのりてわ
 たれども、我ひとりわたらずしてあるは、わが連れだちたる友を待つ
 となり。よそへて云心は、中だちの人、世上の女をまねきて人にあはせ

んとすゝむれば、みな打ち靡き人をえらばずして嫁すれども、我はよ
きつれあひを待つほどに一人したがはずしてあるとなり。又詩にい
はく、おもむろにして脱々たれ、わがたなぐひを動かす事なかれ、わが
狗をして吠えしむる事なかれと。是は女子人の覺ぎとる事あらんか
と、心づかひして防ぎたる趣きなり。徐とはゆるく、靜なる心、脱々とは
靜なる貌、たなぐひは唐土の女の身にかくるかざりなり。われを慕は
ん人、禮をそなへてゆるくと來れ、あわたくしをかして、わがたな
ぐひの端をも動かすことなかれ、みだりに忍び來てわが狗ばし吠え
さする事なかれとなり。すみのほりていよやかなる心ばへ、おもひみ
るべし。和歌に

年經れどかはらぬ松をたのみてやかゝりめけん池の藤波
と詠みけるぞ、人をよく見さだめてたのめける故に、するとほりてめ
でたきと云心をよくたとへていひおほせつる。又祐子内親王家紀伊
が、

おとにきく高師の濱のあだ浪はかけじや袖の濡れもこそすれ
と詠みけるは、あるけさう文の返事なりとぞ歌の心、おとにきこゆる
名だかきあだ人なれば、中々ちぎりはかけじいつくか、すすめられて
袖しぼる思ひになりもやせんとなり。心のあだくしきは猶とした
けてやみこそせめ、殊にいなむべきは心きたなく、貪りがちに、身に
おはぬ財おほく持たる人には、世に富み榮え、おもひあがりて、おごり

をきはむる人は公事にかゝり、いつはりおほく、公事たくみして、人の
いたみをおもはぬ人、口わろく喧嘩すき人を苦しめ、むごきことをし
て樂める人、酒食をほしきまゝにして酔狂ひして身をしらす、法をか
ろしめて、科をおそれぬ人などを云ふなり。もしその親利欲にふけり、
人にははかられなどして、かくよからぬ者にあはせんと云ふとも、容易
くしたがつ事なかるべし。あからさまにつれあひて後に、身をくるし
め、おやのなやみとならば不孝の罪、いととおもかるべきを思ひて、い
くへにもつや／＼なげきてゆるさるべし。孔子の宣はく、婦人は人に
伏するなり。此故に專制の義なく、三従の道あり。家にありては父にし
たがひ、人にゆきては夫にしたがひ、夫死しては子にしたがふ。あへて

みづから遼ぐる所なし、教令閨門をいえず、事饋食の間にあるのみと、
人に伏すとは、人に折れしたがふ心なり。專制とはほしきまゝにはか
らふ義也。三従とは人にしたがふ道三つあるなり。人にゆくとは、人に
嫁する也。教令とは、下知する心也。閨門とは、ねやの戸なり。饋食とは、食
を調じて人にそなふるを云ふ。女は唯人にかゝりてあるものなり。故
に何事もひとりわが心のまゝにせず。をさなきほどは父にしたがひ、
人となりては夫にしたがひ、老いての後は子にしたがふ。一生わが心
ざしをみづから遼ぐる事なし。そのはからふ事は、閨よりほかに出さ
ず。そのするわざは、食をそなふることのみに有り。白樂天が詩に、人生
婦人となる事なかれ。百年の苦樂、他人によると作りけるも、此心なる

べし、禮記にいはく、婦順とは舅姑にやはらぎ、室人にやはらぎ、而して後に夫にかなふ。以て糸麻布帛の事をなし、以てつまびらかに委積、蓋藏を守る。この故に、婦順そなはりてのちに、内和理す、和理して後に、家長久なるべしと。婦順とは女の人にしたがひ、嫁づかへする道を云ふ。室人とは、あひよめこじうとめをさす。糸麻はいとあさ、布帛はぬのきぬ、委積は積み蓄へるもの、蓋藏は皆くらの事なり。和理とは、やはらぎをさまる義なり。婦順のみち、先づしうとしうとめに善くしたがひて、次ぎにあひよめこじうとめの中をやはらび、さてのちにぞ、をとこの心には善くかなひぬる物なり。又衣服の事をいとなみ、家にたくはへ、藏にをさむる物を守るべし。つまびらかに、これをまもるとは、その數

をわすれず、その物を散らさるる事なるべし。かゝる婦順の道どもをなはりて後に、家の内やはらぎをさまりて、行く末ながく久しかるべしとなり。

又周易にいはく、とぐる所なし、中にありて饋すと。饋は食をそなふる義なり。女は何事もみづからとぐる所なく、たゞ内にゐて、食事をそなふる物ぞとなり。毛詩にも、たゞ酒食、これはかるといへり。女はたゞ酒食の事のみをはからふとなり。又孟母の言葉にも、婦人の禮は、五飯をよくし、酒漿をおほひ、衣裳を縫ふのみとあり。五飯とは、飯に五種の品あるを云ふ。酒漿は酒と酢となり。おほふとは、きぬを被ひて、人にたてまつる事を云ふ。すべて婦人のすべきわざ、酒食をそなへ衣服を調じ、

居ゐの内外うちとをわきて男をとこは外そとにをり女をんなは内うちにをり中門ちゅうもんにはまもりを据すゑて故ゆゑなければ行き通かよふことなし男をとこは外そとををさめて女をんなの事ことにわたらず女をんなは内うちををさめて外そとさまの口くちにもいはず夫婦ふうふおなじ竿さきに物ものかけず同じおなに物ものいれず湯殿ゆどのも廁かばやもともにせず喪祭さうさいの時ときならではみづから物ものを取りわたさずをとこの授さづくる物ものは女をんな宮みやにて受うく宮みやなき時ときは下したに置くを待ちてこれをとる夫婦ふうふだに猶なほしかればその外ほかの男女なんによは、いよく遠とほざかるべし凡およそ内外うちとの男女なんによ井いをともにして汲くまず湯屋ゆやをともにして浴ゆあみず衣裳いしやうむしろの類たぐひ何なににてもかられずかさず外そとをゆく時ときもをとこは道の左ひだりにつき女をんなは道の右みぎにつく又またある書あふに男女なんによひとつ物もののあとさきをとらずをとこの脱ぬぎ置おきたる衣き

器財きざいをまもる此外このほかの事こと更さらになければかやうのわざは貴たき賤いやしきとなくみづから勤つとむべき事こととこそ。禮記らいきにいはく七年ねんより男女なんによ席せきを同じくせず食しやくをとみにせずとは男をとこ女をんな七つの年としよりしてひとつ席せしにゐすおなじ器物うつはものにて食しやくせず又また魏すいの荀爽じゆんさうが女をんな誠まことに七歳さいの男をとこはおほばもいだかす七歳さいの女をんなはおほちもたもたずとあり又また明みんの鄭氏ていしが家範かはんには八つの年としより女をんなは内うちに置おきて母ははに付つけても出いでずといへり禮記らいきに又またいはく夫婦ふうふの禮らいたい七十しちじゅうに及びて同じくをさめて隔へだてなしと七十しちじゅうの後のちには身み衰おとろふが故ゆゑにわけへだてせざれどその憚はばかりなしとなり。夫婦ふうふ男女なんによをわかつ事こと禮記らいきにそのいましめつぶさなり大おほむね先まづ家

のばしにも觸れず男の居たるあとにも居ずをとこの通りたるあとをも踏まざれと云へり。禮記にいはく、嫂叔は問をかよはさずと。嫂はあによめ、叔はをとこのおとうとなり。こゝにてはすべて嫁こじうとをば云ふなるべし。その間、嫌疑をはゝかる故に、事問ひかはす事なし。又いはく、嫂叔の服なき事は、けだしおしてさかるなり。嫂は叔をなです。叔は嫂をなです。よめこじうとは、をといひの親みあれど、忌みてとほざる物ゆゑに、死しても服をかけず泣く時も尸をなです。鄭氏家範に、およそ嫁たる者には、そのゆかり多くとも、わが方にしたしきものゝ外、殊に法師などは、來ても逢ふ事を許さず。もしえさらぬ

ものゝ來て逢ふ時も必ず家の男子を先立てゝ引き入るべし。それも夜に入りては免さずといへり。顔氏家訓と云ふ書に、紅東の婦女必ずならびにて、大様人に出で交る事なし。縁者の間にも、十年にあまるまで、未だ面をも見しらず、折節におくり物など音なひたるばかりを、よき例には引きけり。女はたゞ人にうとくしてあるをよしとするなり。なべての男女觴をかはしてあひすゝむる事、大様有るまじきわざなり。鄭氏家範に、此事をばふかくいましめけり。禮記には、禮に祭にあらざれば、男女觴を交へずとあり。是れは、他姓の男女をいへり。祭禮の時より外に、さかづきをかはさぬなり。されど魯の敬姜は、季康子が大伯父公父穆伯が妻なり。季康子きたれる時は、閨の戸開きて逢ひけれど

も、たがひに闕をへだて、越えず。家廟の祭禮に、季康子も來りけるが、さかづきを取りかはさず。祭はて、後宴もせざりけり。かゝりし事を孔子聞き給ひて、男子の別は禮の大經なり。公父氏の婦がする事、みな禮に叶へりと褒め給ふ。是れは敬姜やもめにて、一入謹みたる事と見えたり。禮記に曰く、女子門を出づれば必ず、その面をさへ被ふ。夜行くに燈火を用ゆ。燈火なき時は、則ち止むともし。頓の事などありて、男のたぐひ中門に入る時は、女駢けこもるべし。かゝるべき所なき時は、袖にて顔を引きかくすべし。凡そ女は幼きより、おくふかくあり。ならひて人に見えざらん事を思ふべし。簾の間垣の隙間をもよくふせぎ。或はくらく人遠き所、或はをとこの外にある時、我がよそにゐる時など

は、殊更必づかひすべきなり。古歌にも此心を。

人の見ることやくるしき女郎花秋霧にのみ立ち隠るらん

をみなへしを、女郎花と云ふ。よりて女の事にいひならはせり。大やう女に人の手をふれ、まきとりなどする事、端近くをり、みだりに出で歩き、心しらぬ所などにゐて、用意の深からぬ故なり。毛詩にいはく、厭浥たるみちの露、豊夙夜にせざらんや。おもふに道に露多からんと。厭浥とは、うるほへる心。夙夜は、あさまだき頃と、日暮れて後をいふ。此詩は女子の禮をまもり、身をつゝしめるをのべたり。朝疾く夜に入りても、行かましく思ふ方へは行くべけれど、道のほとりの露ふかきに濡れもやせんと思ひて、行かざると云ふ事をば、身の汚されなを忌む心に

よそへて云るなり。和歌にも、
 春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えねかやは隠るゝ
 とよめり。あやなしとは益なきなり。やみの夜なればはなの色こそ見
 えね、その香はかくれなきほどに、人よく知るとなり。暗きにかくる
 と思へど、暗きによりて、いよく手折りやすきにてもあるべきなり。
 また、
 咲かざらば櫻を人の折らましや櫻のあだは櫻なりけり
 とよめるにて、女の花を咲かせて、人に見えられまくおもふ故に、あさ
 ましき事どもし出で侍るに、いましめをなせりと心得べし。禮文に嫌
 疑にさかると云ふ事、素書と云ふ書に、嫌ひにさかり、疑ひをさくるは、

あやまらざる所以なりと云ふ心なり。すべてその事ならねども、若し
 それかはと嫌はしく、疑しき方をばいみて、遠ざかる事を云ふなり。連
 歌にさりきらひの沙汰あるがごとし。列女傳に、齊の宮女虞姬といひ
 けるがひきたることばに、瓜田を經る時は沓をいれず、李園をすぐる
 時は冠をととのへずといへる、これ嫌疑にさかる心也。瓜田はうりの
 はたけ、李園は李の園、ふりのなりたるあたりにて沓をはかば瓜を取
 るかと疑はるべし。李のなりたる下にて冠をなほすことあらば李を
 ぬすむかと思はるべければなり。また文選の顔延年が詩に、君子はい
 まだしからざるをふせぎて、嫌疑のあひだにおちず。瓜田にくつをい
 れず。李下にかうぶりをととのへずと作れり。ある文には、此するの二

句をいにしへ太公のことばなりと云へり。和歌にも此こゝろあり。
をみなへしうしろめたくもみゆるかなあれたる宿にひとりた

てれば

うしろめだきは、後聞き疑はしきなり。

木のもとを住みかとすればおのづからはな見る人になりぬべ
きかな

とよめるも、嫌疑の心になへり、又、

をみなへしおほかる野邊にやどりせば果敢なくあだの名をや立
たなん

梅のはな餘所ながら見んわぎも子がとがむるばかり香にもこ

をしめ

など詠めるは、皆をとこの遠慮なれども女はいよくこの心づか

ひふかゝるべし。凡そ嫌疑の事は、男女の中のみにかぎらず、よろづに

わたりての教なり。戦國策にいはく、それ夜行く者よく奸をする事な

けれども、狗をしておのれを吠ゆる事なからしむることあたはずと。

くらき所を行くに悪しき事すまじきは、心のまゝなれども、いぬを吠

えさせざる事は、おもふにまかせずとなり。されば我がひが心のなき

をみづから信ずるとはいへども、嫌疑をはゝからざれば、人のうたが

ひのがれがたき事まゝ多し。ふかく慎しむべき事にこそ。孔子のた

まはく女は日を閨門の内にをへて百里にして喪にわしらず。事恣

て、ふた心なき道をたゞしくするがためなり。毛詩にいはく、泉源左にあり、淇水右にあり。女子行くことあれば、父母兄弟にさかると。これは衛といふ國の女子、他國に嫁したるが、故郷にえ歸らざるをなげきての詩なり。泉源淇水はみな衛にある川の名なり。女子一たび人の家にゆく時は、親はらからにとほざかる故心のまゝにかへりてあふ事なし。ふるさとの泉源淇水國のみぎひだりにながれて有るがうらやましきとなり。いにしへは諸侯の夫人父母ある時は、本國に歸寧す。父母なき時は、太夫を遣はしておとづるゝのみなりとかや。又鄭氏家範によめの兩親亡くなりて後は、喜びとぶらひなどのことさらびたる事ならでは、その里へは歸さずと云へり。

にする事なく行ひとりなす事なし。交はりしらしめて後にうごきしるしすべくして後にいふ晝庭に遊ばず。夜ゆくに火を用ゆ。婦徳をただしくする故也。と。百里とは國のさかひを云ふ。喪にわしるるとは、喪の事をきゝて行く事也。女はねやの内にのみ日をくらして、親同胞の喪にも國へだゝればかへらず。よろづ我が心のまゝにせずして、人よりうけおこなひ、その事の成る際は必ず又人の力をかけて我れひとりなさず。これ女の人にしたがひて、我がほしきまゝならぬ道なり。又何事も人にしらせて後に、身をうごかし、しるしありて後に、詞にはうち出づるなり。ひるもみだりに庭の面にあそばず。夜内を行くにも必ず火を取りてあかすべし。これも亦嫌疑にさかり、婦人の徳人にしたがひ

周易にいはく女は信に内に正しうし男は位を外に正しうす男女の正しきは天地の大義なりと。それ天は外にめぐり地は内にしづまりその道正しくしてたがはざる故に天地とこしなへに久し人もをとこは外に居り女は内に居てその位をかへす。そのことをわかちてみだれあふ事なければ天地の大義にかなひ家をさまりてするながきなりしかれば夫婦の別はたゞなれやすきをいましむのみにあらず家ををさむる道もおのづから内外のわかれあり男は外女は内にその事をわけをさめて天地の道にたがはざらんがためなり。易にまたいはく婦人は貞にして吉なり。一にしたがひをはる。夫子は義を制す。婦にしたがへば凶なりと。貞はたゞしくさだかなる義なり女は人に

したがふ道をばさだかにまもりて吉なり一人の夫にしたがひて、そのまもりをとほすべし。をとこは物ごとに義をはからひさだむ義は時とともにかはるべき故に婦人の道にしたがへば凶なり。かく吉凶のわかるゝ事天地の大義にかなふとかなはざるとによりてなり。されば夏の塗山氏殷の有莘氏周の太任いづれも賢女にてまし。ければみな一すぢに内のまつりごとのみををさめさせ給ひて君の御たすけとなり給ひしかばともに國をはじめ世をつたへさせ給ふ。されどそのするゝの君色におぼれ義をわすれ婦人外のまつりごとをみだりしによりて四百餘年の夏の世も媒喜によりてやぶれ六百餘年の殷の世も姐己によりてほろび八百餘年の周の世も褒姒によ

りて中絶えけり。吉凶のしるしかくの如し。
 尙書にいはく、牝雞のあしたする事なし、牝雞のあしたするは、これ家のつくるなりと。牝雞には鳥のめどりなり。あしたするとは、あしたをつくる也。めどりは鳴く物にあらず。もし鳴く事あらば、ゆゝしきあやしみなり。家必すつき亡ぶべし。よろづの事女のさし出づるは、家のわざはひなる事。また斯くのごとし。されば國には政にあづからしむべからず。家には事をさめしむべからずと。顔氏家訓にもいへり。およそ君たる人、色にまどへるによりて、婦人政事を目だりて國のほろぶる事昔よりすくなからず。又女主の世をまつりごち給ふ事も、大やうは善からぬためしなり。國を治め家を齊ふる人、此いましめを忘る

べからず。近き頃多賀豊後守高忠といふを、京の奉行に置かるべしと。君より仰せ言有りければ、かへりて妻に語らひて、御うけ申さんと云ひけるを、聞く人もものにも似ずと、泣きあざみけり。高忠妻にあひて、かくなんと聞えければ、かゝるめでたき御覺や候ふべき。などはやく御うけ申させ給はざりしといひければ、そこに問ひ聞くべき事ありてなり。今よりはいづれの事となく、わがする事をふつというはすしてあるべきやと云ひけるに、さばかりの事、なじかは問ひ給ふまでやおはすべき假にもさしいらへ申す事候はじと云ひければ、さては御うけ申すべしとて、装束して出でけるに、袴の腰をもちりて着たり。妻後より見て、いかに袴のもちりて候ふはと云ひければ、すは、さればこそ

をもうやまふは、かしこき女也。いにしへ周の宣王の后姜后は君いろにすさませ給ふそのあやまりを身にひきていさめ申させ給ひしかば、君御心ばせをあらためさせ給ひき。漢の班婕妤は、成帝御輦をとものにせんと給ひし時、むかしの物語繪にことよせていさめ申しければ、帝その事をば止めさせ給ひけり。これみな君をうやまひ心をまめやかにして、いさめまゐらせけるによりて、君も亦をれしたがはせ給ひけるなり。むかし利仁將軍の御臺所輝子と申しけるが詞に、男子の女に遠ざかる心あらば、此人はかならず道をうる事のちかきなりと知るべしとあり。をとこの色と遠ざかるを見て、道にちかゝらんをよるこべる、まなこたかき事はるかなり。世上の婦人、かゝる心ばせいと

はやくもいふ事のたがへるとて、猶かたく云ひとぢめけるとかや、つねには、かやうの事女の云ふまじきにもあらねど、さしはへいましめけるきはに、わすれてもたやすくうち出でける。浅はかにさかしがるは女の心なれば、行く末かけて公事のさはりにも成りぬべく思ひて、かくこゝろみける事、むべならずや。女はをとこの心にひたすら打ちまかすべき物なりといへども、をとこの忘れたる事又はすぢなくあやうき事などあらんずる時は、心の誠をつくして、やゝしくつぶさに諫むべし。をとこにまさる才ありとも、いささかあなづらはしき心あるべからず。ふるき詞にも、痴人は女をおそる。賢女は夫をうやまふと云へり。さとき女をもおそるゝは、愚痴なる男なり。おろかなる男

稀なるべし。夫婦の禮よのつねにはあらじと、そゝろにこそおしはか
らるれ。又師資大納言の妻民部卿典侍が、世の中に、女の物いひかけた
るに、ただ何となく答ふるをのこなき物なり。女の返事なにと無くし
たる男は、をとこの眞男なり。世にまめ男はめづらしきものなりとい
ひけるは、人を評するに似たれども、丈夫のこゝろみがたきは、また世
の女の及びがたききはなり。我がをとこにはいかゞありけん不審し。
人の妻たらんもの、をとこの道にちかく、眞男ならん事などは、云ひし
る事もなくて、たゞいろいろかたちをかざり、をとこをまどはして、心のま
まにふるまはんとする事は、夫婦の道に背きていとおもき罪なり。人
のにくみをつむ迄もなく、神明の御とがめすみやかに、その身におよ

ぶべし。
毛詩の女曰鷄鳴の詩は、夫婦朝寢に心なく、鳥の鳴くよりおこしあひ
て、妻はをとこに鳥がりをすゝめ、またをとこのよき友をまねぎいれ
なん事をねがひて、さる人來りなば、玉の飾りをとき送りと、をとこの
ちなみにせんと云ふ心をのべたり。また齊風の鷄鳴は、君の賢妃おも
とに侍りて、曉がたに蠅の飛ぶ音を鳥の鳴くかと思ひ、有明月のあか
き夜の明くるかとうたがひて、あさまつりごとをまだきにすゝめ奉
ること、三たびに及びて朝寢の夢を君と共にせんはたのしけれども、
まゐりつどへる朝臣待ち遠にて、我れゆる君をにくみ參らせん事な
からおもへばなりといへり。いづれもやごとなき賢女の心ばへなり

かし。いにしへ王后夫人、君のおもとにまゐりたまふには、式の装束して、まへなる灯を消ち、うしろなる灯をあかして、夜のおとゝのほり、常の衣にかへてまゐり奉りたまふ。あかつきの空鳥啼く頃、ほひになりて、太師の樂御階のもとにまゐり、鳥鳴きぬと奏すれば、すなはち起き出で、罷り給ふに、おももの玉をふりなどしてかへると云ふ事を告げ給ふ。さて應門に拆を打て、開門を告ぐれば、少師の樂、また御階のもとに参りて、夜まさにも明けぬと申す。その時諸の夫人、又みやづかへにまうのほり、君あさまつりごとに出で給ふ。此禮、尙書大傳に見えたり。またいにしへの夫人、懷胎の時は、うみ月に入てより、寢殿のかたやにこもりゐて、人に見えず。主人日ごとに二たび人やりて問ひ聞く。その

氣つきたる時には、みづから行きて問ふ。婦人はばかりてあはず。かしづきの女に衣裳せさせてあひしらひ申さしむ。今世上の女つはりやみすれば、をとこにあまえて朝夕兔のかくと物好みせはしく、立願祈禱にことしげくして見苦しく、引きみだしたる時にも、人をはゝかる心なきもの多し。いにしへの人つゝしみふかくひそまりゐて、くるしみまどふきは、にもをとこをうやまふ心わすれずして、失禮なきを見ては、ちらひまねぶべき事にこそ。

夫婦の中は、心ゆるびてなれあひやすき物なれば、つねに禮儀をとりもちて、わするゝ事なかるべし。およそ心をつゝしみ、かたちをうやうやしくする事は、私欲のよこしまをふせぎて、わが明德をまもり、あが

むる道なり。故にこれをまもればさいはひをうけ、是をすつれば禍をかうぶる。いにしへ晋の郤成子、いまだいやしくてありける時、田にいで、草ぎりけるに、その妻かれひを送りて、夫婦の禮うやくしき事、賓客のあひ向へるがごとし。これをその國の大夫なにがしの見て、めでたく思ひければ、ともにいざなひかへり、君に申して高官にすゝめける。又五代の時、長從簡といふもの、許州といふ所に富みたる者の玉のおびもてるをもとむれどもあたへず、從簡忍び武者二人つかはして、かの家に入り、あるじをころしておびとり來れといひければ、武者どもゆきて夜しのび入りて見けるに、夫婦ねやの内にむかひゐて、賓客のごとくややくしかりけるを、いとふかくめで、此人をころ

さば、やがてわが身にむくはんとおもひければ、おどり出て事の由をしらせ、はやく此實をまゐらすべしと云て、事なしに取て歸りけるとかや。

人倫の品五つありて、妻のをとにつかふるには、五つの道をかねたること、魯國の女師春姜が教なり。つとにおき、身をしたゝめてまみゆるは、臣として君をあがむる義なり。手水をすゝめ、酒食をそなふるは、子として父をうやまふ禮なり。何事もしらせて後に行ふは、兄弟のしたしみなり。まことをまもり、詞をたがへぬは、朋友の道なり。さて夫婦ともに五つなり。五つをそなへてことごとくにその道をつくすべしとなり。

卷 第 三 終

卷 之 四

述 言 第 四

此卷は第三のまきのするなり

儀禮の傳に夫妻は一體なり又夫妻は絆合なりといへり夫妻のちぎりは絆ふたつをとり合せて一體とすることくなればなり禮記の文に、一たびこれとひとしくすれば身をはるまでにあらためずかるがゆゑに夫死しても嫁せずといふも此心なり昏禮に牢をともしして食すとは、一つのにえを夫婦あひ共に食するなり昏をあはせて醕す

を^をとこの妻^{つま}の下^{した}に有^あるべし。これも夫妻^{ふうさい}一體^{いつたい}なるがゆゑなり。女^{をんな}に氏^しなしと云^いふ諺^{ことわざ}も、この心^{こころ}にて云^いふならし。されど世^よの女^{をんな}いやしき身^みも、を^をとこにつれて、た^たとくなるべき事^{こと}はしりて、上^{じやう}臈^{らう}のむすめも、下^げ種^{しゆ}の妻^{めかけ}となるべき事^{こと}はしらざるは如何^{いか}ぞや。又^{また}偕^{かい}老^{らう}同^{どう}穴^{けつ}と云^いふは毛^{もう}詩^しのことばなり。偕^{かい}老^{らう}はともにおふるなり。本文^{ほんぶん}に君子^{くんし}とゝもに老^おいとあり。を^をとこゝもに老^おいはつるまで契^{ちぎ}りをかへせじと云^いふ義^ぎなり。同^{どう}穴^{けつ}はおなじあなゝり。本文^{ほんぶん}に死^ししては、すなはち穴^{あな}を同^{いっ}じうせん^{せん}とあり。死^しして後^{のち}、を^をとこ同じ塚^{つか}穴^{けつ}にいらんとなり。禮^{れい}に夫婦^{ふうふ}一つ墓^{はか}にはうぶりて、合^{がっ}葬^{さう}と云^いふ。またいにしへの女^{をんな}寡^{なせ}となりぬるのちは、みづから未^み亡^{はう}人^{じん}と名^なのる事^{こと}。春秋^{しゆんしゆ}傳^{でん}に見^みえたり。未^み亡^{はう}人^{じん}とは未^いだしなざ

とは、ひさごを二つにあり、酒^{さけ}をくみうつしてあはせ、夫婦^{ふうふ}一つづゝとりてのむ事^{こと}を云^いふ。これ夫婦^{ふうふ}の中^{なか}たときいやしきをわかす、ともに一つの身^みとなして、ながくあひしたしむべき心^{こころ}をしめす。一たびひとしくすとは、これを云^いふなり。かく一體^{いつたい}となる故^{ゆゑ}に、一生^{しやう}たゞひとりのみをまもりて、を^をとこのなくなる後^{のち}も、ちぎりをあらためて、こ^こと人^{ひと}にあはぬなり。

禮^{らい}記^きにいはく、婦^ふ人^{じん}は爵^{しやく}なし。夫^ふの爵^{しやく}にしたがふ。座^ざするに夫^ふのよはひを以^{もつ}てすと。爵^{しやく}はくらゐなり。女^{をんな}の身^みに位^ゐなし。を^をとこの品^{しな}によりて、たとくもいやしくもなるものなり。よりて座^ざにつく時^{とき}も、女^{をんな}のわかくおとなしきをいはす。年^{とし}たかきを^をとこの妻^{つま}は、座^ざの上^{うへ}におきて、年^{とし}わかき

る人^{ひと}とよむを^をとこにおくれて後は^{のち}、事^{こと}にもふれず、人^{ひと}にもまじはらず、たゞかたわれのしなぬばかりの身^みと云^いふ心^{こころ}なるべし。これみな一たびひとしくすれば、身^み終^はるまであらためざるの義^ぎなり。

又儀禮^{ぎらい}の傳^{でん}には、夫^{かつ}は妻^{つま}の天^{てん}なりといへり。白虎通^{びやくこつう}にいはいく夫惡行^{ふあくぎやう}あれども、妻^{つま}さる事^{こと}を得^えずと云^いふは、地^ち天^{てん}をさる事^{こと}なきを以^{もつ}ての義^ぎなりと。妻^{つま}のを^をとこにそひたるは、地^ちの天^{てん}につきたる如^{ごと}くなれば、はなれ去^さるべき道^{みち}なし。故^{ゆゑ}に妻^{つま}に罪狀^{ざいじやう}あれば、夫^{かつ}これをすつべし。夫惡行^{ふあくぎやう}あれども、妻^{つま}はさる事^{こと}を得^えず。又女誠^{めいじやう}にいはいく、夫^{かつ}は天^{てん}なり。天^{てん}はもとよりのがるべからず。夫^{かつ}も亦^{また}はなるべからず。行^{ぎやう}たがへば、天^{てん}すなはち是^これを罰^{ばつ}す。禮^{らい}あやまちあれば、夫^{かつ}すなはち是^これをうとむ。故^{ゆゑ}に女^めに曰^{いは}ふ意^{こころ}を

一人^{ひとり}にうる、これをながくをはるといふ意^{こころ}を一人^{ひとり}にうしなふ、これをながく終^はると云^いふと。一人^{ひとり}は夫^{かつ}なり。意^{こころ}をうるとは、人^{ひと}の氣^きに入^いてわが思^{おも}ひの儘^{まま}なるを云^いふ。意^{こころ}をうしなふは、これをかへしてみるべし。一人^{ひとり}に意^{こころ}をうれば、一生^{しやう}よくなりとはる故^{ゆゑ}に、ながくをはると云^いふ。一人^{ひとり}に意^{こころ}をうしなへば、一生^{しやう}あしくなりはつる故^{ゆゑ}に、これをもながくをはると云^いふ。なり。ひとり^{ひとり}の心^{こころ}にいる事^{こと}は、いとやすきやうなれど、まづ舅姑^{きうこ}にしたがひ、室人^{しつじん}をやはらげざれば、を^をとこの心^{こころ}にはかなひがたき故^{ゆゑ}に、易^{やす}きに似^にて、いとやすからぬ事^{こと}なり。女誠^{めいじやう}にいはいく、禮^{らい}に夫^{かつ}は再娶^{さいきよ}の義^ぎあり。婦^ふは二適^{にてき}の文^{ぶん}なしと。再娶^{さいきよ}はふたゝびめとるなり。二適^{にてき}はふたゝび嫁^かするなり。を^をとこ妻^{つま}なければ、子孫^{しそん}もたえ家^{いへ}もやはらがざる故^{ゆゑ}

に、二たびめとるべき義あり。妻のをとこにしたがふは、地の天にかゝるとおなじければ、をとおくれて後も、二たび嫁すると云ふ禮文なしと也。又宋の鮑女宗が詞に、婦人は七つすてらるゝ道あり。一つさる義なしといへり。男にすてらるゝ道七つあれども、をとこをすてゝ去るみちひとつもなし。すなはち、夫惡行あれども、妻はさる事を得ざるの義なり。それ天地はもと一體なりといへども、天はうごき、地は靜に、天は地をかゝへ、地は天につくかはりあり。夫婦も一陰一陽むすびあひて一體なれど、陰陽のわかれはそのまゝにて、夫は妻をひきゐ、妻は天にしたがふべきことわりを、よくあきらめてしるべし。

婦に七つすつるありとは、孔子のことはなり、一つに父にしたがはざ

ればすつとは、をとおの親に不孝なるを云ふ。これ第一のおもき罪なり。二つに子なければすつとは、世嗣を斷つ事を、をとおの不孝なるが故なり。三つに淫なればすつとは、心淫れて不貞なるを云ふ。これをすつる子細なし。四つに妬なればすつとは、嫉みを云ふ。そねみによりて、禍いできたる事多ければなり。五つに惡疾あればすつとは、あしきやまひあれば、祖先のまつりをともにせられず。子孫の身にもつたふによりてなり。六つに多言なればすつとは、詞おほくて、さうげんすれば、したしき中を、いひさく事あればなり。七つに竊盜すればすつとは、ぬすみを云ふ。これ義に背けばなり。七つの中に、子なきと、やまひとは、わがしいでぬ事なれば、如何はせん。その外五つの咎、もし一つもありて

な夫婦一體にて、しかも妻のえさるゝ道ある事をよくしければなり。こ
とに天命の沙汰、いとめでたし。夫婦の縁を天の命する所にて、人のし
わざにあらずとする時は、憂きに堪へ、辛きを忍ぶ事も、ふた心なかる
べし。史記に、女はかならずしも貴種ならず。これを要するに、貞好とい
へり。女の品は、種姓のたかきのみをたふとぶにあらず。けぢめとする
際は、たい貞好にあるとぞ。本性さだかにて、心だてよきを云ふならし。
重衝中將の妻、大納言典侍女は、貴き賤しき品あまたありとも、一すぢ
に心をまもるを第一とす。たとへば位貴き人のよろづの道にかしこ
くとも、貞心もつばらになくば、女とは云ふべからずといへるは、此心
なり。又後花園院の御母、うへ、敷政門院の宣ひける。なべて昔より女は

捨てらるれば、身をけがして、父母をはじしむ。深くいましめて慎むべ
し。むかし蔡人のむすめ、宋人の妻となりしあり。そのをとこあしき疾
を得たり。女の母うるさくおもひて、ちぎりをかへさんといひければ、
をとこの不幸は、わが不幸なりとて、終に夫婦の道をとげたり。又漢の
許升と云ふ者、わかかりし頃をこの者にて、身を修めざりけるを、その
妻呂氏とやかくいとなみて、しうとめ養ひ。許升にはより、學文を
すゝめ、よからぬ事などあれば、よくと泣きて諫む。その父やすからず
おもひければ、むすめをとりて、こと人にあはせんといひけるを、天命
のあひぬる所のがるべき道なしとて、父がもとに歸らず。許升その心
ざしにめで、それより學問をはげみて、世に名をあけにけり。これ

はかなき物にて、をとこのいろ、くいにいひしろふには、百人は百人ながら、くたくる心いできて、ながき名をながす物なり。此おもひきに心をつけて、ほねは粉にくだけ、しゝむらは泥になるとも、名を思はん女は道をまもるべき事なりと。世の中の女のためにありがたき御をしへなるかな。

むかし魯の國に秋胡子といふものあり。妻をむかへて、わづかに五日なりしに、秋胡は人の國にゆき、五年をへてかへりけるが、故郷ちかくなりて、道のほとりに桑つむ女あり。いときよげに見えければ、秋胡ちかづきて物いひけれど、ひとめもかへりみず、もたりける黄金を取りいで、さまぐにすかせども、遂にしたがはざりければ、せんかたな

家にかへりつきて、妻をよびいだしてあひ見ければ、ありつる桑摘みし女なり。夫婦のちぎりいくかもあらでひきわかれつゝ、あまた年経にければ、たがひに見忘れにけり。秋胡はふかくはぢて、とかくをいはんかたなし。女はうらみに堪へかねてはしり出で、身を投げて死ににけり。此事を葉清逸と云ものゝ作りける詩の心に、をとこの思は葉のごとくにうすく、女は氷のごとくに清し。をとこ、こがねを出しかたらへど、女いらへず。もし一たびもほゝるむ事あらば、さびしき聞のともしびを、年來まもりゐつる事たれかまことゝするものあらんといへり。それ貞心を守る事、女の常の道ぞとは、大やう誰れもふみしる事といへども、つゆ心にかゝる事なきまでに一生まもりなす事はいと易か

その心見えがたし災難の際生死のさかひにこそよきはよくあしき
 はあしき心ざし其かくれなき物なれ孔子ののたまはく歳寒くして
 しかうして後に松柏の凋むにおくるゝ事をしんと春きざし夏しげ
 る本草のこゝろいづれと見わくかたなけれど秋くれ冬寒くなる後
 にぞ松や檜の木ときはの色は木々のしほむにおくるゝまで猶も
 かはらである事を知るとなり此心をよみける歌おほし。
 雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ
 草も木もひとつにおつる霜の内にかはらぬ松の色を殘れる
 露霜になべていろづく秋山のふもとの松ぞひとりさめたる
 又女貞といふ木もちひさき木にて冬がれせざる故になづけたるを、

らぬわざなるべし。白樂天が詩に、君が一日の恩のために妾が百年の
 の身をあやまると作り、女論語のことは、一行失あれば百行成る事な
 しといへり。へだてゝもへたつべく、つゝしみてつゝしむべきは男
 女のあひだ、嫌疑のさかひなるべし。
 忠臣は二君につかへず、列女は二夫をへずとは、むかし齊の王燭とい
 ふもの、國やぶれ君ほろびける時に敵の君より、たかきつかさをあた
 へんといひて王燭を招きけれども、したがはずして自害したりし時
 の詞なり。忠義の臣は二人の君につかへず、貞烈の女は二人の夫をへ
 て嫁せず。貞女兩夫にまみえずといふも同じ心なり。貞は操のさだか
 なるを、云烈は心ざしのはげしきを、云夫れ人はことなくてある時は

めに死なんものなど必やすらかにむねすべしからざらんや。義にあらたりて死をよくするは、すなはち遺體をはぢしめざる孝行なり。此時、義をすてゝ身をそこなはじとするは、かへりて不孝なり。生死の一大事、かねてよくゝおもひさだめでおぼつかなき心なるべし。

子夏のいはく、死生命あり、富貴天にありと、人の身、生死、うくる所の富貴、貧賤は皆天より命するなり。天にかゝりて人の力によらず。されど身をつゝします、つみををかして命をうしなひ、道をきかず、業をつとめずして、貧賤にしづむは、非命にして正命にあらず。我にひが事無けれども、はからずして來れることは、皆天の正命なり。つゆうらみとかむる心あるべからず。世の女、此理にくらくして、人の品わく事を知ら

貞女はまたその名をしたひ、詩賦に作りて、わが心ざしをはげましける事もあり。およそ忠臣貞女の操はいかなるうきふしを経て、たとひ身をすつるに臨みて、人はともあれかし、われひとりには露たがへじとおもひとりて、ふた心なき物なり。漢書にいはく、人同じく一死あり。死は泰山よりも重き事あり、鴻毛よりも輕き事ありと。わが身は父母の遺體なれば、常には泰山のみたけより重んじて、まもるべけれども、死ぬべき義を見て死なざれば、かへりて遺體をはぢしむる故に、ながらへてのせんなし。此時には身を鴻毛雁のひとけよりも輕く思ひて、すつべきなり。誰れも一たびのがれざる道を、よくせんや、あしくせんや。名のために、すらいさみて、身をすつるもの多きに、まして義のた

す。たゞをよこの富貴なるをみて、さみしあなどる。しかのみならず、男
 學業をつとめて世のかせぎにうとければ、いとほしく、かこちがほな
 ることなどは、いふにもたらぬきはなり。たとひ、をよこのしわざ悪し
 くて命にあらざる貧賤にさすらふとも、えさらぬ道をわきまへなば、
 うらむる心あるまじきを、いはんや道義をたのしみて富貴をねがは
 ず。或は思ひかけざる貧苦災難にあはゞ、いかでをよこの上をかこつ
 べき道あらんや
 いにしへ太公望世を遁れて渭水に釣をたれ、ふみをよみ道をたのし
 みてのみありければ、その妻いとはしくおもひけるほどに、いとまを
 こひて出たり。太公のちに周につかへ功をなして、齊の國に封せられ、

し時、もとの妻來りて、ふたゝびかへり住まんといひければ、太公伯の
 水を地にこぼして、妻にすくはせて見けるに、たゞに泥ばかりをぞ取
 てける。などよくはなれて、さらにあふべき。こぼせる水は取りがたか
 らずやといひければ、いとはちらひて去にけり。又漢の朱買臣はじめ
 いとわびしく木こり、薪賣りなどして、ふみをもてあそびて居けるを、
 その妻うたてしく思ひ、引わかれて、ことをよこに添ひゐたり。その後
 朱買臣ひとりさまよひありきけるを、もとの妻見て、あはれと思ひけ
 れば、呼びいれて、物めさせなどしけり。後に朱買臣世に出で、古里の會
 稽の太守となりて入部したりし時、かの夫婦は太守のために道を
 つくれり。朱買臣これをあはれがりて、夫婦共に率て來て園のうちにや

しなひておきけり。悔しくはづかしと思ひければ、程なく妻は縊りて死にけるとかや。すちなき振舞のはて、よからぬはことわりなり。こなたにも昔津の國難波の浦に住みわたる夫婦あり。いと下臈にはあらざりけれど、世のわたらひわろくなりて、たゞ二人にぞなりぬ。男の云へるやう、己れはとてまかくても經なん女のとしわかき程、かくて有りなんいとほしきに京に上りて、みやづかひせよかし。よろしきやうにもならば、我をとぶらへ。己れも人のごとなれらば、かならずたづぬべしなど、泣くく聞えしかば、女いとかなく、てはなれがたく思ひけれど、強ひられて京にぞ出にける。とかう放浪へて、後に、或やことなき所に宮仕へしけるが後に、其北の方うせ給ひて、此處ある人の中に、

此人を思はれて遂に添ひぬける。唯人知れず思ふ事ひとへにありければ、難波の萩に託けて故郷に行きて尋ぬれど、ありしわたりは家もなし。人もなし。せん方なくて車をたて、眺むるほどに蘆擔ひたる男の乞食のやうなるが、前を経て行きけるを見れば、我が男に似たり。此男に蘆買はんといはせて近づけて見けるに、それなり。いと哀れと思ひければ、それに物などめさせよ。蘆のあたひに物多く得させよなどいひけるほどに、男したすだれのはさまより、もとのわが妻なりと見知りつ。いとほづかしく、芦もうちすて、走りにげて、人の家にかけてこもりしを、尋ねてよびければ、をとこ君なくてあしかりけりと思ふにぞいと難波の浦はすみうきと

書きて車におくりければ、これを見て、いと悲しき事たぐひなく、よよとぞ泣きにける。さて着たりける衣をぬぎて、文書きそへてやる。後には、いかになりけん知らず。世に住みわびて、女に宮仕をすゝめけるは、義にかなはず。女の強ひられて出けるはいよゝゝ悪し。猶もあらで身のさかえにめで、年來の契を忘れしかば、わが身をもはぢしめ、をこそもたすけずなりけるこそ、いと本意なく、淺ましけれ。世の生計いと物憂くなり果てたる時に、男に仕ふる道いよゝゝまめやかに情深きをぞまことの女とはいふべき。

昔ある所へ鏡賣りにもて來りける包紙に、書きつけける歌に、
 今日までとみるに涙のます鏡なれにしかげを人に語るな

今この人のうへを推し量りみるに、男ありけるが、既におくれつるか
 は知らず。いといたう零落れたりしかど、家を捨て契を絶つ事を悲し
 みてや、女の身にて年頃持たる鏡を賣るまでになり果てゝも、猶心ざ
 しおとさざりしは、誠に有難き婦人なり。孟子の曰く、志士は溝壑にあ
 らんことを忘れずと。溝壑とは、みぞ、たになり、志あるものは常に身の
 餓ゑ死にて、かばねを忘れず。わびしく堪へがたき際にも、義にあらざ
 る物は露ばかりもうけぬなり。遂にもみちぬ松の色も、かゝる時こそ
 は見ゆべけれ。些も人の富貴を羨みて、わが操をたはすことなかるべ
 し。

白樂天妻をめとりて、つかはしける詩の心に、生きては同じ閨の親し

みとなり、死しては一つ墳のちりひちとならん。疎き人すら相諫むるを、如何にいはんや。君と我をや。珍婁がわびしかりしも、その妻賢にて貧苦を忘れ、卻缺がいやしかりしも、妻の敬へる事まれ人の如し。陶潛世のいとなみせざりしかば、その妻の翟氏飯炊げり。梁鴻宮仕せざりしかば、妻の孟光ぬの、裳を著たり。君若しふみを讀ますとも、かゝる例はきつてもしるすべし。千とせのちの世までもとつたへおく事何事ぞや。人の世に生けるほど、身をしまざる者なし。されど身のものとめをいはば、衣食のほかにいえず。うすき味も満つれば、飢を忘る、なと。膏梁の珍しき願はん。あしき衣持たれば、寒きを防ぐ、など。錦繡の綾なせるを求むべき。君は、もといさきよき家に出で、我はかくまどしき

身をうけたり。こひねがはくば、まどしく素直にて、僧老の契をかへず。共に此身を樂しみて有りなんと。世の婦人、此詩を聞かば、如何は聞く

と、わが心に問ひて、獨思ふべし。

夫婦の中は互にいろかたちを慕ひて、よりあひたるにあらず。偏に天命の縁によりてさる人ありとだに知られず、知らぬ海山へだてある遠き國ともいはす。糸を付けたるやうに引きひかれて、結びあはされし身なれば、男とあひ共に家の内外をわき治むる事こそは、その道とする所なるべけれ。男の外の色好などは、かこち恨むべき道理なし。まして古きを厭ひ、新しきを親しむは世のならひ、ひとりのみまもりぬざるは、男の道なるを、さは思ひながら、女の執着多き中に、根ふかくむ

に、今男のつれなき詞によりて、そのうきほどをおもひ知りて、心法す
 すむかたあれば却りて我がためには情ありとぞ恨みをおもひ返し
 て、めぐみとなしつる心ばへ、いよくふかし又、
 かぎりなくおもふ心のふかければ、つらきもしらぬ物にぞ有りけ
 る
 とよめるは、ひたすら男を思ふ心かぎりなくふかければ、すべて餘念
 なきぞといへるなり。うきつらさを堪へ忍ぶまでもなく情とおもひ
 かへすにも及ばずして、愈めでたし。されど、又ある歌に
 おもはずばつれなき事も、つらからじ頼めば人を恨みつる哉
 と詠みしは、恨みぬも覺束なくぞおもほゆる。頼む心のなきかとおも

思ふと云なるべし。又歌に
 偽とおもふ物から今更に誰が誠をか我は頼まん
 男の詞には我を思ふやうにいへど、心の誠ならざるをよく悟りて、い
 よくはら悪しくなるは女の癖なるに、此歌主の心には、一たび縁に
 ふれて連れ添ひたる身なれば男の偽にてもあれかし、たとひ偽とお
 もひながらも、余の人誰れか誠あればとて、いまさ外に頼むべき道
 なければ、たい惚れくとすかされて、男のいふ事をつゆ疑はずして、
 偏に頼まんと云へる、まめやか女の心のかな。
 身のほどを思ひしりぬる言の葉やつれなき人の情なるらむ
 此歌の心は、身のうき事は人のつねなれども、さまではおもはざりし

は、いかなる恨を^{うらみ}か得^え給^{たま}はんとを^をとこの身^みを危^{あやふ}がりてなり。又^{また}交^か野^の。
 少將^{せうしやう}季綱^{きつな}とかの女^{をんな}に右近^{うこん}といひける。その男^{をとこ}よろづのかごとかけて、
 忘^{わす}るゝ事^{こと}あらば命^{いのち}もたゆべきなどゝ誓^{ちか}ひけるが、何^{いづ}日^つしかその心^{こころ}變^{かは}
 りければ右近^{うこん}、
 わすらるゝ身^みをば思^{おも}はず誓^{ちか}ひてし人の命^{いのち}の惜^をしくも有^あるかな
 と詠^よみける。忘^{わす}らるゝ身^みは、いとかなしき事^{こと}なれど、そはある習^{なら}ひなれ
 ば、うらみとだにも思^{おも}はず。たゞ忘^{わす}れじと誓^{ちか}ひし人の命^{いのち}こそ惜^をしけれ
 といへる。男^{おとこ}にすさめられて後^{のち}にも、うらむる心^{こころ}なきのみならず、それ
 を思^{おも}ふ心^{こころ}猶^{なほ}淺^{あさ}からず。あはれふかき事^{こと}限りなし。
 毛詩^{もうし}に曰^{いは}く、道^{みち}をゆく事^{こと}遅^ち々たり中心^{ちゅうしん}そむく事^{こと}あり。遠^{とほ}からずしてこ

へば、といふ歌^{うた}の心^{こころ}を詠^よみかへしけるにや。げにも親^{おや}に憎^{にく}まれ、男^{をとこ}にす
 さめられなどして、なごとも思^{おも}ふ事^{こと}なきは妻^う子^こたるものゝ心^{こころ}にあら
 ず。これ毛詩^{もうし}の小弁^{せうはん}の怨^{うらみ}の心^{こころ}なり。此^{この}恨^{うらみ}といふは、悲^{かな}みてしたふ心^{こころ}なり。
 しかれども嫉^{ねた}しとおもふ心^{こころ}にあらず。悲^{かな}みて慕^{した}ふとは、かの幼^こき子^この
 捨^すてられて親^{おや}をしたふが如^{ごと}くに、いたりて誠^{まこと}なる心^{こころ}をいふなり。よく
 わきまへて知^しるべし。むかし待^{まち}宵^よの小侍^{こじし}従^しが、
 つらきをも恨^{うら}みぬ我^{われ}にならふなようき身^みを知らぬ人^{ひと}もこそあれ
 と詠^よみける歌^{うた}は、男^{をとこ}の心^{こころ}、外^{ほか}にうつれる時^{とき}のおもはくなり。うきは必^{かな}ず
 いやしき心^{こころ}なり。わが身^みのうきを知るものは、人^{ひと}のつらき恨^{うら}みざれと、
 さもあらぬ女^{をんな}のあるを、わが恨^{うら}みぬにならひて、また心^{こころ}かけなとし給^{たま}

れ近く、しばらく我わが畿きにおくる。誰たれかいふ茶ちやを苦にがしと。その甘あまき事こと齊なづなの如ごとし。汝なんぢの新しん昏こんをたのしんで、このかみのおとうとの如ごとしと。これ古いにしへの女をんなその男おとこうはなりをむかへて、我われは棄すてられて歸かへる時ときに、詠えいじたる詩しなり。畿きとは門かどのうちを云いふ。茶ちやは、にがななり。新しん昏こんとは新あたらしく迎むかへたる妻めをいふなり。我われ今いま棄すてられて、道みちをゆく事こと遅おそ々としておそし。足あしは進すすまんとすれど、心こころはあとに引ひかれて、心こころと足あしと相あひ背むけり。されど男をとこは情なさけうすくて、出いで送おくる事こと遠とほからずして、近ちかくたゞ門もんの内うちまでにして留とどまりぬ。わが悲かなしみのにがきにたとふれば、茶ちやは猶なほ物ものかはなるに、誰たれか苦にがしといふ。其そのあまきこと、かへりて齊なづなの如ごとし。しかれども男をとこはうはなりをたのしむ事ことおといひの如ごとくにて、我われをばなぞとたにおもはる。

也。又また曰いはく、わが梁やなにゆく事ことなかれ。わが筈はずをあばく事ことなかれ。わが身みすらいれられず、いとまあきわが後あとをうれへんやと。筈はずとは梁やなの狭はざま間まをうけて魚うなを落おし入いるゝ物ものなり。女をんなまたおもふやう、わが後あとへきたれる人ひと、わが梁やなにゆきて、わが筈はずをひらく事ことなかれと。是これはわがおはし所ところに居か、わがせし事ことをして、よろづわが如ごとくならば、又また棄すてらるゝ事ことあらん。するとよそへて、いましめたる心こころなり。されど今いまわが身みすら男をとこにいれらずして出いれば、何なにのいとまあきありて、わが出いでたるあとの事ことまでを憂うれへんや。所詮しよせんよしなき事ことと思おもひたへてみれども、猶なほたへざる心こころあり。女をんなは一人ひとりにしたがひて身みを終おる物ものなれば、男をとこにすてられても、猶なほその思おもひかへさん事ことを願ねがひて、さうなく異こと人びとをみんと思おもふ心こころなし。古いにしへ代だいの

人情うすからぬ事かくの如し和歌にも

わかれをば悲しき物と聞きしかどうしろやすくも思ほゆるかな
 これは或る女の男餘の女に思ひかへて迎へければわかれは親の許へ
 歸るとて詠みたる歌なりとぞ男の旅立つ時などの別れはかなしき
 物と聞きしが今の別れは我こそ此家を出づれ我にまさりて心に
 あひたる人の入り來て住む程に、あとの事心やすしとなり詩の心に
 くらぶれば少しは淺きかたにきこゆれどかばかりなるも類まれな
 るべし世上の女わがあやまちありて送らるゝ時などは親同胞のま
 へ恥かしともおもふべけれど男の仇し心にてすてられなどせば燃
 えあがる思ひに胸をこがし煙に咽びたいに伏し沈みて湯水をも見

いれずをいろに物狂はしくのろしき事などこそ詞にはうち出
 づべきをかくる詩歌を作り出せるめでたき類なき心ばへなるべし
 されば男をおもふ心誠いたりてうきつらきにも弱る事なければあ
 だくしき男も幼馴染をわすれごととしてありしよりけになる事も
 あるならひなり

古の野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞ汲む
 と詠みける歌は此心なりとかや又は男に送らるゝ際にも女の深き
 心の程あらはれて二たび連れそひたる事も昔よりなきにあらず宛
 にも角にも女は裏表なく物軟にてうきにもつらきにも能く堪へ忍
 ぶをこそ誠のよき品とは定むべきけれ

卷 第 四 終

卷 之 五

述 言 第 五

此卷にはおといひの中より、をとこのはらから、あひよめの間を
 やはらげ、嫁をあはれみ、繼子をいつくしみ、親族をしたしみ、婢僕
 をめぐみ、ひろく世の人を愛する道をつけたり。又上君につかうまつ
 り、傍輩にまじはる道をつけたり。小學明倫の長幼の序より君臣
 朋友の道通論までの趣をまじへ記せり。

天地ひらけ、人ぐさ生れ出でしより、其子孫うけつゝ、き、今のわが身に

及ぶまで、いく世をや重ねけん。また其の同胞よりゆかり／＼をうけ、生み廣げて天が下に充ち満てる人数限知られず。されど近きもの日に親しければ、遠きはいよ／＼疎き。その限りあるべきによりて、古の聖人家々の九族をたてわけて、九族の親しき疎きは、また服紀をあみて重き輕きをしめせり。いまわが同胞の親しみによりて、ひろく親族の間を睦ましくせんには、大概服紀の輕重必しるべきなり。凡そ服のおもきは、年一回りなれど、父母の恩は殊更重き故に、二回りなり。兄弟は我が子と同じく一めぐりなり。祖父母は父の親なる故に一めぐり、伯叔姑は父のおと／＼ひ伯叔母はをちと一體なる故になすらへて皆一めぐり兄弟の子にも、我が爲にきるべき服に報いて是も一めぐ

りなり。曾祖父母高祖父母はしな貴し。親しみ遠き故に一めぐりの服にて、日數を短くす。五月三月なり。從兄弟嫁とは我が孫と同じく大功の服にて、九月なり。その外祖父の兄弟、父の從兄弟並にその妻、我がいやいとこ、從兄弟の子、兄弟の孫は、皆わがひこに同じく小功の服にて五月なり。又曾祖のおと／＼い祖父のいとこ、父のいやいとこ並にその妻、我がまた從兄弟、從兄弟の孫兄弟のひこは皆我がやしは子に同じく總麻の服にて三月なり。是を過ぎては皆服をかけず。又女子の既に人に嫁したると、男子の出で親類の後繼ぎたるとは互に一等そぎて輕く著るなり。外戚の服は母の親同胞と、我が姉妹の子とは皆五月なり。父の姉妹と、母の同胞との子、我が娘の生みたる子と、婿と妻の親な

どは皆三月なり。此外は服なし。おや子孫を三族と云ふ。父子兄弟夫婦をわきて六親と云上高祖より下玄孫まで九世兄弟はまた從兄弟まで、その中の伯叔父甥をかけて九族といふなり。

世に兄弟を他人の始めと云事は、人の由縁の同胞わかれ出て、すゑ遠ければ親み盡くるが故なるべし。されどもこれを云人によりて、その心ばへ遙に異なることをしるべし。世の人此詞を口にしきて、同胞の中うとくするものなどは更にまたいふにも足らず。そもく親き同胞を他人の始めぞと思はゞいと悲しかるまじきかは。宋の蘇允明が族譜つくりて、由縁の中をたしきみけるその心におもへらく、情は親みによりてあらはる。九族の外したしきみ盡きぬれば、情もつれて盡きぬ。

情つきぬれば、歎びあれどもことぶかす憂へあれどもとぶらはず。後には由縁とだにもあひ知らずして、道ゆき人に異ならずと。本同胞の身よりしてわかるゝするは道ゆき人となる世かはる有様と云ながら、思へば深く悲しむべき事なり。おとゝいの中互にかく思ひあはゞ、情は常に薄かるまじ。昔は人の情も世につれて厚かりしかば、おとゝいわかれ居る事を分異と云て、親の不孝家の恥なりと思ひつるに、今は大やうおやの世のうちより、子供をばらゝにおきちらすによりて、おとゝいをぢをひの親み昔に變りて、うとゝしくなりぬ。するゑの世の習ひ詮方なけれども、歎かしき事にこそ。

同胞の中疎ましくなる事は、まさしく不孝の罪なり。程子のおもへら

く、今の世の人多くは兄弟の恩愛ふかき理を知らず。世の常のさと人だにも、一いろの食ひとへの衣を得れば、必ず先づ父母に贈りあたふ。故いかにとなれば、親の身をわが身よりも重んずればなり。親になつける犬馬の類までも、われに懐けるよりは、よくもてなす。されど親の子をあはれぶ事は、却りてわが子よりも軽く、或は仇がたきのやうに憎めるもあり。世舉りて斯の如くなるは、惑の甚だしき事なり。しかれば孝行まことありて、親の心をわが心とする者のみぞ、僅に此惑をまぬかるべし。毛詩に曰く、このかみをよび、おとうとあひよみんせよ。あひ似する事なかれと。同胞の中は互によくしても、猶よくせよ。もし一人が悪しくとも、今一人はそれに似せずして、只此方より猶親みを

かくべし。張子此心をのべていへらく、世の人の心さま、我情をかくれども、今の報いなき時は、思ひよわりてうちおきぬ。恩愛の本意これによりて通らず。人はよしとも、あれかし、我はその惡しきにならはずして、心かざりに情をかけよとなり。かく一すちに思ひとらば、遂に相和がざる者なかるべし。それ兄弟はかたちをわけ、氣をつらねたる身なれば、しばしも中垣をゆふ事なかるべし。もし相叶はざる事あらば、包まず云ひ知らせて、疑ひをはるけよ。これはその親みに障なし。少しの事なれば、且つ忍びてよとて、いくつも心の内につみおけば、必ず結ばれて、後に遂げやらぬ物なり。人の兄弟隔てなく、相和ぎたるは、心は一つにして、身はあまたにわかる。その思ふ所として、何かは遂げがた

いふ、もし兄弟中あしくなりて、うち／＼争ひせめく事あれども、他人外より來て、わが兄弟をなだる事あれば、必相ともに是を防ぐ。此時によき友ありといへども、力のおよばざる時は、これをたすけずとなり。兄弟は少しき怒あれども、めでたき親しみを棄てずと、左傳にいひけるも、此心なるべし。

兄弟をつらなる枝と云事、漢の蘇武が兄弟にわかれゆきける時の詩に、いはんや我は連枝の樹子と一身を同じくすといひたる心なるべし。父母は本なり。子は枝なり。枝はあまた分るれども、皆つらなりて一本の末なればなり。古歌にも、

春知らぬ我が身悲しき古につらねし枝の花にわかれて

きことあらん。由縁もひろく友も多しといへども、うらなく、そこのものもしき物は、親子同胞の外なし。毛詩に曰く、春令原にあり。兄弟急難あり。良朋ありといへども、それ長く歎けるのみと、春令は鳥の名、良朋はよき友なり。春令の鳥ゆくときは、尾頭動き、飛ぶ時は聲せまりて悲しめり。人の急難に逢ひて、やすげなき様に似たり。もし兄弟の間にかゝる急難ある時には、只兄弟ばかりこそ偏に助け合ひぬれ。日頃相親めるよき友ありといへども、力のおよびがたき事ある時は、唯あなあればとながくいきづきて打ち歎きたるのみにて、世の常なる兄弟にも若かざる物ぞとなり。又いはく、兄弟牆にせめげども、外其あなどりを防ぐ。良朋ありといへども、それたすくる事なしと、牆とは家のうちを

おもへ唯つらねし枝は朽ちはてゝ頼むかたなくなれる心を
 いかにせん列はなれたる鴈がねのたちどもしらぬ秋の心を
 など詠めり兄弟遠くへだゞり或は死のわかれとなりぬるもの誰
 れか此心なからん。

すべみま瓊々杵尊天降らせ給ひし時木花開邪姫を見給ひて妃にす
 る給はんと語らはせ給ひければ姫さうなくうけ給はずして御姉の
 磐長姫をすゝめ給ふ尊姫の父大山祇神に此事問はせ給ひければ父
 の神とかくを分ずしてふたりながらを尊に奉れり。されども姉は見
 にくしとて召さず妹をめして神々いできさせ給ひける。又美濃弟媛
 と申すは八坂入彦皇子の御女なり景行天皇美濃國にみゆきましき

しける時に此媛のかたち勝れたる事を聞し召しはかりてひきとら
 せ給ひけれどもしたかはせ給はず御姉八坂入姫を申しあげて御身
 はしりぞかせ給へり。これ神代の昔人皇の古より姉妹の中つきく
 みだれざりしためしにや。又ある歌にも。

越えてゆく人をばさきにたつた山わが身は露に猶しをるとも
 あひよめを姉妹といひ姉妹と云ふ姉妹はおほよめなり姉妹はおと
 よめなり。又あによめをよびて嫂と云ふ。おとうとよめをよびて新婦
 と云ふ。長子の妻を長婦といひ家婦と云ふ。衆子の妻を衆婦といひ。介
 婦と云ふ。またこじうとにはをとこの兄を大伯といひ。兄公といふ。弟
 を小叔といひ。小郎と云ふ。こじうとめにはをとこの姉を女姁といひ。

身をおとしめ、人にさかはざる者は、よく義にしたしみをあつくし、恩を重んじて、たのみをむすぶ。よりて舅姑にもあはれまれ、男にもよろこばれ、そのほまれ外にあらはれて、ひかり父母におよぶ。もし大よめ名によりて身をたかぶり、おとよめ寵をたのみて思ひあがらば、その事すでにそむきあひ必こじうとども、是をにくみて、その父母にあしきやうにのみ云ひ聞え、いつしか舅小姑にも疎まれ、遂には又男にも厭はれて、其身をはぢしむるのみならず、わが父母にもはぢをおくるべし。然らばあひよめ、こじうとの中を和げんとならば、みづから謙順なるに若く事なし。謙はこれ徳をたもつ柄なり。順は婦行のつねなりと云へり。謙はへりくだるなり。己をおとしむるを云ふ。順はし

大姑と云ふ妹を女叔といひ、小姑と云ふ。また男女をすべて叔妹といふ。又あひよめ、こじうとめを一つに室人と云ふなり。いづれも同胞の親みあれば、常に馴れむつれ、隔てなかるべき物なり。しかるに同胞中、悪しくなる事多くは、室人和がざるによりて、事起れり。その身となれらんもの、深くその罪に落ちなん事をおそるべし。女誠に、よめたるもの、こじうとの中和ぐる道を述べておもへらく、婦人男の心にいる事は、舅姑にあはれまるゝが故なり。其あはれみを得ん事は、又小舅姑によく思はれてはめ、なさるゝが故也。それ、よめこじうとめの中は、貴き賤しき品かはりなし。恩のむすびは疎けれど、義はいとししたしむべき間也。たい心さまよく、物やはらかに、謙順にして

たがふなり。人にさかはざるをいふ。凡そあひよめの中は、をとこの長幼の序にしたがひて、そのつぎくをみだりなく、おとよめは必ず大よめをうやまふべし。されど大よめも又おとよめを輕しむる事勿れ。舅姑用ありて大よめを使はん時、その事を頼みにして、おとよめを輕しむる事なかるべし。若しおとよめを使ふ時は、固より大よめを敬ひて所得顔にすべからず。ゆく時もゐる時も、必ずわれは引き下りて、おなじ列におし並ばず。人つかふ事なども、同じさまにつかはざれ。しうとめ終りて後は、大よめをしうとめの如くにして、ことなる事あらば、とひうけて行ふべし。此の趣き禮記に見えたり。それ同胞はもと一つより別れて、枝を連ぬる身にしめれ

ば、淺からぬしたしみ親の中に異ならず。その年幼きほど、父母左右にたづさへ歩く時は、前になし後になし、ゑりをひき、裳裾を取てしたがひ行き、物をも食ひかはし、衣をも著かはして、物ならひ遊ぶ事なども、ともくにしつれば、譬ひあしき心を生れ得たらん者も、互に睦しみあはれまざるはなし。皆おとなしくなり、妻を迎へて後に、あひよめどもの交はりゐて、互によからぬ事を求め出で、明暮其男どもに吐き聞ゆるによりて、よく生れつきたる人にて、何日しか兄弟の中を、はくしくなり行き、おのがじゝ妻を妻とし、子を子として、情のよわり衰へざるは稀なり。したしき兄弟にても、朝夕つきそひてあらんよりは、海山遠くへたゝれる頃、露霜を見て思ひやり、月日をかぞへて待

ちわぶる程こそは、そのあはれさもいと増る物なるを知られず
 知らぬうとくしき人どもを迎へ入れて、夜晝一所にまじへおき嫁
 舅あひよめ、小舅など云ふ親同胞のしたしみをかけつれば、方なるは
 こに圓きふたしたらんやうにて、取りあひがたく公ならん事をば私
 心にて計らひ、深かるべき親みを薄情にて交はる故に、大やうそきが
 ちなる事宜なり兄弟たらん者友愛ふかく、至りて人の云ふ事に移れ
 ず。あひよめ、小姑たらんもの、恩義兼備りて、身のために私なきをたぐ
 ひならでは、此惑を遁れがたかるべきこそ、いとわびしく歎かしけれ。
 これ顔氏家訓の心なり。かく和ぎがたき中なれども、あひよめとなる
 もの必あしきのみよりあふにあらす。たゞ女の心さまた大やうくらく

ひがみて、正しく公なる道を知らざるによりてなり。故に、そのをとこ
 を思ひ子をいつくしむも、たゞ眼の前の事のみにて、未遠くめでたき
 道に非ず。禮記にいはく、父子あつく、兄弟むつましく、夫婦やはらげる
 は家のこえたるなりと、家の六親、各その徳あれば、おのづから共に幸
 をうく。家のこえたるにあらすや。此六親にはさまりて、中にも疎々し
 き物は、あひよめの中なり。よりて先づその間をよくすれば、小舅の中
 も隔てなし。これ兄弟の睦しきなり。よりて孝養をも共々につとめて、
 親舅のあはれみをうく。是れ父子の厚き也。かゝる時は、わが夫婦の中
 を亦末長く和ぐべし。然らばなど我を、とこ共の兄弟のしたしみふか
 からん事を希はざらめや。たとひ我がすゝむるまではなくとも、その

親みを我れより損はでこそ有りなめ。是を誠によき事と思はば偏にわが心におもひとりて、人は假令情なくつらきみにてありとも、われは唯心をつくし力をきはめて、舅姑につかへ、叔妹をしたしむべし。人も同じく此徳ある物なれば、遂にはその義にめで、あひ和がすと云ふ事なかるべきなり。舅小姑あひよめの中、皆よくなびきしたがへる時は、親子同胞のしたしみ深く、をとも男子も子となりて、家の幸永へに傳り、我は身終るまでよき者とほめられて、親祖父までの面目おこすべし。是をよき事とや云はん。あしき事とや云はん。

宋の大夫柳承翰家ををさむるに、孝行を先として、その法いと正しかりき。月のついたちえちの日毎に嫁子供集りて拜する時に、承翰い

ましめていへらく、人の同胞もとは不義なるにあらず。たゞ我々に妻を取りするてより、疎き者ども集まりて、善きをたくらべ、惡しきを咎めよひとなく、互に謗り合ふによりて、兄弟何日しかをむきくになり、おのゝわが妻子を愛し、私の貯蓄をして、家をさき門をへだてて仇の如く敵の如く、これ大やうは皆女の仕業なり。すぐしく心づよき男女の云ふ事に惑はざるもの幾人かある。我その惑へるを見る事多し。汝達等も此事あらんに、有りとも心とせで有るべきかと、嫁子供まかりて、皆深く恐れ、此いましめに背くを不孝と思ひければ、一言もあしきまなる事を云はずして、よりてその子の兄弟の中常に和ぎ、家をわかつたずして、永く傳へたり。漢の李充と言ふもの、兄弟六人家

て住みにくくなりければ、その妻われ夫婦のみとりのきてゐるやと
思ひけり。思ひめぐらして庭の木にかけたるとりの巢をおろして彼
方此方へおき換へければ、鳥ども啼き騒ぎて争ひふせぎける。これ
をとこに見せて、いまの世しづかならぬによりて、一つ巢にある鳥の
類までも、かく争ひてたすくる事をせず人もなどかは此心なかるべ
きといひければ、君長、實にもと思ひ、家をわきてぞ住みにける。かくて
一月あまりして、その計られし事をさとりしかば、やがて妻を出し、兄
弟を集め、よ々と泣きて、その事を告げ、もとの如くに住みわたりける。
昔も今も誰れか此事を聞て、みな心よき振舞しつと思はぬ者や有る
べき。妻の仕業をいたく憎まぬ者や有るべき。

を分かずして住みわたりけり。いとわびしかりければ、出る時には共
に衣を更へ、ある時は互に食をわく。李充が妻これをいとはしく思ひ
て、いさゝか私のものなどもあれば、ひき分きて住み給へかしと、を
こにさゝへけり。李充聞いて、さる事ありしからばゆかりの中、里人
もかく聞えて、後にわかるべし。酒肴具してよとて、かれこれ呼びけ
ば、いづれも來集りて並みゐたり。李充その中に出て、母のまへに跪づ
きて云ふやう、此女われに兄弟の中さきなんとすゝめつる、いとある
まじき心なれば、今より共に住むまじき事を、かたゝ告げ申すとて、
すなはち妻を追ひ退けて出しやりけり。又隋の劉君長と云ふもの、お
ほおや四つぎに及ぶまで兄弟分かれずして住み、庭の中、

凡そ嫁、舅あひよめなどの中、悪しくなる事多くは又下使の女によりて事起る物なり。下司の心は殊更くらく、ひがく敷物なれば、己がじゝ其主におもねり、人の事には誠にいつはりをかてゝ、あしきまにのみ云ひつゝくるを、もとより善き事を疑ひ、悪しきを誠とするは女の心ざまなれば、やがてさこそとうけひきて、告げたる者を我れに忠ありと喜ぶ。すでに喜ぶ時は、二度告げ三たびさへて止まず。遂にはぬしゝの中を仇の如くにしなして、己はいと得たり顔なりと、柳氏女範といふ書に見えたり。また嫁の許にゐて、使はるゝ女の折々實家に來りて、舅相嫁などのよからぬやう告げたるを、女親の聞きいれて、さぞあるらめと思ひやるから娘をみる時に、あなあはれ其事彼の事

はいかゞはなど、わびしげに聞ゆるほどに、娘もいと心細く物うらめしき増りて、遂に不孝不順の嫁となり果てぬ。兎に角に禍は下よりおこる事と知りて、下司のさゝふる事は善きも悪きも聞き入れざるがよき也。大やうきかすとして、事足らぬにはあらざるべし。もし偽などのあらはるゝ事あらば、いと重く咎めて、後のいましめ、人の懲らしめとなすべし。さは云へど、心だてまめやかにて、主をもよりゝいさめ、あしき事をも、よさまにひきなすもの、又なきにしもあらじ。さるものあらば、よく心をかけて近付けならし、行末までも見捨つる事なかるべし。

宗の富鄭公と云ふ宰相あり。その家法いと嚴なり。二人の子に嫁あり

けるが、その使はるゝ女房どもの、彼方此方へ行き通ひて、物いふことを免さず。是によりて、家の内ひそまりて静なり。又唐の岐陽公主と申す姫宮柱邪公の北の方となり給ふ時内より具せられし女房おもと人どもを、悉く返して、更にいとわびしき者どもをとりて召使はれしかば、内外のするゝまでも、かつて聞きとがむる詞なかりけるとかや。これ皆禍のはじめを深く恐れて、かく心遣ひせられし事、まことに有難き世の例なり。

家なる召使の女にもがぎらず事につけて、外より入り来る何がしの嫗などゝ云ふものゝ、親しき疎き家々を廻り來て、よしなき世語り、人事をば嫁子供に聞ゆる事いと惡き習慣なり。昔より三姑六婆といひ

て、その品々を唐の女には書きのせたり。姑はあまなり婆はおうなり。唐大和の世ならひ同じからざれば、一つゝに名ざして云ひがたけれど、此方にも、尼には經をとくもあり、祈をするもあり、嫗にはひさきめ、なかだちめ、うらなひめ、かななぎめ、針女、すあひ女のくすし按摩の類、その數にかゝはらずして、なすらへ知るべきなり。斯様のものども、何れなしとて、事かくるにあらず。一人も入る事あれば、必ず親族のよしみを遮り、偷盜邪淫の中だちとなる事、その例少からず。よく家ををさむる人は固くいましめてこれを入れず。

女のそねみによりて、家ををさまらず。世を絶つことなど多ければ、かろからぬとがにて、七つすてらるゝ中の一つなり。わが國にも皇后を

ともえせて打ちすぐるものあるは是も女の嫌みてふせぐなり、わが捨てらるゝ咎の重なる事を知りながら、身の上を忘れ親の恥をも思はずして、是をおす事愚なりとや云はん。罪を好みて自ら作る物なりといひつべし。

貴きも賤しきも、すゝろに物怨じする事ばかり、極めて堪へ難き業なきにや、めでたしとみる人だにも、瞋恚の火にやかれ、無明の暗にくれ惑ひて、えも云はぬ浅ましき事共多し。ある人妬婦を詠する賦に、忽ちに其妬鱗にさかひ、その忌ををかす事あれば、すなはち湯におもむき、火をふみて目をいからかし、袂をかきまゐるといひけるやうに、今まで、菩薩の如くあてやかに見えしも、醜女より猶おそろしく、柳の如く

立て給ふ外に、女御更衣の數あまたおはしますやうに、唐土の法天子は十二人、諸侯は九人、卿大夫は三人、士は二人の婦女をおく。世繼の多からんずるが爲なり。庶人は一夫一妻の物なれど、男子なき時は、妾をおくべき道あり。妻たらんもの、男のために女をもとめ、すべて世の絶えざらんやうにすべき也。我に子なければ、捨てらるゝ道一つあり。もし女をそねむことあれば、又捨てらるゝ道そひて二つとなる。いよいよ重き咎なり。況して男はたい一人のみ守るべき物にあらず。又男子は既にあれど、多きを幸とする事なるをや。これを知らざるものは、もとあれかしさは知りながら、をとこの妾をおく事あるべかしきやうに、詞にはいへども、心の底の解けやらざるを見て、流石にするおこ

事あらば自ら恥らひて、深くいましめなん事を知るべし。
 昔今女の嫉深きより、いたましき事多かる中に、漢の呂太后戚夫人の
 手足をきり、目をくじり、耳をやみてかはやの内におき、人饒となづけ
 て、御子のみかど惠帝をよびて見せ給ひしかば、一目みてより病みつ
 かせ給ふ。憎恨みにたへずして、人をも殺し、身をも捨つる事世に多し。
 わが生みたる子を殺すなどは、よもあるまじき事なりと思へども。
 晋の賈充が妻は、三つになりつる男子ありけるが、乳母の抱きてあり
 けるを父の來りて愛しければ、その妻遠くより見やりて、乳母と心を
 通はしけると疑ひて、乳母を殺しけり。故に其子も乳房にはなれてぞ
 死にける。後に二たび男子をば生みけるが、又同じやうなる事にて、

たをやかにありしも、おどろより實にいらしくなりぬ。或は嫉み
 によりて、眼前蛇身となると云ふ事か。たちはさもあらずや知らず。夏
 の蛇わが毒氣にたへかねて、舌をはき、眼をひるがへす有様を見る
 に、女の嫉みさかれる氣色、それにも劣るべく見えざれば、心は誠の毒
 蛇となれるなり。昔より嫉の病あるものを、驚にてつくろふといふ事
 ありげにも、此鳥の初音ほのめかす頃ほひより、何となく春めき出で、
 本草と共にうるほひわたり、囀りのうらなく、長閑に聞ゆれば、その事
 さもあらんかし。又物嫉き女の心を見るに、まさしく是にひるがへり
 て、秋くれ冬きたる氣色なれば、一言云ひ出すにも、雪霜ふりて木末を
 いため、葉をからす心あり。ひとり静かなる時常ある心よりおひみる

子をも乳母をも失ひけり。一たびはなほ誤りつとも云へ、いま一たびは自ら殺せるにあらずや。かゝる報にてや、遂に又子もなくてぞ絶えにける。又湖南と云ふ所にある者、子をまうけて一歳にもなりければ、夫婦いとほしみける事限りなし。或時男家にて、人と酒宴しけるに、遊女を呼び入れて、もてはやす。此女に男の戯れ言など云ひしろひけるを、妻窺ひみてければ、頓て磐二つにし、むらを盛りて持て出して、男と客との前に据ゑおきたり。これ其子を殺してしたりけるとかや。かゝる事などは皆人のなすべき業にあらず。人のえせざる事するは非人なり。されど猛獸毒蛇にも、子を思ふ心あれば、是にも劣れるに似たり。唯これ一念の怨憎より、心常闇になりて、とかくを分かぬ故なれば、

たとひ恐ろしきまでの事せざれども、心は同じ道も一筋なりしかれば、我れながら心を深く恐れて、かゝる心にひかれゆく身を悲しき物とおもひ歎かば、嫉き心も漸く晴れゆく方ありなにかと思へるによりて、此事を集め記せり。

卷 第 五 終

卷 之 六

述 言 第 六

此卷は第五の巻の末なり

世に親子の親み有りながら、わきて背きがちなるは、嫁姑の中なるべし。莊子が婦姑勃谿と云へるも、此事なり。是れ互に女の心が心より出る事にて、その由をたづね見れば、いさゝか相背くべき理なし。それ地の天につけると女の男にしたがへるとは、道理の定まれる常なるに、よりてわりなくかはゆしと思ふ。我が娘をも、人の嫁子となして、ことづくる道なければ、おとなしくなりて後、そのおき所なし。わが身も此

道によりて、此家にいり、人の嫁だちして、世を経たり。嫁もまた此道によりて、人の娘をとり、わが子に合せてこそ、世家をもつたへ繼ぐべけれ。しかれば娘にかへてたすけ養はれ、多く思ふより見ても、わが子なり。男にあはせ、一つの身になして、世を傳へ、多く思ふよりみても、わが子なり。争でか我が生み出したる子よりも、露おほえ劣るべき道あらんや。況して姑は親の道なれば、父とはやう變りて、嫁にもさかふ事なきをよしとす。よりて左傳にも、慈にしてしたがふを姑の道とたてたり。慈はいつくしむなり。嫁を子の如くにうらなく慈愛して、萬その心とつれしたがふやうにすべしとなり。誠にわが生みたる子の如くおもひ、善事は善とし、惡き事あらば憚りなくいさめたりして、陰言いは

すばたとひ善からぬ心ある嫁も、人の生うけたらんほどのものなどかはむつれ付かざる事あらん。嫁より云は、わが身は子かたなれば、その和がざる事あらんを、皆わが罪にひきて、愈孝をつとむべき事は、上の卷に述べたり。

顏氏家訓にいはく、婦は始めて來れる時にをしへ、兒はみどり子のときにをしへよと。婦は始めよりわが子のやうに隔てなくひきそへて教へなすべし。殊にほかしらぬ娘の子の始めて人の手にわたりて、われをば親とたのむものぞと知らば、一しほあはれさも深かるべき事なるを、大やう姑の心物の理にくらく、ひがみてねぢけたる所有るより、始めの程は、嫁を客人のやうによそしくあひしらひ置きて、

やうく居馴染める後に、悪しき事あるを包まず諫むる事はせで、陰にてひそくと誹りいで、させらぬ咎をも深く云ひたつるに、またその娘仕の女などの、しらぢごといやまして、たゞ悪しくのみ思ひなし、朝夕そばめひづむるによりて、嫁も遂には腹あしくなりて、その中日に隔たりぬ。始めは嫁も初々しさに人をおそれて、慎まざるはなけれど、男の氣にだに入りぬれば、外には恐るゝ事なしと思ひて、萬得たり顔になるより、姑の憎みはいとく深くなる物也。これ誠に嫁の咎也。姑の心にも、嫁にわが世をわたす事、天地のさだまれる道なれば、春秋の移りかはると同じ道理なる事を知らずして、我夫婦年頃力をつくして、つみたてたる家實を誠に親とだに思はぬ他人におしゆづ

りて、わが物げなる振舞をみる事、嫉しと思ひふづくむ心いと深き感ひなり。量光中納言の母の世の中になべて嫁をにくむ事は、わが子を思ひすぐすに有りといへるやうに、嫁のあしきは皆嫁の咎のみにて、わが子の仕業には露あやまりなきなり。又わが娘の人の嫁たるはいづれも孝にして、姑のにくみを受くるものなきなり。さるのみにもあらす。昔わが嫁仕の時も、何の咎めを蒙ふれる事もなかりし也。もし我れ悪しからずして、姑にそばめられしその憂を忘れずば、などいま嫁にもよく心して、あはれぶ事なきや。かゝる眼前の事共より思ひめぐらして、己を顧み自ら責むる心あらば、ひとり思ひわく方あるべき也。そもく誰が云ひそめしひが事にや。嫁といひ姑となづくれれば、すべ

て中あしき物と云ふ事かねてより聞きならへるか心に早く思ひふさがりて、物の道理を聞きわかぬなり。別の由あらんや。よく思ふべし思ふべし。

人のいとあはれぶべきものは、幼くして母にはなれたる童なるに、これを繼子と名づくれば、その母たる者のなべてにくみあへる、殊更に何故ともわきまへがたき事なるべし。わが生みいでざると云ふばかりこそあらめ、偏にたのむ男のためには、身をわきたる子なり。わが生みたる子の爲には、氣をつらねたる兄弟なれば、いと親むべき事ならずや。見す知らぬ他人の子をだにも、母を失へりと聞けば、あはれまぬ者なし。まして我れその母にかはりて養ひ育つべき幼子の亡き人、草

の蔭にて如何なる人の手にかゝりてかあるらんと限りなく悲しき慕へる心あるべければ、わが生みたる子よりも、一しほいとほしむべき物なるをや。しかるを却りて人の孤兒よりも情うすきは、いかにぞや。妾の生みたる子ににくむは、その母を嫉む故か。と見れば、我が養へる子は、母すでに世を去りぬ。舊妻の子は、我が今の子よりも、萬さきさまなる故かと思へば、娘の子、妾の子などは、その争ひもなければ、これを憎むもまた同じ趣き也。しかれば、二人あひの子ならぬ故かと。たづぬれば、大やう後の男は、舊夫の子をあはれみ、後の女は、舊妻の子をにくむと、顔氏家訓にいひけるやうに、妻の率て來れる子をば、今男我が子よりもまさりて、いとほしむ者多ければ、種腹かはりたる子を、

皆にくむ物にしもあらず。いはんや繼子にあしきまなる母ばかり、世におそろしく憎さげなる物なしとは、誰れもいひしらぬ人あらんや。憎みて恐ろしきほどにもなれば、必らず家族にいひたてられ、遂には男にも捨てらるべし。皆よく自ら知れる事ながら、猶強ちに憎めるは、兎角のよしもなき事にて、たゞ女の心まどひ、深きが故なり。いと愚に淺まし幸あらずして、人の繼母となりなんもの、つくぐと思ひみて、ふかく戒め必此惑ひを解くべきなり。又あるひは繼子を持たるもの、嫌疑のかたかどを聞きとりて、萬我が子よりも増りたるやうにはすれど心に隔てある事世上の繼母とかはる事なくば、さりとて何のかひあるべき。漢の第五倫が甥の病みける時は、一夜に十度起きて見け

れども、歸れば寢を安く寢たり。我が子の病みける時は、一たびも行かざりしかど、終夜ねぶらざりつるを、私心なりと自からも云へるがごとし。たゞ彼れも是れもうらなく隔てなく思ふこそ、誠の慈母の心なるべけれ。

むかし、平正守と云ふもの、その父信濃なる女とすみ侍りける許に遣しける歌に、

信濃なるそのはらにこそあらねども我がはつき木と今は頼まんと詠めり。又ある女、幼き繼子のありけるに、わが子のみ、いとほしがりと、物へまゐりける家土産に、小鍋求め來て我が子にとらせ、繼子にはとらせざりければ、鶯のなきけるを聞きて、まゝ子の詠みける。

鶯よなどさは鳴くぞ乳やほしきこなべやほしき母やこひしき
 となん繼母きゝて、それよりわが子と同じやうにいとほしみけると
 かや母を失へるもの、後の母を見て、始めは頼み慕はざる事なし。たゞ
 繼母のへだくしく、あしきまにのみあたる故に、世の常の人の子な
 どは何日しか思ひさめて心まめしからずなりもて行く繼子の不孝
 は大やう、その母のとり所なり。
 古商の尹吉甫といひけるは、隠れなき賢相なり。その子に伯奇と云ふ
 あり。繼母につかへて、孝ふかく至れり。されど此母伯奇をにくみしか
 ば、ある時蜂を捕へて針をぬき、我が衣に取り付けておきける。伯奇見
 て、おどろき寄りて打ち拂はむとしければ、伯奇がわれを惹くと母の

呼はりけるを父聞て、疑ひ伯奇をおひ出しけり。是によりて伯奇は遂
 に空しくなりぬ。そのうち孔門の曾子、妻をやめてより後にめとらず。
 その子曾元、曾華すゝめければ、われ尹吉甫におよばず。汝等伯奇に及
 ばずとてゆるさざりけり。又漢の王駿といふもの、妻を失ひて後二た
 び娶らざりけるを人、その心を問ひければ、はれ曾參に及ばず。子も華
 元に及ばずとぞ答へける。かばかりの賢人君子だにも、繼母をおそる
 事かくの如し。しかれば繼母となるものゝ愼み、それおろそかに思
 ふべきかは。
 古人は、皆兄弟一つに住みければ、母なき子は必ず相嫁の手にぞだち
 けり。父の兄の妻を伯母と云ひ、父の弟の妻を叔母といふ。一門にゐて

まさしきをばをひといふは是なり。兄弟の子は猶子の如しと云ふ。禮記の詞によりて、をひを猶子と云ふなれば、伯叔母もわが生みたらんことかはりなく思ふべし。故に伯叔母の服も、をちになすらへて、一回りなれば親み深かるべき事明けし。今は兄弟別れるによりて、伯叔母ををばとよぶことをだに知らず、却りてその服の重き事を疑へり。されど、をとこの兄弟の子母なくてよりかたなきものあれば、取りて養ふ事、いまも世に多くして、大やうその子ににくむもの少なし。されば舊妻の子は唯繼母と名付くるばかりにて、憎むにや。その憎むべきよしなき事、是につけてもよくわきまふべし。

宋の范文正公、宰相となりて云へるやう、わが親族の數甚多し。之を我

より見る時は、親しきあり疎き有り。先祖より見給ふ時は、等しく皆子孫にして、更に親しき疎きなし。我家先祖の功德世々につみて、今幸の開くる時は、是にあたりて、かゝる大官にのぼれり。もし我ひとりのみ榮えをうけて、由縁のものゝ上塞きをもたすくる事なくば、何の面目ありてか。死して先祖にまみえ、いまも家庶を拜まんやとて、俸祿の餘りを出し、由縁の中の貧しき者に悉く分けあたへけり。又義田、義宅といひて、その料に田をあて、宅をたて、年月の衣食のもとめ、禮義の費などあるべかし。計らひおきて、力を添へ、身を援ひしもの、數しらぬまでありけるとぞ聞きし。わが國にも、むかし藤原良相、大臣、崇親院をたて、藤氏のをり所なきものをおき、延命院をたて、その病ある者を

養へり唐の張公藝が家九世までに一族住居をわかす高宗皇帝此事をめで思しければ山まつり給ふ御ついでにその家に行幸ありて公藝をめして親族を和ぐる道いかなる事ありやと問はせ給ひければ公藝たい忍の字ばかりを百字あまり書きつけて奉りける忍は堪忍なりその心におもへらく一門の内貴きも賤しきも老いたるも若きも萬の事堪へしのびて怨み咎むる心なくば家永遠に和ぐべしとなり隋の郭世雋が家にも親族相和ぎて七世まで一つに住む家の鳥獸もその習慣に習ひていぬゐのこは互に子を養ひ鳥と鵲と共に巢をかはしけるとかや又南唐の陳褒は十代をへて宗族七百余人まで一つの家に住みわたり若きおとなしきがつきくに進み居て日毎の

食をとともにすその家の犬數百ばかりもありけるが常に一つのをりにゐて物を分け喰らひもし一つも來らざれば残りの犬ども待ちゐて喰はざりけるとなんその後宋の陳競までに又八代つゞきて義門と號せられしなり。

明の鄭濂が一族家を分かすして久しく傳はりければ世にその家を鄭義門と名づけ門には天下第一人家といふ額をうちたり太祖皇帝これを御咎めありて鄭濂を召されて汝如何なれば天下第一とは云ぞと問はせ給ひければ某が家親類一つに居りすでに八つぎを経て内外のきこえ隔てなく候ふをさきの國守某世のすゝめともなりぬべき事なりとて此標を賜びて候私には仕う奉り候はずと申しけれ

梨子を御前に奉りてありけるを、二つ賜ひてければ、さうの手に捧げ
うけ押戴きてまかりぬ歸りて如何はする密に見てまゐれとて、官人
一人後につけさせ給ふ。鄭濂家に歸り、一族を集めて、君の賜物あり別
ちたびなんとて、二つの甕に水を入れ、彼の梨を突き碎き、水に掻き交
せて、普く汲み與ふ。皆食べ終りて後に連りたち北面して拜しけり。御
使歸りて、かくなん奏しければ、帝いと深くめで給へり。後には御田な
どあづかりて、行末なほ榮えけるとかや、女のいふことを聴かざるに
よりて、人相和ぎて、家長く傳はり、殊に馬后のさゝへによりて、宗族あ
やふかりけるを、計らず此事をば云ひあはせければ、その難を免かれ、
却りて君の御おぼえ深くなりぬ。君も亦是によりて、義門を破らせ給

ば、汝が家今また幾人かあると問はせ給ふに、千人あまりも候ふと申
す。帝聞しめして、さては稀なる世の例なり。まことに天下第一の家な
りとして、鄭濂をかへさせ給ひける。是を后の馬氏屏風の後より立ち聞
かせ給ひて、帝に申し給ふやう。君は始め一人の御身に、て思したち、遂
に天が下をばひき靡けさせ給へり。いま鄭濂が家千人のものを合
せ、心を一つにして候は、恐るべきことに候はずやと宣ひければ、帝
うなづかせ給ひて、また鄭濂をめしかへし、さて汝が家ををさむる道
いかなる法ありやと問はせ給ひければ、異なる道も候はず。たゞ萬に
つきて女の申す事をばきうけ候はぬばかりなりと申しければ、帝
うち笑ませ給ひて、終に事なしにぞかへさせ給ひける。折ふし河南の

を、あはれむと、孝弟はこれ仁を行ふの本なれば、始めに先づ親同胞を親しみ、ひろく親族を和げ、次には疎き人に及びて、普く國民をめぐみ、又次には萬物を愛して、生きとし生ける物、心なき草木の類までも、これをあはれむ道、それそれにわたらずと云ふ事なし。これ先儒張子經典のおもむきによりて、西銘を作り、仁道の大槪をあらはせる心なり。世にひろくもてあそぶ書なれば、こゝに詳かならず。古歌にも、
心なき四方の野山のくさ木まで我をすつれば、わが身なりけりと詠めり。人よく我身をわたくし物とせずして、人我の隔を忘るれば、己と天地萬物ともと一體にて、皆我身なる事を知る。されば此心をば天地のためにたて、わが身のためにたてず、人を思ふ事自ら我身を

ふ御あやまりなかりし、事下の幸ひあまりて、上に及ぶ例少き事どもなり。兎にも角にも、女の物事さしいろふは、すべて善からぬ事にて、中にも親族の和がざるは、大やう女のとより起る事と、深く戒しめて、恐るべく慎むべし。仁は萬物生々の道理にて、天地の大徳、人心の本體なり。此道をおしひろむる時は、天が下に満ちわたり、物として及ばずといふ事なし。それ天を父とし、地を母として生れ出で、世の中にあとある物の品々、おなじ陰陽の氣をうけたれば、いづれか我に由縁らざる物あらんや。されば萬の物を彼是となくひとしく思はん事、ぞとも見ゆれど、又親疎の品自ら別れたちて、仁道を行ふには、つぎ／＼有りて亂れず。孟子の曰く、親を親みて、民をいつくしみ、民をいつくしみて物

思ふが如く自から我身をおもふ事人よりわれを思ふが如くなれば、自ら人の苦み物のいたみを見ても、わが身に深く痛み苦しみのやうに覺えて堪へがたく思ふ故に、人物を愛する心ことにしたがひて、行はれずといふ所なし。されどもその心だて公なる故に自ら親疎の差別ありて、又わきもなくみだりに愛するにあらず。墨氏が兼愛は父母を見る事、道行き人と同じ。これ重きを強ひて軽くし、軽きを強ひて重くす。聖人の仁道にそむける事の明かなるを知るべし。天地の物を生ずる道理すなはち人の仁心なり。その道を行ふ事久しくして、その徳をつむ事厚ければ、是をもとむるにはあらざれど、天の幸その身に及び、其子孫にも傳はるなり。譬へば木の根をよく固め

て、生氣のもとを養へば、枝葉も榮え、年をふる事も久しきが如し。惡をする事は、これに却りて生氣をたつ道なり。故に禍すなはち是れに報うなり。周易に曰はく、善を積むの家には必ず餘んの慶びあり、不善を積む家には必ずあまんの殃ありと。善惡も僅の事なれば禍福必ずしも報はざる事あり。積む事厚ければ、その世の末或は子孫の身には必ず報ふ物なり。ある歌に、

惡しかれと人をばいはじなにはなるわが身の上にかへる白浪と詠みたるは、善惡ともに必ずその報いある事を云つるなり。中にも果報のめでたきものは、陰徳なり。陰はひかげなり。人知れぬ陰の功德を陰徳と云ふ。人知らずして我のみ知る故に昔の人これを耳の中に

數になすらへて女官をたておき天子の外政にむかひて内外をわけ
 治めさせ給ふ。また國々の諸侯夫人公卿大夫の内子まで皆それ
 の侍女ある事。王后よりしなへ下りてその數少かるべし。凡そ上と
 して下を治むる道詳く説かん事容易からず。是をつまやかにして
 云は、大學に人の君としては仁にとゐまると云ふ。是ぞ一言にして
 蔽へること。知られたり。それ天につき地にうけて生育の道を統べ、
 天が下のあを人ぐさを恵み養はせ給ふは、王侯の職なり。よりて君を
 ば民の父母共申すなり。中にも臣のためには、大臣を敬し群臣に體す
 と中庸にいへり。大臣は君に近くありて政をたすけまゐらするゆゑ
 に、臣たりといへども、君これを敬ひて馴れ侮らず。諫むることあれば、

譬へたり。人の知る功德はその名世にはめられ、その功上より賞せら
 るゝ事ある故に、天の報い猶ほ深からず。人の知らざる功德は天の知
 る故に、そのむくい厚くして、遠きに及ぶ。よりて司馬溫公の家訓にも、
 金をつみて以て子孫におくれども、子孫未だ必ずしも能く守らず。書
 をつみて以て子孫におくれども、子孫いまだ必ずしもよく讀まず。し
 かし陰徳を冥々の中につみて、以て子孫長久の計をせんにはといへ
 り。冥々とは、物かげのくらきを云ふ。しかれども、君子の心は殊更に陰
 徳を作りて子孫の爲にせんとにはよもあらず。たい徳をつむ事多く、
 久しき内には自ら陰徳ある故に、そのつもり必ず幸をうくる事の遠
 きに及ぶをば云ふなるべし。古は王后内の政を司どり公卿大夫士の

謹みて聞うけ給ふなり。群臣は諸の司なり。各職事つとめて君に遠きが故に、その心上に知れがたし。よりにて君これ一體の思ひをなし、その身になりて心を見そなはし、皆分上の願をとげて、恨みなきやうにし給ふなり。その功を賞じ、答をつみなふ事は、尙書に舜の賞罰の法を記して曰く、過をなだむるには大いなるなく、故をつみなふには小しきなるなく、罪の疑はしきは是れ軽くし、功の疑はしきはこれ重すと。過はあやまりなり。故は答をしりながら殊更犯すなり。知らずしてあやまれる答は大いなれども、これをゆるるべ、知りて犯せる答は小しなれども、是をゆるさずして、善の妨げをこらす。罪を刑するには、疑はしければ軽く方に従ひ、功を賞するには、うたがはしければ重き方にした

がふ。又その民を使ふにも、明君の制食はさかんなるを以て、量とし。人は老いたるを以て程とすと、説苑にいへり。民に食祿を給はる事あれば、若く盛んなる者の食ふべきほどを分量として、老いたる者にもあたへ、人力を用ふる事あれば、老い衰へたるもの、堪ふべきほどを程度して、若きものをも使ふ。それ臣の遠近法の賞罰は、みな自らなる差別なれども、仁愛の心は、本より末にとほりて、常に其間に行はる。人に君たる上には、仁道を旨とし、給ふ事かくの如く、かやうの心づかひは内外の政かはりあるまじき事なり。孔子の曰く、君子の人を使ふは、是れを器にす。小人の人を使ふは、備はらんことをもとむ。と、器にすとは、その器量よりしたがひて使ひ分く

るをいふなり。才をはからひて、似つかはしく使ひなせば、世に捨てん人なし。一人に萬備らんことをもとむれば、世に用ふべき人なし。淮南子が賢主の人を用ふる事は、なほ巧工の木を制するが如しと云ひけるも、是れなり。よき工の木を使ふには、太き細きも、長き短きも、直く曲れるも、悉く用にたて、又一もあはぬ方へ強ひて用ふる事なきをいへり。むかし、尚侍廣井女王の詞に、なべての人の心をよく従へぬは、そのとる所を取らずして、とらざる所をとる故なり。その人のえたるを取りて得ぬかたを見ざるべしと。又待宵小侍従がいはいく藝ある人には智福なし。無能の人には幸あり。翼ある物には脚ばかりを與へ、牙ある物には角をあてへず。天の物を育ふ事然なり。天のつかひとして、人

のつかさたらん人は、大をとりて小をとる事なかれと。みな此心なり。地下の侍庶民の家などに召使ふ下部は、極めて下種なるが、衣食のために使はるゝなり。もし才ある者あれば、自ら世わたる故に使はれず。人のやつごととなりて、才ありと見ゆるは、大やう、惡に敏きものなり。鈍きは忠信に近き所あり。そのする事の、はかしくからぬに堪へて鈍き方をとるべきなり。もし姪亂偷盜、讒言などの咎あらば、假にもゆるすべからず。その外は、大目に見ながして、長く使ふべし。されど上下の分際は、士庶の家にも明かなるがよし。主々は云ふにも及ばず、男娘の子の下僕と交りゐて、なめげに物云ひ、呟きなどする、いと惡き習ひなり。是によりて亂行も導かれ、讒口も行はるゝ事多し。深く戒むべし。し

かれども彼れ賤しとて、みだりに輕むるは、愈惡し。むかし陶淵明ほかに宮仕しける時、故郷のたえ／＼し、からんを思ひやりて、力者一人子の方へ遣しけるふみに、汝朝夕の事に堪へがたかるべしとて、此男をやりて、水薪の手をたすく。これも亦人の子なり。よく心せよとなん。いふ心は、わが汝を思ふやうに、此の男の親も亦思ふべければ、勞りて使ふべしとなり。和歌にも、

あはれとて人の心の情あれな數ならぬには、よらぬ歎げきを
と詠めるは、しもべの心になりてなり。心なき賤の奴を使ふにも、仁愛の心を忘るべからず。それが中に偶忠信の心を生れつきて、わが子かたにもおほえ劣るまじきほどの者あらば、深く心をかけて、己がたす

けに用ひなし、子弟の守護にも、たのめおくべきなり。

凡そ命婦侍女となりて、君に仕う奉り、その勤むべき業ある身は更なり、なべての公卿大夫士の婦女たる人も、皆その家々の君あり。身に官職をこそ司らね、君のために忠をおもふ事、男子にことなる所ならんや。人父にあらざれば生まれず。君にあらざれば養はれず。此二つによらずして、しばしも世にたてる道なし。況んや俸祿の厚きをうけ、家こそりて富貴榮華に樂しめる人をや。よりて忠孝のために、心をつくし、力をきはめ、身を棄つれども惜まざる事、彼是異ならず。上の巻に記せる孝行のおもむきによりて、大概を知るべき事なる故に、忠義の道をわきて、詳しく述べず。たゞ君に仕うまつる人は、その身に受けたる

業を、心一筋に勤むると、親のためには何事もわりなく勤むるとのか
はりあるのみなりと知るべし。古歌に、

鳥の音の曉ごとになれにける君につかふる道いそぐとて

と詠み、宮仕する人の、日ごとに朝まだきよりまう上りて、怠なき心、かくこそはありけめ。又、

大かたの秋のねざめの長き夜も君をぞ祈る身を思ふとて

と詠みし歌は、君を思ふは身を思ふなりといふ心ばへなるべし。又ある歌に、

臥して思ひ起きてかぞふる萬世は神ぞ知るらんわが君のため

山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心わがあらめやも

高貴き女御更衣よりしも、大夫士のおもと人にいたるまで、主君女君

を、あがめ尊びて、我が臣妾の分を守り、上ををかさまく思ふ心あるま

じき事、大義のあづかれる所なり。もし寵愛に思ひあがりて、妾のおも

とにまゐるは、日くれて後に星を見てゆき、夜いまだ明けず、星あるう

ちに歸る故に、折ふしみる所の星にて興じたるなり。君のもとにては

自ら夜の物を取りなほす故に、ふすまをいだと云ふ妾の身なれば、

かくゆきゝのやすげなき事は、天命の貴賤によりて、夫人と同じから

ざるなり。されど夫人の恵あらすば、かく勤むとも、君にあひ奉る事あ

らんやとなり。これ夫人の恵とは云ひながら、又おもと人の中に、君の

御おぼえ深きもあるべけれど、みな女君をおしあがめて、身の賤しき

に心をすゑ、聊か品をこえまく思ふ心なかりつる風化のめでたき例をあふぎ慕ふべし。
 婦人の身にて、友のまじはりをは、君に宮仕へて同じくたちならぶ中を云ふなるべし。先づ其身のほどをよく守りて、たとひ君の御おぼえをうくるとも、しなあがり、年長けたる人などを露輕しむる心なかるべし。そのあひ交る中は、すべていづれにも愛敬深く、かどくしからぬやうにもてなすをむねとして、あしと思はん方にも、只そこゆるびせぬばかりにて、ひやうじがましき陰語など必ずいたく戒めて、假にも口に出すべからず中にも心だて、まほに眞實ならん人あらば、常に親みよりて互によき思ひをすゝめ、あしき心ざしを諫むべし。な

ほ押ひろめて云は、なべての人のよき所を取り習ひ、あしき所を顧て戒めよ。かゝらばわれよき人となさん難かるまじ。此心ある歌に、

よきも友あしきも友ぞかいみなる見るに心のくまをみがけば
 と詠めり。又孔子のいましめに曰く、よき人とあるは芝蘭のむろに入るが如し。久しくその香をきかざるは、是と化す。よからぬ人とあるは、鮑魚のいちくらに入るが如し。久しくそのくさきをきかざるは、是と化すと。善きも悪しきも、友によりて馴れをむ事の譬へなり。されど一薰一蕕は十年もなほくさき事ありと、左傳にはいへり。薰蕕は皆草の名、薰はかをり、蕕はくさし。此二色をおなじほど混ふれば、香はほど

なく消えて、くさきは十とせを経て、もやまぬとなり。これよきに染み
たることのうしなひやすく、あしきに染みたる事の改めがたきため
しなり。ましてよき人まれにして、あしき人多き世の中にたてるをや。
よりて古歌に、

世の中にあさはあとなくなり、にけり心のまゝのよもぎのみして
とよめるは、よき友の少きを歎きてなり。たとへの心上の巻に見えた
り、それ友をえらぶ事は我が爲ばかりにあらず。その子弟の交れる所、
殊更つゝしみて見わくべき事にこそ。天のおふす所、地のやしなふ所、
ただ人のみ尊くして、萬の物にすぐれたりとは、古の文の詞人ごとに
いひ知れる口誦みなり。まづその形よりみれば、人は頭を上にして、た

ださまに立てり。鳥けだものは、横さまに行き、草木は倒におひたり。又
その心よりみれば、人には五常の徳全く備り、鳥獸は駈け、草木は心な
し。されど世にあとある物、そのかたちあれば、必ずその道あり。これ天
のさづくる徳性にしたがひ、そのかたちによりて行ひなす所なり。草
木は雨露のめぐみをうけて、花咲きみのる時をたがへず。鳥獸も其や
しなひをうれば、牛のたがへし馬のはこぶわざ、犬の夜を守り、鶏のあ
したを告ぐる、いづれかその性にしたがへる道ならずや。人は衣食よ
り家實に至るまで、そのもとめ少からず。世に所有物ごと心、まゝに
うけもちひ、却りてその身にかゝりたる五つの道しらす。知りても勤
めざるもの多し。それ臣として俸祿をうけながら、職事におこたる者

がら五つの道の名をだに云ひしらぬ者あらんかし孟子はこれを鳥
 獸にちかしといふめれどなほ劣れるかたありなんぞあさましき。あ
 る歌に、
 人とかく生れつる身のうれしさを徒になすわが心かな
 有難き人になりける甲斐ありてさとりもとむる心あらなん
 など詠みけるにて人の禽獸におちいるも此心、聖賢にすゝむも此
 心なりとさとりまた聖人の地にいたらざればなほ人の道つきざる
 事を思ひて、此道を辿るによひとなく勵み勤むべしとよ。

あれば君必すこれをつみなふ五つの道は人の職なり。天地のあたふ
 る所數々朝夕に費してつとむべき業にはゆるかせならんもの天を
 いたゞき地をふみながらその罪科をいづこにか遁るべき愚なる鳥
 獸だにもなほ人の道ある例虎狼のおそろしきも子をおもふ心ふか
 く鳥の餌をかへし獺のまつりをするは孝を忘れず恩を報ゆるなり。
 蟻づか蜂の巢にも君臣の義ありとかや雌鳩のつがひさだまりて雌
 雄なれあひたるかたちなきは夫婦のわかちしるものなり。雲井の鴈
 の列みだれざるは老いたるわかきつきくなれや鶯にはとりには
 友よぶ聲ありと聞く。色鳥のわたりくる折節たがへざる事は信をま
 もるに似たりしかるに萬の物の靈とよばるゝ人のかたちをうけな

卷第六終

卷之七

述言第七

此卷には學をつとめ心を正しくし、事をつゝしみ、身
をさむる道をのぶすなはち小學の敬身のおもむ
きなり。

古の聖の御教をうけて我人これをまなぶと云ふは、物の道理をきは
め、わが智を明かにし、これを心にたもち、身に行ひ、人の人たる職をつ
とめて、此生涯を全く終りなんが爲なり。そもく人は萬の物多きが

中に秀でたふとしと云ふは陰陽五行の徳五常の性となりて心の内に備り天下の事によくせずといふ所なければなり。仁義禮智これを五常といふ。それ人は五行の氣凝りかたまりて、此身となれる故に性の徳にもまた五つの別れあり。仁とは生を好み物をあはれむ道理五行の木、四時の春、其景色和ぎ穩にして、木草の芽ぐみ花咲くが如し。義とは事のよき程を定めなす道理五行の金、四時の秋、その景色すみをさまりて、木草の生氣遂げ實るが如し。禮とは恭敬をいたし、威儀をかいつくろへる道理五行の火、四時の夏、その景色明かにして、木草の繁り盛れるが如し。智とは是非をわきしる道理五行の水、四時の冬、そのけしきこもりしつみて、木草の生氣根にかへるが如し。水しづま

りて、よく物をてらす智も靜かなる所より、よく物をわかつてるなり。信とは唯仁義禮智の誠ある所、四の外にあらず。五行の土、四時の土、用木火金水のみな土につきたるが如く、仁義禮智も信にあざれば立たざるなり。凡そ人の心には、此五の徳備はれる故に、身は僅なれども、よく天地の物を生育する力をたすけなして、三才の一つにならびたてるも、唯此心一つによりてなり。故に人の心を尊びて、明德と名づく。天下の物にそれ〴〵の徳あれども、人の徳ばかり極めて明かなる物なればなり。然れども、此かたちを生れうけたる氣に清濁ある故に、智愚賢不肖ひとしからず。既に生れて後に、また世俗に染み、私欲にけがさるゝ故に、濁れる氣質いよ〴〵悪くなりて、明德の鏡曇り垢づけり。學

はたいその曇を磨き清めて、五常の性、常にあらはれ、人倫の間に、行はれんが爲なり。更に何事か此外にあらんや。此徳性に自ら萬理のをちくわかれそなはりたるを、人その理のまゝにしたがひゆく時は、人倫日用の事、皆しかるべき道あり。性に従ふを道と云ふはこれなり。されど道にはかたちなき故に、聖人物のいろしなをわき、事のよきほどを定めて、人此道を踏み、たがはざるやうに法をたておかせ給ふ道をさむるを教と云ふこれなり。その教はすなはち四書六經にのせたる所又は世々の人いひつる事行へるあとを記したる文これなり。今その教によりて、道に入らんとするものは、まづこの經書を読み、その義を明かにし、わが身の土のことわざに親しく移し、試みて道理必

ずかくの如くなるべしと一筋に思ひ定めて、これを踏み行ふ事必ずかくの如くにしておほせざれば、すておく事なきにあり。是をば儒者の學と云ふ。學んで聖人にいたらんことをもとむるには、これより外に餘の道なし。若したゞ書籍をひろく讀むばかりは、記誦の學なり。詩賦を巧につくるばかりは、詞章の學なり。みな藝術の類にして、道を學ぶに益なし。彼の佛法道教の類、異端の學と云ふ。いづれも聖學を妨ぐる事ある故に、その書をのみみる事をしも、深く戒めてせざれとなり。尙書に、帝舜の曰く、人の心はこれあやふし。道の心はこれかすかなりと。二つの心をわきて、心法をたておかせ給へり。それ心の體はもと一つなれども、その用、感に應じてあらはる所二すちあり。人の一身色香

聲味などの欲に觸れて發るを人の心と云ふ。道の本體心に備れるが、
 外の道理につれて直にあらはるゝを、道の心と云ふ。人の心は物にひ
 かれてながれやすき故に危し。道の心は欲に奪れて消え易き故にか
 すかなり。人よく此心をねりおほする時は、かすかなる道心常に明か
 にして、一身をつかさどり、あやふき人心常に明かにして、一身をつか
 さどり、あやふき人心常にひろまりて、道心に靡き従ふ。されど此心法
 いと容易からぬわざなるに依りて、世々の聖賢さまの教をたれ
 給ふ。孟子の曰く、學問の道他なし。その放心をもとむるのみと。放心は
 はなてる心なり。人の學問をするには、書をよみ、理をきはめ、心をねり、
 身をさむる事は、しなぐ多けれども、その道とする大概は、たい外

に放てる心をとりをさめて、内にかへし入るのみにありて、更に他の
 事なしとなり。それ人の心ばかり定めなく、覺束なき物はあらじ。慎む
 時は暫くをさまりて、爰にあるかとすれば、僅の怠りの間に忽ち放れ
 散りて、行く方も知られず。されど常々怠らずして、戒め慎む心深くば、
 すさび果てたる心なりと。本の住家にかへり住まざる事のあるべ
 きや。しかれども、未だよくねりおほせざる内は、まもり暫しゆるがせ
 なる時に、又放れ出る事なきにあらす。鷹は深山に生るれども、よく飼
 ひならす時は、懷きて人の心にまかす。牛馬は家にあるものなれども、
 暫く放ちおけば、こはいりてつかひにくし。心の常ならずして、頼みが
 たき事かくの如し。和歌にも此心多し。

心こそ心まどはす心なれ心に心こゝろゆるすな
 花にそめ紅葉にそめて誠なき人の心のあだし世の中
 色見えでうつろふ物は世の中の人の心の花にぞありける
 櫻花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ
 吹く風に雪のはたてはとゞむともいかで頼まん人の心は
 とにかくに思ひし事のかはる世はわが心とて頼みやはする
 幾度かおもひ定めてかはらん頼むまじきは心なりけり
 折りえても心ゆるすな山櫻さそふ嵐のありもこそすれ
 身を棄てゝゆきやしにけん思ふより外なるものは心なりけり
 いづかたに花咲きぬらんと思ふより四方の山邊にちる心かな

子の日すと春の野どとに露ぬれば松にひかるゝ心地こそすれ
 住みなれしやどをば花にうかれきて歸るさ知らぬ春の旅人
 花見にと人は山邊にいりはてゝ春は都ぞさびしかりける
 月のいる山に心をおくりいれて閑なるあとの身をいかにせん
 心の定めがたき事かくの如くなれども明徳の光は消ゆる時なく氣
 質人欲の曇深く隔たれる中よりも折々その光は現はるゝ物なり放
 れ散りたる心をもすは放れたりとかへり見る時は即ち身にかへり
 てすむ物なりされば學問の力をつみて明徳の曇を拂ひつくす時は
 彼の本體の光遂にはもとの如くに又明かなり人の性質様々に變れ
 ども各々その本性にかへれる時は彼も是も皆おなじ事也古歌にも

うき雲はたち隠せども隙もりて空行く月の見えもするかな
 夜とゝもに心の内にすむ月をあるとしるこそ晴るゝなりけれ

人ごとにかはるは夢の惑にてさむれば同じ心なりけり

人の心を一身の君神明の舍と云ふこと、天地の神明即ち人の魂にて、
 心はそのみあらかなり。故に此身をつかさどる君となりて、耳目鼻口
 髪膚手足の百體は皆そのつかはしめなり。然れども人よく敬して此
 君をおし立つる事を知らざれば、眠れるが如く酔ひたるが如くなる
 によりて、百體我儘を企て、色香聲味の類をひき入れて、各々好む所の
 欲をきはむ。故に心君却りて諸の奴にひき使はれ、神明のみあらか私
 欲のために踏み蹴る。爰にいたれば尊むべき人の身も鳥獸に遠か

らすなりぬ。若よく一度敬すれば、心君の醉夢忽ちに醒めて、私欲悉く
 消えうせ、百體の奴皆あとをさめて、君命に従ふ。これによりて古の
 聖世々の賢き人、敬を保つの教をくれぐれと説きおけり、敬の字をう
 やまふと訓み、つゝしむと訓みて、恐るゝ心戒むる心もあり。凡そ事な
 くて静なる時は、心の内清く明かに養ひことありて、動く時は心の事
 に應ずるきはを詳らかにみそなはし、心を内にたもちてはなたす、か
 たちを外に正しくして怠らず。内よりきざす私欲をとめ、外よりを
 かす塵欲をふせぎ、常に心を専にして、二つ三つに分けず、彼方此方へ
 走り翻らざるやうにする。事道を學び心をねるの法、これに過ぎたる
 はなし。故に此一字をば聖學の始めをなし、終りをなすの事なりとす。

孔子の語に己ををさむるに敬を以てすとあれば敬は身ををさむるの要なる事をしるべし。禮記の始めに敬せずといふ事なかれとあれば、三百の禮儀、三千の威儀も、敬の一字にておほへる事を知るべし。敬の修行は内外をかねて互に相養ふ内に心を慎む時は、外のかたちも自ら正しく、外のかたちを恭くする時は、内の心も自ら専なり。されど心はかたちなき物にて、取りとめがたき故に、外より保ちなすを工夫の手を入るゝ所ぞと、先儒のしめしには見えたり。もし敬するに心なければ、外の威儀その甲斐なし。況んや心外を飾るにあれば、内には主なくて私欲にあれなんをや。たゞ心敬するため、外を正しくす外を正しくするは、即ち内の慎みなり。二段の事にあらす。素より内に慎む

心深ければ、外には力を用ひざれども、ひきたえずといふ事なし。凡そ衣冠をかいつくろひ、顔色威儀正しくするは、敬にとりいるの法なり。心の居眠り傾けるを引き立て呼び覺すは、敬をとりつゝくるの法なり。心を一筋にしてわかつたず。一いろにして、交へざるは、敬をひまなくするの法なり。心さへ通りて、くらます鍊ひいれて、鈍らざるは、敬のしるしを試むる所なり。此事胡敬齋の説に見えたり。古周の武王御位につき給ふ初めに、師尚父大公を召して、黃帝顓帝の道を問はせ給ひければ、大公丹書と申す文に候。聞し召さまく思しなば、三日の御物忌ましまして申さる。武王教のまゝにし給ひければ、大公その時書を以て告げ申さく、敬の怠に勝つ者は吉なり。怠の敬にか

つ者はほろぶ義の欲にかつ者はしたがり欲の義にかつ者は凶なり
 と敬は慎みなり怠は怠りなり此二つ胸の内にて彼見勝負有り暫く
 もあひ保てる時なし吉と凶とは常に善惡にしたがふ心一たびつゝ
 しむ時は諸の善念ともに起こりて吉祥即ちこれにしたがふ心一た
 び怠る時は諸の善念ともにすたりて滅亡これにしたがふ義とは道
 理の公なるをいふ欲は人欲の私なり此二つは人に交り事に應ずる
 時にあたりて又常に勝負をなす義欲にかつ時は其事靡き従ひて幸
 あり欲義にかつ時は其事さかひもとて禍あり武王此書を聞しめ
 されて深くおそれさせ給ひければ凡そ御目にかゝる所御身にふる
 る物毎に皆戒めを銘じ給ひて今の世に傳はれりその後孔子周易を

賛じて敬以て内を直くし義以て外を方にすと宜ふもこれより出で
 たる事と見えたり敬する時は内直くして少しもゆがみ曲らず義を
 たつれば外方にして是非のきは少しも亂れあはず凡そ敬と義とあ
 ひ向ひて見る時は敬は内に扣へて慎みまもり義は外に向ひて戒め
 たいす内外あひたすくるの法なりされど義も亦敬にまきいれて見
 る時は敬して外にみそなはす所に義方の心をも兼たりと云ふなる
 べし人は此身のをさめがたきと云ふのみか絆多かる身をもちて憂
 節しげき世を渡るこそいと心苦しく覺束なきわなるべけれある
 文に世は海なり身は舟なり志は楫なりと云へり心をとる事の容易
 からざる趣きをよく譬へたり昔より亂れたる世は多く治れる世は

き世を経るをや。彼是やすげなき事ども多かる中に、たのむ所は志の
 梶一つなり。志とは何をかいふ。即ち敬のまもりなり。敬を忘れて心に
 任せたる人は、偏に門渡る舟の梶をたえて、行方もしらす風にかかせ
 たるが如し。遂の泊はしづみ果て水くづとなりなんも計られず。又歌
 に此心を、
 愚かなる心のひくに任せてもさてさはいかにつひの思ひは
 と詠めり。つくく。と是を思は。敬の一字を一瞬のほども忘るまじ
 き事と知らるべきなん。
 心に思ふことは口に云ひ、身になすよりもさきにあれば、一念さぎす
 始め必ず敬を忘れずして心を直く明かにすべきなり。毛詩三百篇の

少し世にたてる人も、よきは稀にて、悪しきがちなり。殊に末の世の習
 ひは昔に變りて日々にうすし。かゝる浮世の中を此うき身にて經る
 程に、世を海になすらへたり。ある歌に、
 世の中をわたりくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし
 と詠みけるは、世のわたり難き事を一しほ歎きたるなり。又古歌に、
 いかにせん身をうき舟に荷を重み終の泊やいづくなるらん
 と詠めり。これ身は舟にて、荷の重き故に、往來自由ならずして、いづく
 泊とだに知られざるは、身のわづらひ多くして、物毎に心のまゝなら
 ず、行末定めがたきなり。殊に女の身は縁に連れて、男に打ちしたがへ
 る物なれば、いよく思ふに任せざる事多きに、まして波風立ちやす

教も思無邪の三字にこもれるとかや。思無邪は思ひよこしまなしと讀む。孔子は九つの思ひをあげて、世の人に示し給ふ。一、視るには明かならん事をおもふ。二に聽には敏らんことを思ふ。三には色は温ならん事を思ふ。四には貌は恭からん事をおもふ。五に言は忠ならん事をおもふ。忠は心をつくすなり。物いふ事うらなく誠なるべしとなり。六に事は敬せん事を思ふ。慎みて侮らざればなり。七に疑ひは問はむことを思ふ。心につゝみ置かざれとなり。八に忿には難を思ふ。忿の起る時には災難あらんことを恐れて、早く堪へ忍ぶべしとなり。九に得るを見ては、義を思ふ。義を思ひ、利にまどはずして、取るまじき物を取らざれとなり。是を九思と云ふ。みな思ひよこしまなき心より物ごととにそ

の思ふべき所を思ふ事と知るべきなり。女は陰の類なれば、その心弱くてゆがみ易く、くらみて惑多し。故にとりわき心の直く明かならむ修行を露忘るゝ間なかるべし。待賢門院堀河が人は己を正くし理に疎からぬぞよき。己正しければ、邪に惑はずと云ひけるは、此心をしるにや。女のよこしまにて直ならぬと云ふは、人の言葉をすなほに聞かすして、その思はざる事までをも、とやかくと恐ろしくくり廻して探りもとむる事など、いと罪ふがき業ならずや。中將姫の曰く、女は殊に心のはれやらで、佛の御教に漏れぬべき身をもちて、男子の心をはかるこそ悲しけれ。ひがめる物は女に過ぎたるはなし。切めてすがたは女なりとも、心は男子のすくやかに御法に疎からぬやうにすべき

物なりと。これ佛を尊ぶより云へりつることなれど、女の心ざき

ひて、男子のすくやかなるを願へる心ざし、いと殊勝なり。されども

身の性をせめたひらぐる事古より容易からぬ業なりとす。韓非子が

曰く、志の難き事、人に克つにあらすして自らかつにあり故に曰く、自

らかつを強といふと、誠の強きと云ふは、人にかつをしも云はすして、

自らかつを云ふことなり。わが懿德皇后、天豊津媛の御詞にも、生をう

くる物は己が惡念妄想にかつを上とす。他の物にかつを中とす。己に

まけ、他人にまくるを下とすと宣へり。つとむべし。

楊子が曰く、仁は家なり。義は路なり。禮は服なり。智は燭也。信は符なり

と。符は誠のしるしとする物を云ふ。それ五常は人の天性萬の徳、身に

具足して足らざる所なし。外の家實はあるにしたらがひて、もとむるに

心なかるべし。もし此五つを忘るゝ者は家破れ、道塞がり、衣着す、暗き

に居、人に疑はるゝが如し。たとひ外相の富貴ありとも、人誰れかこれ

を尊ぶべき。宗尊親王のひめ君の云へりしとか。道徳仁義は人の食な

り。これを得る時は、山中海底にもよく身を養ひ、これを失ふ時は、帝都

金殿の内にもうるぬとは、此心なり。我に自ら信ずる所あらば、人にか

すまへられずとも、ふづくむ心あらんや。用明皇后、穴穂部皇女の曰く、

迷に深き者は、よしといへば心をよくし、惡と云へば心をあしくす。善

惡はわれにありて、人にあらず。人の言葉を借り用ふる事なかれと。若

し我がよきに人の誹り惡める心あらば、わが惡しきに、人のほむるを

とも詠めり。身のうきをうきまゝにするは捨てたるなり。身は心のま
まならぬ物なれば、世に任せて捨つとも切めて心一つは我儘なる物
なれば、とりたもちてはふらし捨つまじきぞ。されど心も縁にひかれ
て常ならぬ物なれば、遂には又いかゞならんも計り難しとしりて、ま
もる事忘れざるべしとなり。

女人のおもむきはあさはかにて、ひきゝ物かな。しな高き人を見て尊
び羨むは、猶さることなり。富みたる家の婦女衣裳美しく、人あまた具
したるを見ては、もし羨まざれば、必ずこれを嫉むかたち我よりすぐ
れたるは羨みて甲斐なき故に、たゞこれを忌むのみなり。我より家ま
どしく、かたち劣れる人をば、なべて必ず侮る心あり。これ皆外相につ

喜びて、世を欺く事をせんや。とにかくに唯人は心をこそむねとすべ
けれ。富める、貧しき、譽誹はもとより、我に預らざる事なればすべて世
に任せてあるべきなり。ある歌に

世の中の人はなにともしは清水澄みにごるをば神ぞ知るらむ
と詠めり。又ある歌に、

あはれてふ人もなき身をうしとても我さへいかゞいとひはつべ
き

と詠めり。世にあはれと云ふ人もなきうき身なればとて、われまでも
厭ひ果てゝ、心をはふらす事勿れとなり。又、

身は棄てつ心をだにもはふらさし終には何となるとみるべく

きて勝り劣りをはかり、わが身に持たる心と云ふものゝ貴く、心の貴からんは、人の力をからず、富貴も容儀も羨むに足らざる事を知らざるなり。むかし吉備津彦の曰く、外より來れる物は實にあらす。内より生り出る物を實とすと。近き世に、陽光院の御言葉とて記せり。人の中にいたりて、貴き物は罪なきものなり。世に貴き物、我は貴からずと。又京極宰相の妻の、貴きも貴からず、賤しきも賤しからず。貴賤は今日の行によるべしと云へる。皆此心なり。古歌に、

紫の一もと故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る

此歌にて、人は心一つをよく持ちなせば、外の賤しきも見惡きも、共によく見ゆる物としるべきなり。みながらは皆ながらなり。

かたちこそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん

此歌にて、外をよくせんは、心のまゝならず、心のよくならんは、己に任せることを知るべし。

埋れ木のしたは朽つれど古の花の心は忘れざりけり

此歌古の花の心を忘れずといふを、人の生るゝ始めにうけえたる徳性をまもりて、失ざるに譬へみるべし。上の歌どもを見て、心の貴むべき事をおもふべし。これを知らざる者は、人の外相のよきを嫉むのみならずして、却りて人の才徳あるをも嫉む物なり。潜夫論に、徳うすきものは人の善行を聞くことをにくむと云ひけるが如し。是も女にある世の常のさがなり。泥んや心を心とせざる者は、憂きも辛きも我が

心より自ら取りながら、その愛にたへずして、天を恨み人を咎む、いとおろかならずや、吾歌にも、此心をよめり。

心とやもみぢはすらん立田山松は時雨に濡れぬ物かは

世の中は千種の花のいろ／＼に心の根よりなるとこそきけ

婦人の心をたつるには、いかなるをが、その例とはするならん。それ陰陽わかれて五行となり、木と火とは陽につき、金と水とは陰につく。土は陰陽を兼ねたり、女は陰の類なれば、金と水とにかたどるべし。萬の物に體用をなはらざるはなし、女の心さだかに正しきは體なり。人に従ひ使ふるは用なり。金の本性は金にあり、金は百度きたひても減らず。千歳埋れても朽ちず、水は方圓のうつは物にしたがふとて、圓き物

に入るれば圓く、方なる物に入るれば方なり。女のかたちも心も、物いひ人に交はる事にいたるまで、うはべの柔かにて、物によく従はん。事は水の如くにて、心の底さだかにて、まもりの固からん。事は金の如くなるをぞ、能くその例に叶へりといふなるべし。鮑女宗が詞に、專一なるを以て、貞とし、よく従ふを以て、順とすといへり。專一とは専らにして、二つなきをいふ。又魯師春姜が教にも、婦人は順従をつとめ、貞愼を操るとぞ。順従は皆従ふなり。貞愼は心さだかにて、誠あるなり。人に仕へては、順従を事のつとめとし、己ををさむるには、貞愼をまもりの始めとす。又左傳に、妻は柔かにして正しといへり。柔正は即ち順貞なり。皆是婦人の道、貞を體とし、順を用として、かたつゝにすてず、共に兼ね備

ふべき心をあらはせるにあらすや。凡そ女は物柔にて、憎げなく萬に
 すかされ易きほどなるを、よき品なりと昔より定めあひぬる事なれ
 ど、それは唯用のうへばかりをこそ云ひつらん。本體の金のみさを
 身のある限り固くまもりてくだす事なく、如何ならん憂節をへて、身
 は千々に碎かるゝとも、これを失ふ事なかるべし。漢の班婕妤が賦に、
 梧桐のさだかに脆き事ありと云へども、あに榮しばむに、それ心を異
 にせんやと男を松のさだかにて常に榮ゆるに譬へ女を梧の脆くし
 て、しばみやすきに譬ふ。されど世の榮え衰ふるためには女なりとも、
 心ざしをかへじとなり。又毛伯成といふもの、常にわが心ざしをのべ
 て曰く、むしる蘭の如くに碎かれ、玉の如くにをらるゝ事をするとも、

蓮の如くにしき、艾の如くに榮ゆる事をせじと、蘭の香あり、玉の麗は
 しきが爲にくだきをらるゝが如くなれるとも、蓬艾のいやしまれて、
 蔓り榮ゆるが如くはならじとなり。又ある文に、けがらはしく汚きに
 をれども、染み汚るゝ事なきは、明珠のさいれ石の中にあり、蓮花の濁
 れる水の内にあるが如しといへり。又古歌に、
 草も木も秋のすゑ葉は見えゆくに月こそ色はかはらざりけり
 夜をかさね結ぶ氷のしたにさへ心深くもすめる月かな
 深き夜の露ふき結ぶ木枯に空すみ昇る山の端の月
 など、詠みけるを見て、さだかならん心ざしのほど、よく思ひと
 るべきなり。

の氣をしのべば、百日の憂をまぬかると云へり。もし我が忿をおさへざれば、人の忿をひき添へて、その事も又やぶれ果つべし。例へば野を行きて、むばらにかくれるが如し。心を静かにすれば、とけ安し。煩ゆる時は、愈かけまとはる。人をかこちて、共に腹立つは、扇をもちて火を煽ぐが如し。愈燃えあがるべし。まして我が恨の義にあたらざる事もありなん。又さゝふる者の偽も知られず、兎も角もなく、唯打ちのどめてあらましかば、ねたしと思ふ人も、遂には又心解けて、情知る物ぞかし。此理を知らず、すゝるにくねくしく、いふりなる心のみ深くして、只我れからと身を苦しめ、人にも憎まるゝ事いと淺ましく愚なるかな。ある歌に、

陰陽みち異にして、男女徳同じからず。をとこは陽なれば、剛く強きにあかず。女は、陰なれば、唯柔に弱からんとをむねとす。凡て女は何事にも我が身をへりくだりて、たかぶれる心なく、つゝまやかに恭しく、人を先だて、己を後にし、善をしては己が名をあらはさず。惡あれば身にひきて遁れず。はちしめられてもよく堪へ忍び、常におそるゝ心深きをば、卑弱の道なりといふは、女誠の心なり。中にも忿の心おこらん時に、よく忍びておさへ留るをば、いと重き慎みとする事なり。杜子美が詩に曰く、忍びすぐれば、事喜ぶに堪へたりと、萬のはらたしく恨めしき事をば、暫くねんじておし忍びすぎぬれば、やがて心のしづまれる時、人の心を損はざる故に、わが心の内いと喜ばし。古き詞にも、一時

すませども浅き瀬に立つうは浪のしづめがたきは心なりけり
と詠みたるにて物にはらあしくなり易きは心の浅くせばき故なる
事を見るべし。また、

よし野川水の心は早くとも瀧の音にはたてじとぞ思ふ

此歌にて忿のおこる始めに、いか程心いらちて堪へがたくとも、先づ
もてしづめて、詞にいださるるをよしとする事を知るべし。また古歌
に、

逢坂の關のあらしは寒けれど、行方知らねば侘びつゝぞふる

ふかき夜の窓うつ雨に音せぬは浮世を軒の忍ぶなりけり

つらきをもうきをもしのお思ひこそ心のみちの誠なりけり

身をしらで人を恨むる心こそ散る花よりも果敢なかりけれ

身の愛を人の辛きと思ふこそわれともいはじわりなかりけれ

などゝ詠みけり。人は唯身を忘れ、我れから愛物と思ひ知りて自らせ

むるにしく事なしたとひ無き咎にあふ事などのある時も、わが心だ

に曇なくば、遂に誠のあらはれずして果てなんや。此心を歌にも詠め

り。

大空を照りゆく月し清ければ雲隠せども光消なくに

范忠宣公の子を戒めける心に曰く、愚なる者にて、人のあしきを咎

むるには、その心明かなり。敏きものにて、己が悪しきをゆるすには、

その心くらし。たゞ常に人をゆるさば、聖賢の位にいらん事も難かる

まじきぞと。況んや我自らせむる事厳しければ、人を責むるに、自からその暇なく、譬よしある恨をも、わが身の上に顧みて、よく／＼思ひあはする事あれば、その恨自ら消えて、あとなくなる事も多きをや。

うき節は身に積れどもくれ竹のよにかこつべき言のはもなし

心だに我が思ふにも叶はぬに人を恨みん道理ぞなき

己が身の己が心にまかせぬを思は、物を思はざらん

など、詠める歌にて、心を思ひとるべし。まして大やう、人の惡しきは、我よりなせる事多きをや故に又、

いかばかり人のつらきを恨みましようき身の科と思ひなさずば

と詠めり。人の心も我に異ならざれば、たい己を責めて、誠あらんに、人

誰れか我に惡しかるべき。孟子の曰く行ひて得ざる事あれば却りて己にもとむると即ち此心なり。例へば人を愛すれども、人われに懷かず、善を施せども、人これに従はざるは、道を行ふに行ひえざる事ある物也。此時に人を咎めず、身にかへりて己に未だ盡さざる所ありやと、自らたづねもとめて、愈つくすべしとなり。君子の心は、へ常にかくの如し。昔秋田城介義景が詞に、何事も我れを思ひすぐすより、あやまちはある物なり。又日野左衛門が妻の己がよこしまを知る人は、道を知る人の端なりと云へるは、皆此心を知れるにこそ。

古子貢が一言にして身終ふるまで行はん事ありやと、孔子に問ひければ、孔子の答に、己が欲せざる所、人に施す事なかれと云ふ恕の一字

の義をしめし給ふ。孟子も、恕をのつとめておこなふ。仁をもとむる事、これよりちかきはなしと云へり。恕とは我が心をおして、人に施こすといふ。仁者はその心公にして、人我の隔なき故に、わが心に願はしき事を即ち人にほどこして、人とこれを共にす。推す力をからぬ也。世の常の人は、身をわたくし物にして、人の上を思はず。願はしきことを獨のみ得んとする故に、人には願はざるかたを推しやる。これ正しく仁心にあひそむけり。よりて仁道をもとめまく思ふには、人の心も我に同じき事を知りて、わが欲心をおさへ、心に願はしからぬ事をば戒めて人に施さず。即ち是れ我が願はしき事を、人におす心なり。これをおしきはめて、人の上をもわが如くに思ふ時は、即ちこれ仁者の心なり。故

に仁道をもとむるには、恕よりもたゞちなるはなし。中庸に、道人に違からず。その法とする所わが心にある事を説けるも、恕の義によりてなり。古歌に、

思ひいれば人も我が身もよそならず心の外の心なければ

と詠みけるぞ、此心には叶ふべきなり。萬里小路中將季時の曰く、物我なき時は、物よく應ず。我ある時は、物と我とたゞかひて、然も物に我負くるなり。ゆゑに古人こゝにといまりて、樂しめりと。それ仁者の心は、萬物と一體と見て、身を私にせず。心を天地のためにたて、我がためにのみ思はざる故に、人と我との隔なし。心公にして、あはれみ深く、諸の人我慈愛の内にある故、我に従はずと云ふ事なし。凡そ身を私にし

て、人^{ひと}と利^り害^{がい}を争^{まが}ふが仁^ににあらずと云ふ事は、大^{おほ}やう誰^{たれ}れも知^しる事^{こと}に
 て、是非^{しはい}を争^{まが}ふ事^{こと}も、また利^り害^{がい}を争^{まが}ふと變^{かは}りなき事^{こと}を知らず、仁^に者^{もの}は利^り
 あれども、善^{ぜん}あれ共^{とも}皆^{みな}人^{ひと}と共^{とも}にせまほしく思^{おも}ふ故^{ゆゑ}に、我^{われ}れ獨^{ひとり}得^えてあき
 たらむ心^{こころ}なし、顔^{かほ}淵^{ふち}は人^{ひと}己^{おのれ}を犯^{とが}せども、その是非^{しはい}を計^{はか}らざる事^{こと}、これが
 爲^{ため}なり、天^{てん}下一^{いっ}理^りなれば、利^りも善^{ぜん}も皆^{みな}公^{こう}の物^{もの}なり、天^{てん}より人^{ひと}をみる時は、
 親^{おや}き疎^そきななし、若^もし我^{われ}れ獨^{ひとり}利^りをしめ、善^{ぜん}を私^しにせば、天^{てん}これをゆるさめ
 や、況^{いか}して人^{ひと}皆^{みな}我^{われ}を憎^{にく}みて仇^{あだ}とならば、その善^{ぜん}既^{すで}に善^{ぜん}ならずして、遂^{つい}に
 又^{また}害^{がい}をうくべし、己^{おのれ}にかつ者^{もの}は、よく人^{ひと}にかちて、己^{おのれ}にかたざる者^{もの}は、人^{ひと}
 にかつ事^{こと}ありといへども、遂^{つい}には負^{まか}けぬべき理^{ことわり}も、これに因^よりて、愈^い明^{めい}
 けし、よく此^{この}心^{こころ}を辨^わふる時は、仁^に道^{みち}にちもち入^いるに、その入^いるを端^は

を知りて入るならん



比賣鑑第壹編終



